

文部科学省委託

令和2年度教員養成機関等との連携による 小学校外国語の専門人材育成・確保事業

(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)

— MEIKAI-JOE 小学校外国語科等講座 —

成 果 報 告 書



明海大学

令和3年3月

はじめに

令和2年に創立50年を迎えた明海大学は、平成28年度に、教職を目指す学生に対して、免許状の取得に必要な教職課程の履修、教育実習、教員採用試験、赴任後に求められる授業実践力など、教職に関する様々な課題をトータルにサポートするために全学的な組織である「教職課程センター」を設置した。また、教職を目指す学生や教職課程担当の教員が、計画的・継続的に大学が所在する浦安市をはじめ広く千葉県、東京都等に所在する小学校、中学校、高等学校、これを所管する教育委員会及び地域社会に対して、本学の教育研究の成果を発信し、還元することを目的に、「教職課程センター」設置に併せて、「地域学校教育センター」を設置した。その上で、東京都立飛鳥高等学校、東京都立田柄高等学校(以上平成28年3月)、東京都足立区(平成29年1月)、東京都立竹台高等学校、東京都立南葛飾高等学校(平成29年1月)、千葉県浦安市教育委員会(平成29年3月)、東京都立葛西南高等学校(平成30年3月)、千葉県立浦安高等学校(平成31年3月)、秋田県横手市(平成31年3月)と教育に関する連携協定を締結して、定期的に地域の小学校、中学校や高等学校の教育支援を行う取組を強化してきた。上述の都立飛鳥高等学校、都立田柄高等学校、都立竹台高等学校や都立南葛飾高等学校は、在京外国人生徒に対する日本語教育支援が主となる取組であるが、それ以外は、児童生徒の英語力の強化や教員研修などの英語教育支援が主たる取組である。具体的に、小学校英語に特化した取組について挙げると、東京都足立区に対しては、小学校児童が本学に来て一日英語漬けを体験する「明海大学あけみ英語村」、小学校教員の英語授業力の向上のためのアドバイザー訪問指導などを継続的に実施してきた。千葉県浦安市教育委員会との連携では、学生による小学校英語指導補助、校内研修への指導助言、秋田県横手市との連携では、研修会の実施などである。

また、明海大学は平成2年以来、中学校・高等学校の英語科教員の免許取得ができる教職課程認定を国から受けてはいるものの、小学校教員の教職課程認定は受けていない。しかしながら、現行学習指導要領の告示前の中央教育審議会の審議の経過や文部科学省の英語教育改善の動きなどをとらえて、平成30年度には、小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)から登録団体としての認証を受けた。そして、同年度から、教職課程に「小学校英語基礎概論」という科目を新設して、小学校で実施されている外国語活動や令和2年度から実施が見込まれていた教科・外国語について十分理解した英語科教員の養成に努めてきた。

このように明海大学は時代を先取りして、大学教育の改革に努めてきたところであり、まさにこうしたときに文部科学省が公募した「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」へ参画することは時機を得たものであると考え、応募することとした。

本成果報告書においては、この事業に応募するまでの取組、委託決定後から講座実施前までの取組や各講座の内容を明らかにするとともに、各講座への参加者のリフレクションに関する分析、各講座参加者の評価アンケート結果や分析を詳説した。本成果報告書が広く全国の小学校英語教育の関係者の皆様方の参考となれば幸甚である。

令和3年3月
明海大学副学長・外国語学部長
高野 敬三

目次

はじめに

I 事業概要

- | | |
|-----------------------------|----|
| 1. 事業委託決定までの取組 | 5 |
| 2. 委託決定後から講座実施までの取組 | 9 |
| 3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事録 | 11 |
| 4. 講座開発・実施チーム設置要項及び委員名簿 | 16 |
| 5. 組織図：協力・連携体制 | 18 |

II 講座概要

- | | |
|----------|----|
| 1. 第1回講座 | 19 |
| 2. 第2回講座 | 22 |
| 3. 第3回講座 | 25 |
| 4. 第4回講座 | 29 |
| 5. 第5回講座 | 32 |

III 講座受講による意識の変容

- | | |
|--|----|
| 各回のリフレクションシートの内容及びリフレクションシートから見える成果と課題 | 36 |
|--|----|

IV 講座内容に対する評価

- | | |
|-----------------------------|----|
| 各回の評価アンケート結果分析及びクロス集計を用いた分析 | 45 |
|-----------------------------|----|

V 講座運営に対する評価

- | | |
|------------------|----|
| 全講座総合評価アンケート結果分析 | 64 |
|------------------|----|

VI 全体総括

VII 教育委員会・受講者等の総括

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 東京都足立区教育委員会の総括 | 73 |
| 2. 東京都足立区受講者の感想 | 74 |
| 3. 千葉県浦安市教育委員会の総括 | 75 |
| 4. 千葉県浦安市受講者の感想 | 76 |
| 5. 秋田県横手市教育委員会の総括 | 77 |
| 6. 秋田県横手市受講者の感想 | 79 |
| 7. 講座担当講師 | 80 |
| 8. J-SHINE (鈴木事務局長) | 84 |
| 9. 運営業者 (株式会社モアカラー) | 85 |

終わりに

I 事業概要

1. 事業委託決定までの取組

以下、明海大学が「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」に応募して事業委託が決定するまでの取組、委託決定後から各講座実施までの取組や事業実施のための組織体制等について詳説する。

1 公募要領の公表

文部科学省から、「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」に関する公募が公示され募集が始まったのが、令和2年6月3日であった。公募要領によれば、その趣旨に、「小学校中学年での外国語活動、高学年での外国語科が導入される新学習指導要領(平成29年3月31日告示)を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築することが喫緊の課題である。このため、現職の小学校教師等を対象に外国語活動及び外国語科(英語科)の指導に対応する講習等を開発し、実施する。」とある。また、事業の内容としては、「小学校普通免許状あるいは中学校普通免許状を有する現職の教員、臨時的任用職員、非常勤講師、教員養成課程の学生、小学校外国語教育に関わる者(特別免許状授与者又は特別免許状の授与が期待される人材(ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な人材等))を対象に外国語活動及び外国語科(英語科)の指導に対応する講習、講座等を開発し、実施する。その際、受託者においては教育委員会等と連携し、質の高い授業を行える指導体制を構築するために必要な講義・講座等の開発・実施にあたること。」とある。

その上で、具体的な実施例として、次の3つが示されていた。

- 中学校教諭免許状(外国語(英語))を取得するための免許法認定講習等の開発・実施
- 小学校外国語科・外国語活動に係る履修証明プログラム、もしくはそれに準ずる講座等の開発・実施
- 特別免許状授与者等が小学校外国語教育に関わる上で必要とされる資質や能力を養成する講習の開発・実施

さらに、今回の公募では、留意事項として、新型コロナウイルス感染症に係る現下の状況を鑑み、本来講習計画等において実施を予定していた講習について、オンラインによる講習等の実施に限定することや、教育委員会・受講者に負担がかからないように配慮することなどが示された。また、実施する講習・講座については、継続的に能力の育成を図り、また、免許状更新講習との相互認定を可能にするため、一回限りの講演会やセミナー等ではなく、複数回にわたって行われ、かつ総時間数が少なくとも6時間以上の講習・講座であることが望ましいことや、講習・講座の開発に伴い、作成した教材や関連資料等をわかりやすくまとめ、成果物としてホームページで広く公表する等、講義・講座終了後も受講者が自主的に学び続けることができる、受講者以外の者もアクセスできる等、成果普及に努めることと示されていた。

2 応募準備開始

前述の公募要領によると、公募開始が令和2年6月3日で、公募締切が6月24日となっており、締切まで間がないこともあり、以下に示すような段階を経て、企画提案書(事業実施計画書)を提出することとした。

①学内組織の検討

事業実施主体は、明海大学教職課程センター・地域学校教育センターとし、事務局には本学企画広報課が当たることとした。その上で、本事業に係る教職員の担当を決定した。

②協力機関の検討

明海大学では、小学校英語の導入を視野に様々な改革を実施してきたところであるが、まだその取組は始まったばかりであった。そこで、具体的な事業実施内容を決定し実行に移していく上で、過去20年にもわたり小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINE(小学校英語指導者認定協議会)を協力機関・外部有識者とした。具体的には、J-SHINEの事業運営委員会の藤田保・上智大学言語教育研究センター教授(J-SHIE専務理事)、佐藤久美子・玉川大学大学院名誉教授・特任教授(J-SHINE理事)及び鈴木菜津美事務局長に協力を仰ぐこととした。

③連携教育委員会の検討

前述のとおり、すでに本学と教育に関する連携協定を締結して事業を実施している、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会を連携教育委員会として、管下の小学校の先生方を対象とすることとした。

④再委託先の検討

公募要領では、新型コロナウイルス感染症の流行といった状況から、オンラインによる講習等の実施に限定する旨記載されていた。明海大学でも、令和2年度当初から遠隔授業を実施はしているもののオンラインによる配信には技術的に不安の面があった。そこで、オンライン講座の撮影・配信サポートやアーカイブ制作等オンライン環境整備を実施していただくために、この分野では実績のある(株)モアカラーに再委託を掛けることとした。

3 公募事業への応募

特に、協力機関として本事業に加わっていただくこととしたJ-SHINEとは、6月9日、6月12日と6月14日にZoomで協議を重ね、事業目的、事業内容など具体的な実施内容について原案を作成した。また、6月17日には、本事業の再委託先として選定した(株)モアカラーと具体的な講座内容の撮影・配信方法等について協議をした。さらに、連携教育委員会とした東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会や秋田県横手市教育委員会には、明海大学がこうした事業に応募することや具体的な事業内容の案を示した上で、6月18日に連携する旨の合意を得ることができた。

その上で、明海大学は、6月24日に、以下のとおり、事業の実施体制、実施内容、実施方法や実施日程などを定め、企画提案書(事業実施計画書)を文部科学省に提出した。

実施体制

実施体制は、検討委員会、講座開発・実施チームと実施事務局とで構成した。

検討委員会は、本事業の全体進行管理、協力機関との調整、本事業に係る連携教育委員会との間の調整、本事業の在り方及び成果目標の検討、関係学校・関係教員等への本事業の周知、講座開始後の本事業の中間評価の実施及び改善策の検討、本事業の成果公表に向けた内容の検討などを行うこととした。

講座開発・実施チームは、講座内容の検討及び作成、講座における教材・資料の作成、足立区立小学校、浦安市立小学校及び横手市立小学校における講座の実施、講座途中及び終了時の評価の実施や成果の発表・本事業終了時における事業全体の評価の実施を行うこととした。

実施事務局は、検討委員会、講座開発・実施チーム等の運営、経理事務全般や本事業に係る広報全般を取り扱うこととした。

実施内容

本学と教育連携に係る協定を締結して、これまで様々な取組を実施してきている東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会及び秋田県横手市教育委員会と連携し、小学校英語指導者登録団体として本学を認証している小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)の協力を得て、明海大学は、小学校の教師の負担を軽減しつつ質の高い授業を行える指導体制を構築するという趣旨を踏まえ、以下の小学校外国語科等講座を実施する。

【目的】

多くの学級担任が抱えている小学校外国語科・外国語活動の指導に対する不安感を払しょくし、授業に積極的に取り組む意欲を向上させるとともに、円滑に指導できる指導力及び英語力を養成する。

【受講対象者】

東京都足立区、千葉県浦安市及び秋田県横手市(3自治体ともに明海大学と連携協定を締結)公立小学校の教員とする。

【主な講座内容】

- ・足立区、浦安市及び横手市の公立小学校の学級担任が共通して抱えている課題を扱う。
- ・昨年度までの学校訪問・訪問研修等や「英語教育コアカリキュラム」を踏まえて本学において平成30年度に開講した科目「小学校英語基礎概論」の授業を通して、主に以下の課題があることがわかった。
 - ① 学級担任が単独で行う授業における指導方法と指導の改善
 - ② ALTとのTTにおける望ましい学級担任の指導の在り方
 - ③ 指導と評価の一体化の具体的方法
- ・こうした課題解決を図るために、以下を「小学校外国語科等講座」の講座内容(案)とする。

【第1回】学習指導要領

学習指導要領に記されている外国語科・外国語活動の目標・内容等を理解する講座とする。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。

【第2回】望ましいチーム・ティーチングの在り方

チーム・ティーチングにおける学級担任の役割、ALTの役割について理解できる内容とする。具体的には、学級担任役の本学の学生とALTがチーム・ティーチング(Small TalkやActivityのモデル会話などを含む)を行う。併せて、短時間でできる打合せの方法やClassroom Englishや絵本の読み語りなどを練習したりする内容も入れる。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。

【第3回】Small Talk の実際とデジタル教科書の使い方

本年度から始まった外国語科における教科書及び外国語活動において活用する教材のより効果的な使い方を
知ることができる内容とする。なお、後半には講師によるMicro Teaching (Small Talk や必然的なActivityな
どを含む)を実施する。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。

【第4回】学習指導と評価

小学校外国語科・外国語活動における指導と評価の在り方について、具体的なActivityや発表に基づきなが
ら理解する内容とする。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。

【第5回】本講座のまとめと中学校への接続の期待

本講座のまとめとして、講師と受講者及び受講者同士が小学校外国語科・外国語活動のよりよい授業の在り方
について協議する内容とする。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。

なお、講座の実施に当たって、【小学校外国語科等講座の内容・進め方の特色】として、以下のことを付記
した。

- ・各講座については、リアルタイムのオンラインとアーカイブ(講座内容や資料の保存)の併用を図るものとする。
- ・受講者の負担感の解消と受講者一人一人の多様なニーズに応えるとともに、質の高い授業を行える指導体制
を構築する上で必要な講座を提供するため、
 - ①「複数回・総時間数が6時間以上の講座が望ましい」とする本事業の公募要領に則り、講座回数を5回、
総時間数を7.5時間とする。
 - ② 各講座は、受講者の主体的な参加を促すために、リアルタイムのオンライン講座とするとともに、受講者
の時間的負担の軽減を図るためアーカイブを活用する。
 - ③ 各回のオンライン講座は90分とするが、そのうち30分程度は講師と受講者との間でのやり取りを随時行う
(ワークショップ型)。
 - ④ オンライン講座をより充実した内容とするため、受講者がいつでも振り返ることができるように、オンライ
ン講座をアーカイブで視聴できるようにする。また、予め提供された資料(動画を含む)をアーカイブで視
聴できるようにする。
 - ⑤ 第2回と第3回の講座内容の中には、本学の学生が教師役となり、児童役の他の学生に対して行う授業
の実際を取り入れ、講師の指導がなかった時とあってからの変容等がわかるように、授業改善のポイント
の理解を促進する資料等を加える。
 - ⑥ 講座は講座開発・実施チームの指導担当者と受講者(小学校の教員等)とのインタラクティブなワークショッ
プ型となるようにする。

実施方法

- ① 検討委員会は、本事業の基本方針(在り方や講座内容の方向性)等を決定するとともに、講座開発・実施チー
ムはそのことを踏まえて、講座内容の詳細を決定し実施する。
- ② 講座開発・実施チームによる講座内容が決定した段階で、各講師はオンライン講座の教材・資料を作成し、
講座前にアーカイブに格納する。
- ③ 各講座はZoomによるオンライン講座とする。
- ④ 各講座の講師は、講座開発・実施チームの担当が当たる。

- ⑤ 明海大学は、連携教育委員会と協議の上、「講座内容・講座実施期日・時間等一覧」を作成して、連携教育委員会に周知する。
- ⑥ 連携教育委員会は、本講座を受講する学校若しくは教員を決定する。
- ⑦ 本事業で作成した教材や関連資料については、本事業終了後に、本学ホームページで広く公表することにより、受講者やその他受講者以外の教員等がアクセスできるようにして、成果の普及に努める。

実施日程

6月から7月までを講座内容の決定、7月から9月までを講座内容・方法の開発、10月から12月までを全5回講座のオンライン実施として、事業開始の最初、中間期と最後に検討委員会を開催することとした。

4 文部科学省からの決定通知

7月7日には、文部科学省から、明海大学に事業を委託することを予定していること、事業採択に当たり改善・見直しを行うべきことなどが文書で指摘された。これを受け、明海大学は、企画提案書(事業実施計画書)を修正して、文部科学省に7月15日提出した。そして、8月4日、文部科学省から明海大学を委託先として正式に決定した旨、文書通知があった。

2. 委託決定後から講座実施までの取組

委託決定を受け、明海大学はその旨を連携教育委員会と協力機関であるJ-SHINEや(株)モアカラーに通知して、実施に向けての準備に入った。「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」を明海大学が受託したことから、まずは、事業を遂行するための「検討委員会」の設置要綱、講座内容の開発のための「講座開発・実施チーム」の設置要項(詳細は後述)を8月4日に決定した。ここで事業名がかなり長いものとなることから、明海大学のMEIKAI、協力機関のJ-SHINEのJ、そして教育委員会のOffice of Educationの頭文字をとって、MEIKAI-JOEという略称を使用することとした。

以下が、そのMEIKAI-JOE事業を円滑に進めるために取り組んだ内容である。

1 明海大学事務局の取組

事業の正式決定を受け、企画提案書(事業実施計画書)に基づき事業運営を円滑かつ適切に行う必要があることから、以下の取組を行った。

① MEIKAI-JOE ミーティングの実施

学内組織ではあるが、本事業の進行管理のため、「MEIKAI-JOE ミーティング」を事業正式決定直後の8月から毎週月曜日に定例開催することとした。このミーティングは協力機関が1つ、再委託会社が1つ、教育委員会が3つあり、明海大学がそれぞれとの連絡調整を行ったり、協力機関・再委託会社・教育委員会相互間の中で明海大学が本事業実施主体として連絡調整することが多くあることから、事業の進行管理のために実施してきた。また、MEIKAI-JOE事業の肝となる講座内容について、明海大学教員が共通理解の

下、教材開発を行う必要があることから、併せて教材開発の検討も行ってきた。特に、明海大学教員が担当する回の講座については、その開発した教材について、協力機関であるJ-SHINEに指導を仰いだ上で、微修正を行い講座実施日に備えた。

② MEIKAI-JOE 共有アドレスの運用開始

MEIKAI-JOE 事業に参加する各区市の小学校の先生方、各区市教育委員会事務局、J-SHINE 及び(株)モアカラーとの連絡専用の共有アドレスを10月に取得して運用を開始した。

③ 各区市教育委員会に対する貸与機材等の配備

明海大学は事業計画を遂行するために、各区市の拠点校に配備するレンタル機器等の購入を行った。そして、各区市教育委員会には、10月8日に、Windows ノートパソコン 1台、モバイルWi-Fi ルータ 1台、ビデオカンファレンスツール CONNECT 1台を郵送して講座実施に備えた。

④ 検討委員会の企画・開催

企画提案書(事業実施計画書)や8月4日に決定されたMEIKAI-JOE 検討委員会の設置要綱等に基づき、事業期間中の検討委員会の開催の準備を行った。新型コロナウイルス感染拡大が続く中であったので、3回行うこととしていた検討委員会をすべてZoomで開催するとともに、MEIKAI-JOE 検討委員会の下部組織である講座開発・実施チームとの合同会議とすることとした。

第1回MEIKAI-JOE 検討委員会は、9月15日に実施してすべての協議題について賛同をいただいた。中間期の事業評価を協議するため、第2回検討委員会を12月9日に開催して、これまで実施してきた第1回から第3回の講座に関する受講者のアンケート結果を説明して評価と改善点を協議した。そして、令和3年2月22日には、本事業の締めくくりとして検討委員会を開催して、事業の最終評価を確認した(検討委員会についての詳細は後述)。

2 教育委員会への連絡・調整

事業の正式決定を受け、8月中には、足立区教育委員会、浦安市教育委員会及び横手市教育委員会に連絡をとり、全5回の講座の日程、時程の調整作業に入った。併せて、各教育委員会管下のどの小学校を拠点校(会場校)にするか、また、参加教員の決定を依頼した。

その結果、実施日を、10月20日、11月18日、11月25日、12月16日と12月22日に決定した。また、開始時刻については、各区市の教育委員会と協議して、午後3時から午後4時30分とした。

拠点校や参加者については、MEIKAI-JOE の全5回の講座開始前には、最終的に決まった。拠点校(会場校)については、足立区が区立皿沼小学校及び区立亀田小学校、浦安市は市立明海小学校、横手市は市立雄物川小学校と決定した。参加者については、足立区が54名、浦安市が22名、横手市が22名と決定し、その他、拠点校に集合しない拠点校外からの参加者についても、足立区が56名、浦安市が35名、横手市が3名となった。ここに、総勢192名が参加する体制が整った。

3 (株)モアカラーとの連絡・調整

事業の正式委託を受け、8月12日には、(株)モアカラーと具体的な講座配信について打合せを実施した。拠点校の決定や参加人数を基に、明海大学をスタジオとして動画を配信することとし、どのように各区市の参加者にZoomを使用した動画配信を実施するかについて協議を行った。併せて、参加する小学校の教員の利便を考え、MEIKAI-JOE 専用のWeb ページを設計することとした。その後、9月3日にも詳細に動画配信方法を協

議した。10月2日には、各拠点校に郵送配備するパソコン、Wi-FiやビデオカンファレンスツールCONNECTの調整を実施した。10月13日、15日には、各区市との接続テストを実施して第1回講座の実施に万全を期した。

4 J-SHINEとの連絡・調整

事業の正式決定を受け、8月26日には、藤田保・上智大学言語教育研究センター教授(J-SHINE専務理事)、佐藤久美子・玉川大学大学院名誉教授・特任教授(J-SHINE理事)及び鈴木菜津美事務局長とMEIKAI-JOE講座についてさらに協議した。併せて、MEIKAI-JOE全5回の講座の実施日について合意を得た。協議の結果、講座内容の具体については、各区市からの要望も聞くため、調査を実施することとした。また、J-SHINEと再委託先である(株)モアカラーとの打合せが必要であることから、9月11日にZoomで協議を実施した。

5 動画配信スタジオの設置

全5回の講座を動画撮影してオンライン配信するため、明海大学浦安キャンパスの講義棟2階の2203講義室をスタジオとすることとした。全5回とも、各講師がスタジオで講座を配信する形式を採用した。講座実施日には、(株)モアカラーの動画撮影・配信スタッフから本学に来校していただき、午前中の機器のセッティングから、リハーサルと本番動画配信まで担当していただくこととした。

6 明海大学教職課程学生への本事業の周知

講座実施に当たり、本事業が明海大学教職課程を履修している英米語学科の学生にとって意義のある取組となると考えて、「小学校英語基礎概論」を履修している学生などにZoomによる講座への参加を呼び掛けた。その結果、25名の学生が参加登録をして学修することとなった。また、後述の第2回講座及び第3回講座には、本学の学生も配信された動画に参加するようにした。

3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事録

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要綱及び構成メンバーを定めた。また、検討委員会は3回実施した。議事録も併せて示す。

1 設置要綱

令和2年8月4日

令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE、連携教育委員会との検討委員会設置要綱

(設置目的)

第1 明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(以下、「本事業」という。)を遂行するため、標記の検討委員会(以下、「MEIKAI-JOE

(MEIKAI, J-SHINE and Office of Education ; メイカイ・ジョー) 検討委員会」という。)を設置し、本事業を遂行する。

(検討内容)

第2 MEIKAI-JOE 検討委員会は、次の事項を所掌する。

- (1) 本事業の全体進行管理に関すること。
- (2) 本事業に係る連携教育委員会との間の調整に関すること。
- (3) 本事業の在り方及び成果目標の検討に関すること。
- (4) 本事業の中間評価の実施及び改善策の検討に関すること。
- (5) 本事業の成果公表に関すること。
- (6) その他必要な事項に関すること。

(構成)

第3 MEIKAI-JOE 検討委員会は、次の委員をもって構成する。

明海大学教員、学識経験者 (J-SHINE)、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会職員

2. MEIKAI-JOE 検討委員会には、委員長及び副委員長を置く。
3. 委員長は、明海大学副学長・外国語学部長の職にある者を当てる。
4. 副委員長は、委員長が指名する。副委員長は、委員長を補佐し、委員長が不在のときはその職務を代理する。
5. 委員長は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。
6. 委員は、別表1のとおりとする。

(設置期間)

第4 MEIKAI-JOE 検討委員会の設置期間は、MEIKAI-JOE 検討委員会が設置された日から令和3年3月24日までとする。

(講座開発・実施チーム)

第5 MEIKAI-JOE 検討委員会の下に、小学校外国語の専門人材の育成・確保のための講座内容を決定し実施するための、講座開発・実施チームを設置する。

2. 講座開発・実施チームの委員は、別表2のとおりとする。

(庶務)

第6 MEIKAI-JOE 検討委員会の庶務は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターにおいて処理する。

(その他)

第7 この要綱に定めるもののほか、MEIKAI-JOE 検討委員会の運営に関し必要な事項は、明海大学企画広報課及びセンターが別に定める。

附 則

この要綱は、令和2年8月4日から施行する。

別表1

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
明海大学	高野 敬三	副学長・外国語学部長	委員長 (教育行政、英語教育等)
	石鍋 浩	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施リーダー (学校経営、英語教育等)
	金子 義隆	教職課程センター・ 地域学校教育センター 准教授	講座開発・実施サブリーダー (応用言語学、第二言語習得、英語教育等)
協力機関	藤田 保	J-SHINE 専務理事 (上智大学 言語教育研究センター 教授)	副委員長・講座開発・実施アドバイザー等 (言語学、英語教育)
	佐藤 久美子	J-SHINE 理事 (玉川大学大学院 名誉教授・特任教授)	講座開発・実施アドバイザー等 (英語教育、言語学)
連携教育委員会	田巻 正義	足立区教育委員会 学力定着推進課長	講座開発・実施推進調整担当
	丸山 恵美子	浦安市教育委員会 指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	岩野 玲子	横手市教育委員会 教育指導課長	講座開発・実施推進調整担当

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
事務局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	渡邊 久美子	企画広報課主任	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	阿部 典子	学事課・教務担当	経理事務補助
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助
	坂本 純一	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	調整

議事録

会 議 名	第1回検討委員会
日 時	令和2年9月15日(火) 午前9時30分から1時間程度
場 所	Zoomによる開催(新型コロナ感染症拡大防止のため)
出席者(敬称略)	高野委員長、藤田副委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、田巻委員、丸山委員、岩野委員
<p>【議題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学長あいさつ 明海大学長 安井利一 2 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野敬三 3 検討委員会委員自己紹介 *事務局及び講座開発・実施チーム、再委託機関も自己紹介 4 協議 <ol style="list-style-type: none"> (1) 事業実施計画書について(担当:高野委員長) (2) 検討委員会設置要綱について(担当:高野委員長) (3) 検討委員会委員名簿について(担当:高野委員長) (4) 講座開発・実施チームに係る設置要項について(担当:高野委員長) (5) 講座開発・実施チーム委員名簿について(担当:高野委員長) (6) 事業推進計画について(担当:石鍋委員) (7) 各講座の内容について(担当:石鍋委員) (8) 各講座への講座受講者からの事前アンケートの実施について(担当:石鍋委員) (9) 各教育委員会へのレンタル機器の配備について(事務局:永田課長) (10) 参加者人数について(担当:石鍋委員) (11) MEIKAI-JOE 共有アドレスの活用方法について(事務局:永田課長) (12) 再委託先(株)モアカラーからの講義配信の説明について(担当:再委託機関(株)モアカラー) ⇒(1)～(12)全委員了承 5 その他 ⇒特になし。 <p>【配付資料】</p> <ol style="list-style-type: none"> 資料 1 令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業 (小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)事業実施計画書 資料 2 令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE、 連携教育委員会との検討委員会設置要綱 資料 3 MEIKAI-JOE 検討委員会 委員名簿 資料 4 講座開発・実施チームに係る設置要項 資料 5 講座開発・実施チーム 委員名簿 資料 6 事業推進計画 資料 7 MEIKAI-JOE 講座内容等一覧(案) 資料 8 事前アンケート 資料 9 各教育委員会へのレンタル機器の配備について 資料 10 参加者人数 資料 11 MEIKAI-JOE 共有アドレスの活用方法について 資料 12 文部科学省 令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業 講義配信のご説明 	

会 議 名	第2回検討委員会
日 時	令和2年12月9日(水) 午前9時から1時間程度
場 所	Zoomによる開催(新型コロナウイルス感染症拡大防止のため)
出席者(敬称略)	高野委員長、藤田副委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、田巻委員、丸山委員、岩野委員
<p>【議題】</p> <p>1 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野敬三</p> <p>2 協議 テーマ:本事業に係る中間報告について (1) 評価アンケート結果(第1回講座～第3回講座)について(担当:金子委員) (2) リフレクションシート記述概要及び質疑応答内容(第1回講座～第3回講座)について(担当:金子委員) (3) 各講座出席人数について(担当:石鍋委員) (4) 講座運営全体について(担当:金子委員) ⇒(1)～(3)全委員了承 (4) 講座運営について、岩野委員から「講座前タスクの提示時期を早くできないか。事前研修に時間を費やしたい」との要望が出た。可能な限り早めの提示をしていく方向で意見のまとまりをみた。</p> <p>3 その他 (1) MEIKAI-JOE 報告書原稿について (2) その他</p> <p>【配付資料】</p> <p>資料 1 評価アンケート結果(第1回～第3回) 資料 2 リフレクションシート記述内容まとめ 資料 3 MEIKAI-JOE 各講座の出席人数 資料 4 MEIKAI-JOE 全講座総合評価アンケート 資料 5 MEIKAI-JOE 報告書について</p>	

会 議 名	第3回検討委員会
日 時	令和3年2月22日(月) 午前9時から1時間程度
場 所	Zoomによる開催(新型コロナウイルス感染症拡大防止のため)
出席者(敬称略)	高野委員長、藤田副委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、田巻委員、丸山委員、岩野委員
<p>【議題】</p> <p>1 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野敬三</p> <p>2 協議 テーマ:本事業に係る総括 (1) 評価アンケート結果(第4回講座～第5回講座及び全講座総合評価アンケート)について(担当:金子委員) (2) リフレクションシート記述概要及び質疑応答内容(第4回講座～第5回講座)について(担当:金子委員) (3) 各講座の出席人数(第4回講座～第5回講座)について(担当:石鍋委員) (4) MEIKAI-JOE 報告書について(担当:石鍋委員) (5) 各教育委員会からの総括 ⇒細かな課題はあったものの講座全体としては受講者にとって有意義なものになった。今後、この成果をどのように広く周知・還元していくかを明海大学と各教育委員会とで検討していくことになった。</p> <p>3 その他</p> <p>【配付資料】</p> <p>資料 1 評価アンケート結果分析(第4回～第5回) 資料 1-2 全講座総合評価アンケート結果分析 資料 2-1 第4回講座リフレクションシート記述概要及び質疑応答 資料 2-2 第5回講座リフレクションシート記述概要及び質疑応答 資料 3 MEIKAI-JOE 各講座出席人数 資料 4 MEIKAI-JOE 報告書(案)</p>	

4. 講座開発・実施チーム設置要項及び委員名簿

本事業の講座内容を開発し実施するため、以下のとおり、設置要項及び構成メンバーを定めた。

1 設置要項

令和2年8月4日

講座開発・実施チームに係る設置要項

(設置)

第1 明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(以下、「本事業」という。)を遂行するため、令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE、連携教育委員会との検討委員会設置要綱第5に規定された、講座開発・実施チームを設置する。

(検討内容)

第2 講座開発・実施チームは、本事業を遂行するために、文部科学省から認可を受けた本事業の事業実施計画書に示した講座を開発し実施する。

- (1) オンラインによる5回の講座(各講座90分)の開発に関すること。
- (2) 各講座について、オンデマンド配信する講座内容・資料の作成に関すること。
- (3) オンライン講座の実施に関すること。
- (4) 各講座間の調整に関すること。
- (5) その他必要な事項に関すること。

(構成)

第3 講座開発・実施チームは、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 明海大学教員、学識経験者(J-SHINE)、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会職員
 - (2) 再委託業者として、(株)モアカラー社員
- 2 講座開発・実施チームには、講座開発統括責任者及び講座開発・実施リーダーと講座開発・実施サブリーダーを置く。
 - 3 講座開発統括責任者は、明海大学副学長・外国語学部長の職にある者を当てる。
 - 4 講座開発・実施リーダーは、講座開発統括責任者が指名する。講座開発・実施リーダーは本事業の講座の内容決定や実施に係る職務に当たるとともに、講座開発統括責任者を補佐し、講座開発統括責任者が不在のときはその職務を代理する。
 - 5 講座開発・実施サブリーダーは講座開発・実施リーダーを補佐する。
 - 6 全5回の講座の実施に関して、講座開発・実施アドバイザーを置く。アドバイザーは全5回の講座内容や実施方法などについて指導・助言を行う。
 - 7 委員は、別表2のとおりとする。

(設置期間)

第4 講座開発・実施チームの設置期間は、講座内容・実施チームが設置された日から令和3年3月24日までとする。

(再委託機関)

第5 講座開発・実施チームが円滑に講座を実施するために、(株)モアカラーを本事業の再委託機関とする。

2 再委託機関は講座開発・実施チームと連携して事業の遂行に当たる。

(庶務)

第6 講座開発・実施チームの庶務は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターにおいて処理する。

(その他)

第7 この要項に定めるもののほか、講座内容実施チームの運営に関し必要な事項は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターが別に定める。

附 則

この要項は、令和2年8月4日から施行する。

2 講座開発・実施チーム委員名簿

別表2

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
明海大学	高野 敬三	副学長 外国語学部長	講座開発総括責任者
	石鍋 浩	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施リーダー (学校経営、英語教育等)
	金子 義隆	教職課程センター・ 地域学校教育センター 准教授	講座開発・実施サブリーダー (応用言語学、第二言語習得、英語教育等)
	百瀬 美帆	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
	坂本 純一	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施担当者 (学校経営、英語教育等)
	前田 隆子	外国語学部英米語学科 講師	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
	Patrizia Hayashi	多言語コミュニケーションセンター 教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
	Tyson Rode	多言語コミュニケーションセンター 准教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
協力機関	藤田 保	J-SHINE 専務理事 (上智大学 言語教育研究センター 教授)	講座開発・実施アドバイザー等 (言語学、英語教育)
	佐藤 久美子	J-SHINE 理事 (玉川大学大学院 名誉教授・特任教授)	講座開発・実施アドバイザー等 (英語教育、言語学)
	鈴木 菜津美	J-SHINE 事務局長	講座開発・実施アドバイザー
連携教育委員会	三輪 政継	足立区教育委員会 学力定着推進課 統括指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	山口 哲治	足立区教育委員会 学力定着推進課 指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	山崎 由美	浦安市教育委員会 指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	鈴木 真弓	横手市教育委員会 教育指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)

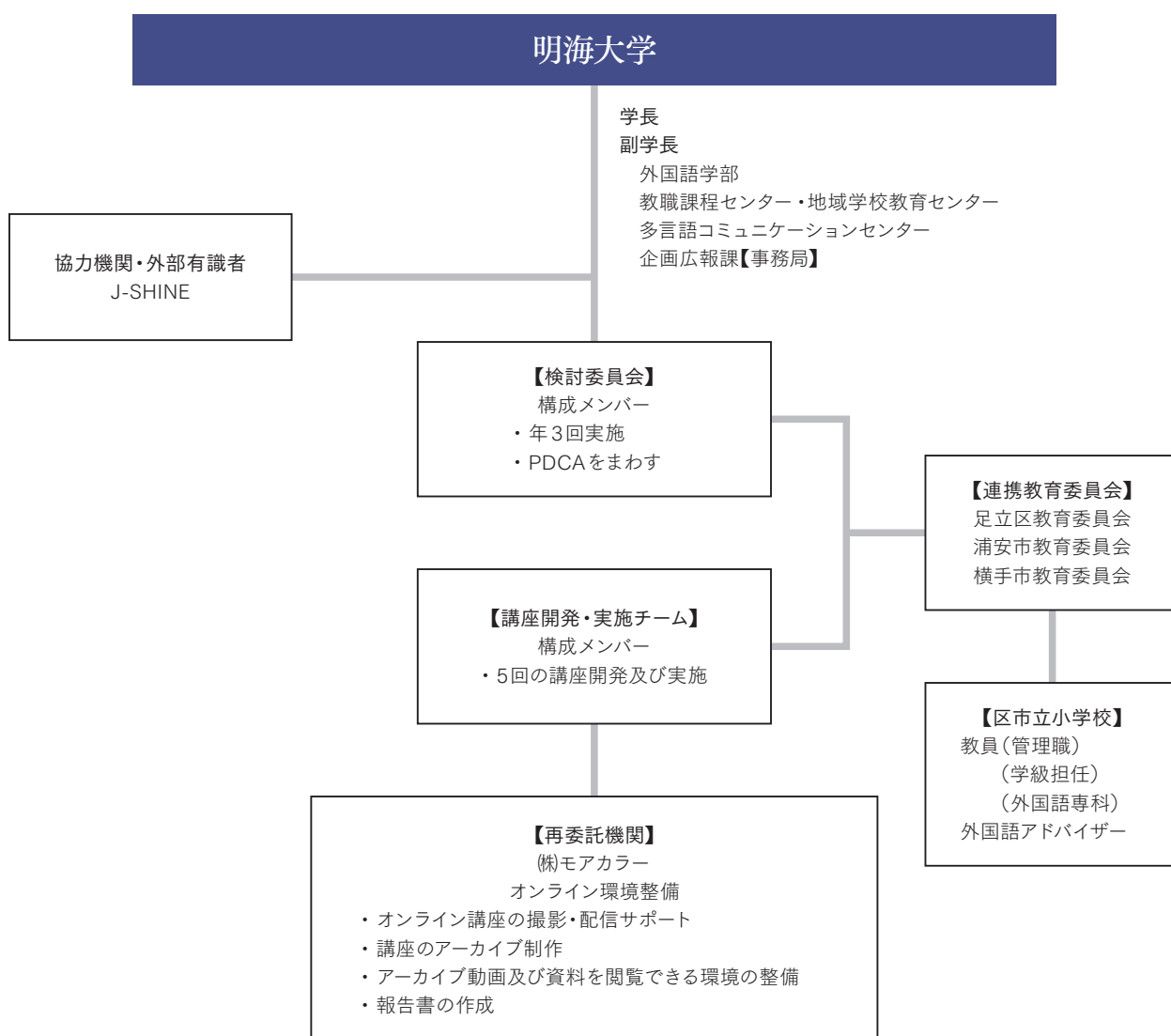
再委託機関 モアカラー

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
再委託機関	石川 彩	(株)モアカラー 取締役	委託業務統括責任者
	谷口 竜介	(株)モアカラー チーフディレクター	オンライン環境整備 (講座撮影配信、アーカイブ作成)等担当者

講座開発・実施チーム 事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
事務局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	渡邊 久美子	企画広報課主任	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	阿部 典子	学事課・教務担当	経理事務補助
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助

5. 組織図:協力・連携体制



II 講座概要



文部科学省に提出した企画提案書(事業実施計画)で示した5回の講座については、講座名称の若干の修正は行ったが、内容は変更しないで実施した。また、事前に実施した各市区教育委員会、参加予定教員からの具体的な要望等も踏まえて、前述の講座開発・実施チームの担当者が協力機関であるJ-SHINEのアドバイザーの助言を受け具体的な実施内容を決定した。

ここに、第1回講座から第5回講座の概要を示すこととする。なお、講座そのものの動画とその書き起こし原稿及び事前タスク、講座内、事後タスクで使用したPPTや動画は、QRコードから入り確認することができる。

“

第1回講座 令和2年10月20日(火) 午後3時~午後4時30分

学習指導要領

J-SHINE 専務理事(上智大学言語教育研究センター 教授)
藤田 保

参加者

拠点校	拠点校外	学生
74名	81名	25名

”

講座前のタスク


- ・小学校学習指導要領(平成29年公示)解説 『外国語活動・外国語編』に目を通しておく。⇒
- ・ビデオ『平五小210日の軌跡 - モデルケースで学ぶ2020年小学校英語教科化』⇒
- ・以下の資料に基づき、事前に講座内容について確認する。
「第1回講座「学習指導要領」配布資料(PDF:1.4MB)」⇒


講座の主な流れ

事前課題について	・次の課題について、参加者同士で話し合い(3分) 「以下のビデオ『平五小210日の軌跡 - モデルケースで学ぶ2020年小学校英語教科化』を視聴して、担任教諭がどのように変容したかを考えておいてください。」
I. 学習指導要領改訂の方向性	・背景：子供たちの未来について ・育成すべき資質・能力の三つの柱 ・アクティブ・ラーニング
II. 学習指導要領改訂の内容	・英語のレベルを考えるためのCEFR ・表現の幅を増やす ・平易なものから難しいものへ段階的な指導、受容語彙と産出語彙の区別 ・教科等横断的な学習の重要性
III. 目標	・これまでの学習指導要領の目標 ・新学習指導要領の目標 ・学習指導の改善 ・文法の知識(宣言的な知識と手続き的な知識) ・4技能・5領域

IV. 言語活動	<ul style="list-style-type: none"> ・機能的な学習 ・目的・場面・状況 ・「聞くこと」「読むこと」の活動
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・先生は英語を使う人の見本

講座内容

【講座の動画】⇒ 

【講座内容の書き起こし原稿】⇒ 



講座後タスク

- ・講座での話を基にして、現在各校の「外国語」で使用している検定教科書のどの活動・課題が学習指導要領のどの部分を具現化しているのかを分析し、同僚の先生方と話し合う。

講座実施後のリフレクションシートにおける質問と回答

質問

ALTの位置付けに変化はあったのか。ただ教室にいて、こちらからヘルプを出したら発音してくれる人というスタンスでよいのでしょうか。

回答

ALTや地域の外部人材の位置付けには特に変化はありません。
 なお、「こちらからヘルプを出したら発音してくれる人」という位置付けであったことも本来一度もありません。それはデジタル教材等が担うべき役割です。
 担任主導の授業の中で、担任と一緒にやり取りの見本（スモール・トーク等を含む）を提示する、児童たちと直接的なやり取りをする等こそが本来ALTらが果たすべき主たる役割です。

質問

「触れさせる」の表現について、手を挙げない子にはどうすればよいですか。言いたくない子が英語に触れるにはどうすればよいでしょう。

回答

まず、英語を聞きながらワークシートで作業をする（例えば、聞こえてきた内容を表す絵を選ぶ）等も児童を英語に触れさせていることになります。一方、挙手をして当てられた子だけが発言する授業の展開では発言者以外の児童に与えられる発話の機会が限定的になってしまいます。できる限りグループ活動やペア活動を取り入れることで多くの子供たちに発話の機会を与えましょう。
 また、声に出す練習をする際に、最初はクラス全員で、次にクラスの半分ずつ、その後でもう少し小さいグループ、ペア、個人というように、同じ英文を大人数→少人数のように減らしながら繰り返し練習することで、最初は自信がなかった子も安心して練習に参加できるようにする工夫なども大切です。

質問

高学年の外国語科では、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことにおいて、子供たちがどのレベルまで習得していれば、中学校と円滑に接続できるのかを知りたいです。

回答

到達目標は学習指導要領に明示されていますのでご確認ください。

例えば「書くこと」であればお手本をそのまま、あるいは一部分を入れ替えて(My name is Tom. のTomを自分の名前に変える等)「書き写す」ことができれば十分であり、スペリングを覚えて書くことなどは求められていません。万が一、接続先の中学校からそれ以上のことを求められた場合には、しっかりと学習指導要領に明示された内容を伝えることも重要です。

質問

研修会の質問の中で出た、目的意識をもたせた場面設定や必要感をもたせたやり取りを授業で行っていくにはどうしたらよいか、具体例を知りたい。

回答

まず、その日に扱う言語材料が日常生活で実際にいつ・どこで使われるか(例:食べたいものを伝えられるようにするためのI want to eat ~. という表現が必然的に使われるのは?)を考えてみてください。

レストランでメニューを見ながら、「今晚なに食べたい?」と親に尋ねられた時、あるいは世界の旅のテレビ番組を見ている時かも知れません。場面を選んだらそれに合わせてロールプレイ(レストランの注文)、インタビュー(人気の夕飯献立ランキング)等の活動を考えてみましょう。

質問

和英辞典の活用についてお聞きしたいです。小学校段階では「必要ない」のか、「あればよい」のか、少し気になっていました。もし「あればよい」のであれば、学校予算で購入するのもよいのかなと思っています。

回答

児童用には基本的には必要ありません。

昆虫を扱っている課で活動中に「トンボってなんて言うの」と児童に尋ねられたら(必要に応じて先生が辞書を引いて)dragonflyだと教えてあげれば十分です。英和辞典についても、単独の単語の意味がわかることより文脈から意味が想像できる力の方が大切なので不必要です。

ただし、「CATとCABのどちらが辞書で先に出てくるか?」のようなクイズ等を時折取り入れてアルファベットの順番を意識させておくと、中学以降での辞書の活用につながるでしょう。

質問

How are you? と尋ねると、帰国子女の中には「Awesome!」と答える子供がいます。振り返りシートにも書かれているときがあります。また、今は、「How are you doing?」の方がよく使われている、とか「How have you been?」も使う、などと言われることもあります。このような声に対する対応の仕方を教えていただければと思います。

回答

振り返りに「今日の授業では質問に答えられなかったので憂鬱だった」と書かれていた場合、憂鬱という漢字が既習であるか否かよりも、その子の自信を取り戻す心配をすべきでしょう。同様に、教員が教える内容はあくまで指導計画に基づいたものを与え、返ってきた答えがそれを超えるものであった場合にはそのまま受け入れてあげればよいだけです。

同じ内容を表す表現は当然いくつもあります。このような場合、「ごきげんいかがですか?」「元気ですか?」「元気?」「よう!」等、日本語でも様々な表現があり、相手によって表現の選択が異なることへの気付きにつなげていくのがよいのではないのでしょうか?

質問

名詞の複数形、例えば“s”がつくものと単複同形の“fish”のようなものの使い方について、どの程度まで説明したらよいでしょうか。

回答

あえて説明する必要はありません。教科書に出てきた形でそのままの表現として教えれば結構です。もし児童の方から質問をしてきた場合には、上の質問の場合と同様に、「いろいろな言い方がある

ことによく気付いたね」と褒めてあげた上で、日本語でも一本、一冊、一枚などの数え方に違いがあること等への気付きにつなげましょう（実際、children, oxen, data, stimuliなど例外が多すぎて理論的な説明はほぼ不可能です）。

質問

本校には大学生の英語ボランティアが複数入って下さっているが、その方々をうまく活用できていないと感じている。ボランティアの方々にどう動いてもらうとよいのか、例があれば教えていただきたい。複数いる場合の効果的な活用方法を教えていただきたいです。

回答

複数のボランティア学生がいる場合の最も効果的な活用法はグループ活動を行う際に、グループリーダーとして分かれて入ってもらい、活動を円滑に進める推進役を担ってもらうことです。予め指示をしておかないと後ろに立っているだけの学生も出てきてしまうでしょうから「スキットを読む際に（担任の）相手役になってください」「担任が前で説明などをしている間に机間巡視をして理解が遅れていそうな子の手助け等の個別指導をしてください」等、具体的にすべきことを事前に伝えることも必要です。

“

第2回講座 令和2年11月18日(水) 午後3時～午後4時30分

効果的なチーム・ティーチングの在り方

明海大学 多言語コミュニケーションセンター

教授 Patrizia Hayashi

明海大学 多言語コミュニケーションセンター

准教授 Tyson Rode

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

教授 百瀬 美帆

参加者

拠点校

68名

拠点校外

105名

学生

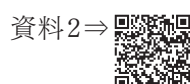
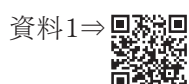
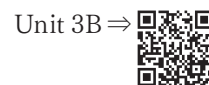
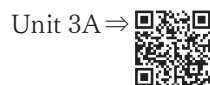
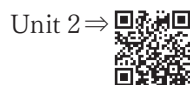
25名

”



講座前のタスク

- ・ 講座受講前にUnit 1からUnit 3Bまでのビデオを視聴して、学級担任の役割、ALTの役割について確認する。また、授業におけるラポール構築実践例ビデオ（資料1）を用意したので、コミュニケーション活動レスンプラン（資料2）を参考にしながら視聴する。




講座の流れ(略案)


展開	参加者の活動	講師の動き		教材・留意点
		①百瀬	②Patrizia ③Tyson	
1 挨拶・趣旨説明 (高野敬三副学長) (4分)	・副学長の挨拶・趣旨説明を聞き、本講座の趣旨を知る。			
2 講師3名の自己紹介 (2分)	・自己紹介に反応する。 (Hello! How are you today? に対してFine! など。)	3名の自己紹介。		
3 本時の目標(4分)	・本時の目標と展開を知る。	活動の目的を説明する。		PPTスライド 2枚
第1部 ラポール構築				
4 ラポール構築方法の復習(5分)	スライドに示される事前課題を参照しながら、主要なラポール構築方法を確認する。	日本語で説明する。		PPTスライド
5 ラポール構築のデモンストレーション Rapport Challenge (20分)	1. ラポール構築のよいモデル、悪いモデルを見て、よい点、悪い点を考える。 2. 拠点校において受講者がペアを組み、ワークシートを利用してラポール構築の表現を練習する。 3. 各拠点校から1名ずつの代表者が講師②または③と練習する。	講師②または③とともにモデルを示す。 拠点校の活動を指示する。 フィードバックを行う。	モデルを示す。 ①&②または①&③ 各会場の様子を観察する。 ②③は4か所の代表者とデモンストレーションを行う。	ワークシート 横手→足立→ 足立→浦安
第2部 授業準備と授業				
6 「レッスンプランの説明」の復習(10分)	「レッスンプランの説明」のモデル動画を見る。	動画の後に「レッスンプランの説明」のポイントを説明する。		事前撮影したビデオ PPTスライド
7 受講者 チャレンジタイム (レッスンプラン説明) ES Lesson Plan Explanation Challenge (25分)	拠点校ごとにペアを組みHRTとALT 役になる。HRT役がレッスンプランを説明しALT役は返答したり、質問したりする。最後に各地の代表者が講師②、③をALTにみたくてレッスンプランを説明する。	拠点校の活動を観察する。	拠点校の活動を観察する。 ②③は4か所の代表者とデモンストレーションを行う。	コミュニケーション活動 レッスンプラン* 浦安→足立→ 足立→横手
8 受講者 チャレンジタイム (アクティビティ) ES Activity Challenge (8分)	説明を聞く。 講師③と一緒に活動する。	レッスンプランを実践で活用するためにはT1がT2と協力して児童の気持ちを高揚させ、活動を促すことが必要であることを理解する。児童の気持ちを高揚させる活動である旨を説明する。	リズムを使った活動方法を紹介する。	リズム音源
9 質疑応答 (10分)	参加者との質疑応答 ・質問者は最前列へ移動。	講師①が質問を受け、必要に応じて②、③に回答を求める。		
10 終了の挨拶 (2分)	閉会の挨拶を聞く。	終了の挨拶。 参加者への謝辞・賛辞。 質問はメールで受ける旨を伝える。		

* コミュニケーション活動レッスンプラン(資料2) ⇒




講座内容


【講座の動画】⇒ 

【講座内容の書き起こし原稿】⇒ 

講座後タスク


- ・事前課題、講座内では扱えなかった「絵本の読み聞かせ活動」のLESSONプラン(資料3)を参考にしながら実践ビデオ(資料4)を視聴する。オリンピック競技名を扱った「コミュニケーション活動」のレッスンの後に行うと語彙の再利用ができる。

*資料3⇒ 

資料4⇒ 

- ・事前課題に収められている「コミュニケーション活動」授業実践で紹介した“I want to watch...”の練習活動のその他のバリエーションを2つ紹介する。1つ目はリズムを使った練習活動(資料5)、2つ目はゲームカードを利用した練習活動(資料6)である。またオリンピック競技のピクトグラムを利用したビンゴカードを資料7として納めてある。

*資料5⇒ 

資料6⇒ 

資料7⇒ 

- ・ALTとの打合せを円滑に行うために資料8のテンプレートを使用してLESSONプランを書く。事前課題では紹介しきれなかった「授業で使えるクラスルーム・イングッシュ表現」を資料9としてまとめてあるので活用してほしい。

*資料8⇒ 

資料9⇒ 

講座実施後のリフレクションシートにおける質問と回答

質問

私は英語が全くわからないのですが、「ストラテジー」などの言い回しは、職場の同僚であるALTとの関係づくりという文脈で用いるのは適切なものなのでしょうか。Unit 2の動画でも「ALTは耳を傾けるようになる」などの説明がなされていましたが、私がもしALTにそう思われているなら残念だと思いますし、逆に私は(自分の英語力が貧困だと自覚しているからこそ)ALTの方を見下したような感情は抱いていません。そのような中での講座だったので、内容には違和感を感じました。

回答

英語のストラテジー(strategy)は元来は軍事で使われる用語であったかもしれませんが、中立的な「手法・手段」という意味で日常的に使われています。

ALTという異文化を背景とした方との人間関係構築には時には積極的な作戦が必要だということをお伝えしたかったので、あえてストラテジーという言葉そのままを使わせていただきました。

また講師であるハヤシ、ロードの両名もこのストラテジーという言葉の使用に対しては違和感を覚えないとのことでした。

質問

ALTは子供たちと一緒に給食を食べるなど(今はコロナ禍で難しいが)、授業以外のさらなるコミュニケーションを望んでいるのか。

回答

多くのALTはそうした活動を望んでいるとは思いますがALTご本人の意向や、管理職の先生方を通して雇用契約内容をご確認ください。

“

第3回講座 令和2年11月25日(水) 午後3時～午後4時30分

Small Talkの実際とデジタル教科書への接続

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

教授 石鍋 浩

明海大学 外国語学部 英米語学科

講師 前田 隆子

参加者

拠点校

89名

拠点校外

58名


学生

25名

”



講座前のタスク


- 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(平成29年7月文部科学省作成)の ⇒  Small Talkの部分(pp.84-85, pp.130-134)を読んでおく。
- 『We can! 1』UNIT 8 What would you like? または『We can! 2』UNIT 4 I like my town.のいずれかでどのようなSmall Talk をするかを考えておく。


講座の流れ(略案)

時間・展開	参加者の活動	講師の動き		教材・留意点
		①石鍋	②前田	
1 挨拶・趣旨説明・講師紹介 (高野副学長)(3分)	趣旨説明を聞き、本講座の趣旨を知る。また講師を知る。			
2 本日の目標 (前田)(2分)	本時の目標と展開を知る。		目標 ・ Small Talkの目的や留意点を学び、単元目標と関連した効果なSmall Talkができるようになる。 ・ Small Talkからデジタル教科書への接続について考える。	PPTスライド
3 Small Talkとは? (前田)(19分)	Small Talkについての詳細を知る。		・ 対話方略の解説:①対話の開始②繰り返し③確かめ④ひと言感想⑤さらに質問⑥対話の終了 ・ Small Talkに使える表現。 ・ 実際の授業のビデオを見る。	PPTスライド 岩切先生 YouTube (4分)

4	Before & After ビデオ視聴と解説 (前田)(12分)	明海大学の学生が教師役になっ て行う授業の、指導前から指 導後の変化を見る。		Beforeのビデオを見た後 に、その特徴とどのような指 導したか解説する。次に、 Afterのビデオを見た後、そ の変化の様子を解説する。	ビデオ映像
5	Small Talkを 活用した模擬授業 (前田)(5分)	講師が行う、We Can! 2 Unit 8のSmall Talkを見る。		We Can! 2 Unit 8 Small Talkの模擬授業をする。	模擬授業2分 30秒/解説2 分30秒
6	Small Talkから デジタル教科書への 接続 (石鍋)(13分)		教員用デジタル教科書 の活用法を解説する。		PPTスライド
7	先生方の チャレンジタイム (20分)	事前課題のSmall Talkを各 拠点校でペアで行い、お互い 感想を言う。 その後、各拠点校で挑戦した 人がカメラの前で行う。	チャレンジしてくれた先 生に向けて、コメントする。	チャレンジしてくれた先 生に向けて、コメントする。	ペアワーク: 4分 各拠点校: 約2分×4校 =8分~10分 コメント:5分
8	質疑応答 (15分)	参加者との質疑応答/質問者 は最前列へ移動する。	質問への回答。	質問への回答。	
9	終わりの挨拶 (石鍋)(1分)	閉会の挨拶を聞く。	終了の挨拶。		

講座内容

【講座の動画】⇒ 

【講座内容の書き起こし原稿】⇒ 

* 文部科学省

「小学校の外国語教育はこう変わる!⑦
~ Small Talkの進め方~


⇒ 


* 第3回講座

「Small Talkの実際とデジタル教科書への接続
説明資料

⇒ 

* 学生による動画

• Small Talkの対話方略を学ぶ前 ⇒ 

• Small Talkの対話方略を学んだ後 ⇒ 

講座後タスク

- 講座で研修したことを取り入れたSmall Talkを授業で実践する。その成果や課題について他の先生と話し合いをする。

講座実施後のリフレクションシートにおける質問と回答

質問

Small Talkや「やり取り」で会話の流れを示すためにカードを使うことがあります。流れを知るのにはよいのですが、英語を読むのが苦手な子供には負担が大きいです(もちろん、各時間で十分な練習時間はとっています)。

回答

カードを全部読むことは求めず、ヒントとなるように使しましょう。

また英語を読めるようになるには、英語の音声に十分に慣れ親しむ必要があります。読むことに苦手意識がある子供には、まずはやり取りのキーワードになる部分だけでも発話し、流れに慣れてきたところで、少しずつ長い文を言えるように練習するとよいでしょう。

質問

ジェスチャーが大切だと言われているが、日本人の文化の中ではジェスチャーを使うことはあまりなく、外国でもそこまで多用していない気がするがなぜ必要なのでしょう。

回答

日本文化の中にもジェスチャーはあります。例えば、「こっちへ来て」と言うときに手招きしたり、「結構です」と断るときに顔の前で手を振ったりします。

英語の授業では、児童にヒントを与える際にジェスチャーで示してはいかがでしょうか。もちろんあまり大きなジェスチャーをする必要はありません。身振り、手振り、表情といった非言語的なやり取りも立派なコミュニケーションなので、ぜひ授業の中で使ってみてください。

質問

映像の中で“Let’s talk about ~”で子供たちが対話を始めていましたが、子供たちはあそこから英語のみで話せるのでしょうか。表現のヒントが少なかったように感じましたが、6学年という発達段階ならどのクラスでも可能なことなのか、それともあのクラスが特別なことをしているのか、どちらでしょうか。

回答

講座では、文科省チャンネルの映像は冒頭約4分のみを見ていただきましたが、続きを見ると、子供たちが全て英語で話しているわけではありません。担任の先生も、「わからない表現はあとでALTの先生に聞いてみよう」と日本語でアドバイスしています。

また、児童同士でやり取りをする前に、ALTの先生の冬休みの過ごし方を英語で復習していたので、その中で表現を繰り返し練習することが、その後の児童のSmall Talkに役立っています。

質問

インプットは音で入れるのが基本だと思っていたのですが、英単語を文字に見せたほうがよいのでしょうか。

回答

もちろん、音声でインプットすることが基本となりますが、日頃から英語の文字を目にする機会が多いことは、よいことだと思います。音声を中心としながら、文字に触れるとよいでしょう。

また、絵カードに文字を入れておくと、文字に興味がある児童は自然と文字に慣れ親しむことができます。しかし、小学校段階では単語のスペルを覚えて書くという必要はないので、「この英単語を書けるようになろう」というような明示的な指導をする必要はありません。

質問

拠点校の先生からも質問がありましたが、児童によって英語力の差が大きいというのはどの学校でも同じだと思います。その場合、課題設定の難易度などが難しくなってくると思います。そういう場合は、どのように授業を組んでいけばよいのでしょうか。

回答

仰るとおり、児童の英語力には多様性があると思います。何事も小さなステップを踏んでいくことが重要です。少しずつインプットとアウトプットをさせて、基本の英文に当てはめて自分の言いたいことを言ってみる。もしくは似たような既習表現を探して、言ってみる。このステップを踏んで、子供が進歩したら褒める。このような個別の支援が重要だと考えます。

英語が苦手な児童には、まずは日本語でもいいから言いたいことを言わせて、それを学習したい文に合わせて、少しずつ単語を入れていくようなステップを踏んではいかがでしょう。英語が得意な児童には、クラスメイトを助ける役割を与えてもよいでしょう。

質問

Small Talkをしていて、児童が理解していないときに、日本語で説明をしたくなるが、しないほうがよいのでしょうか。

回答

無理にオールイングリッシュでなくてもよいと思います。

ただし、対話方略の繰り返しや確かめ、他にもジェスチャーや言い換えなどを活用して出来るだけ英語でやり取りしてみましょう。その後どうしても抽象的な表現があり、理解が難しいという場合には、その表現を日本語にしてSmall Talkの途中に入れてみてはいかがでしょうか。

例えば、We Can! 1のUnit 7 “Where is the treasure?” の導入のSmall Talkで、先生の宝物を写した写真を手に持って、“Look at this picture. These are my treasures.” 私が大切にしているものですよ。“My diary, my watch, and my family pictures. What is your treasure?” のように、日本語を途中に挟んでもよいと思います。

質問

子供たち同士でSmall Talkをしていると、続かない場合があり、日本語で話してしまっている。その場合どうしたらよいのでしょうか。

回答

子供たちが日本語で話してしまうのは、まだ英語での発話に自信が無いということも一因だと思います。十分にインプットをして、言いたいことを整理させ、短い文、もしくは単語だけでもいいから言ってみましょう、と発話を促してはいかがでしょうか。

また完全に言えなくても言おうとする態度を褒めて、児童の意欲が継続するようにすることも大切です。

質問

小学校4年生でもSmall Talkをどんどん活用してよいのでしょうか。

回答

はい、もちろん結構です。

中学年でも特にインプットを中心としたSmall Talkを積極的に活用できると思います。先生がなさったSmall Talkの内容をクイズ形式で確認するようになると、英語を聞く態度も育つと思います。

質問

私は例示されたYouTubeの動画の会話すら理解できなかったのですが、どうしようもないのですが、例えば中学校1年生の現状をふまえた上で“Small Talk”の活動を導入しているのでしょうか。今日練習したトークを実行できるほどの語彙力を子供はもち合わせていないと思うのです。文科省肝いりの学校の「すばらしい実践」をみれば「すごい」と思いますが、あのぐらいを想定されるのであれば、ぜひ英語専科を導入してほしいです。

回答

中学校との接続を意識することはもちろん重要ですが、その前段として、既習事項を定着させたり、英語のやり取りの経験を積むためにSmall Talkを導入しています。

確かに、文科省チャンネルで見た活動事例は本当に素晴らしいと思いますが、今回学んだ対話方略を活用すれば、すこしずつ長いやり取りが出来るようになると思います。その際教師は、できるだけ児童を褒めて、もっとしゃべりたくなる仕掛けを作るとよいと思います。

“

第4回講座 令和2年12月16日(水) 午後3時～午後4時30分

学習指導と評価

J-SHINE 理事(玉川大学大学院 名誉教授・特任教授)
佐藤 久美子

参加者

拠点校
87名

拠点校外
87名

学生
25名

”



講座前タスク

- 『イラスト図解 小学校英語の教え方 25のルール』(講談社)佐藤久美子著 を読む。多角的な視野から評価を行うことの大切さと、その実践例について理解し、他にどんな評価の場面があるか、考える。


講座の主な流れ


(1) 小中連携の視点を通して	<ul style="list-style-type: none"> ・英語時間の比較 ・外国語科の目標は共通 ・「言語活動」とは
(2) 小学校英語の授業づくりのポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業構成を一定にし、やり取りの多い授業 ・明確なめあて ・対話的な必然性のある場面 ・教科等横断的な学習
(3) 評価規準 1	<ul style="list-style-type: none"> ・指導と評価の一体化 ・PDCAサイクル ・学習評価の改善
(4) CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習法)教科横断型学習を通して評価をつける	<ul style="list-style-type: none"> ・他教科で学習する内容を使って英語学習を進める ・授業例 ・The 4Cs Framework ・CLILの授業開発例(含:演示) ・CLIL Quiz(拠点校とやり取り)
(5) 評価規準 1	<ul style="list-style-type: none"> ・内容のまとまりごとの評価規準 ・学習評価の進め方
(6) 評価規準 2	

*「学習指導要領と評価」資料 ⇒



講座内容

【講座の動画】⇒ 

【講座内容の書き起こし原稿】⇒ 

講座後タスク

・Do you have ~? Yes, I do./No, I don't.

この目標表現を教えようと思う時、どんな必然的な場面を考えることができるか？

具体的な場面、Activity、発表の様子を具体的に考え、同僚と話し合う。常に、言語活動と場面を意識しながら、Activityや発表スタイルを決めよう。そして、併せて評価の基準についても考えよう。

講座実施後のリフレクションシートにおける質問と回答

質問

5年社会の日本の地形クイズの実践例について説明いただきましたが、実践例の9時間の時間配分について、英語と社会をどのぐらいの配分にしたらよいのでしょうか。

調べる時間⇒社会、英語に変換・発表⇒英語、という認識でよいでしょうか。

回答

はい、ご認識いただいたとおりです。実際に地形や産業について詳しく調べる授業は、1時間社会で行っています。

その後、英語の授業で、辞書を使って英語の文に変換したり、発表の順番を考えたりして4ヒントクイズの原稿を作りました。そして、最後に発表については、同小学校の2年生に1時間を使って発表、次の時間には大学院生に1時間を使って発表しています。

そこで、合計9時間を掛けていますが、本来は8時間で終わる授業と言えるでしょう。子供たちはとても楽しかった!と、喜んでいました。

質問

今年度内に配布されるタブレットなどのデジタル教材を使ってペアやグループなどの発表を録画すると評価にも使えると考えていますが、そのような方法で見とることについてはいかがでしょうか。

回答

よいアイデアだと思います。録画するための、必然性をまずは子供たちに与えます。例えば、「お世話になったALTの人に、最後の授業でDVDを見せてあげよう!」とか、「みんなの英語のスピーチを撮影して、この小学校に卒業記念に残していこう!」とか。動機付けがさらに高まります。

質問

慣れてきたらアクセント、発音に注意させるというお話がありました。学習指導要領では「発音・アクセントについては、指導はしても評価はしない」と記載されているかと思いますが、いかがでしょうか。

回答

そのとおりです。また、最初からアクセントや発音を注意すると、自分の考えや思いを話してみよう!という気持ちが薄れます。また、流暢に話すなどは、小学校における外国語の目標ではありません。ただし、6年生などには、中学校に向けての準備をするのもよいと思います。

「英語は強弱のアクセントをしっかりとつけると、よく意味が通じるようになるよ。日本語は高低アクセントで、雨と飴のアクセントの位置が違うでしょう」というような話には、興味をもつと思います。自然とアクセントにも意識するようになるでしょう。

質問

今回、いろいろな先生の質問からも勉強になりました。他の先生方の悩みをまとめたQ&Aのようなものがあると役に立つのでほしいと感じました。

回答

ありがとうございます！先生からいただいたこのご提案は、私にとっても大変よい刺激になりました。ぜひ、小学校の先生方からさらなるお悩みやアイデアを伺いながら、Q&A集を作りたいと思います。その折は、ぜひご協力ください。

質問

いろいろな活動例がとても参考になりました。
機会があれば活動例を教えてください。

回答

ありがとうございます。先生からのこうしたご提案は、ぜひ活用させていただき、来年は、活動例を集めた本をぜひ書きたいと思います！現場の先生方のお声も反映したいと思いますので、その折は、ぜひご協力ください。

また、今回のような研修の場をいただければ、さらに活動例をお話いたします。
事後タスクでも、活動例を一つご提供させていただきますので、楽しみにしてください。

質問

活動前に「ここまでできたら『A』だよ」などの評価基準の説明をすることは、よい成績をとるためだけに頑張る児童が生まれ、本質的に学習を楽しめる児童の減少につながってしまうのではないかと考えていたため、とても驚きました。事前に評価基準を説明しても構わないということですが、意欲の点で問題はないでしょうか。

回答

今回は、評価については児童と共有する機会をもってほしいというのが、文科省からのご提案です。中学校でも評価基準を説明する場面を見ましたが、どの生徒も、A評価を目指して頑張っていました。また、小学校では、「たくさん話せなくても、少なくともこの2文が言えるようになればよくできましたのBだよ」と言ってあげるのも、ハードルを少し下げ、slow learnersにとっては安心の材料にもなると思います。

どちらの子供たちにも動機付けと安心感を与えられるので、意欲には問題ないと思います。

質問

講師の先生が見せてくださったスライドを、もっとじっくりと見たかったです。

回答

すみません、時間が限られていましたので、急ぎ足になってしまいました。

著作権などの問題もありますので、すべてをアップすることはできませんが、評価などの個所につきましては、ホームページにアップする予定です。

“

第5回講座 令和2年12月22日(火) 午後3時～午後4時30分

小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
准教授 金子 義隆

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
教授 石鍋 浩

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
教授 百瀬 美帆

明海大学 多言語コミュニケーションセンター
教授 Patrizia Hayashi

明海大学 多言語コミュニケーションセンター
准教授 Tyson Rode

明海大学 外国語学部 英米語学科
講師 前田 隆子

J-SHINE 専務理事(上智大学言語教育研究センター教授)
藤田 保

J-SHINE 理事(玉川大学大学院名誉教授・特任教授)
佐藤 久美子

J-SHINE 事務局長
鈴木 菜津美

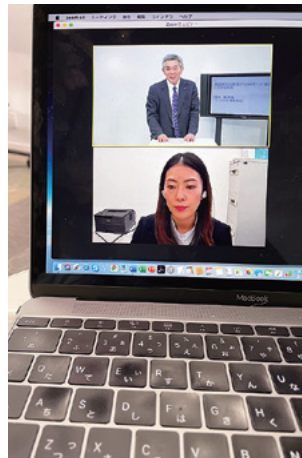
参加者

拠点校
83名



拠点校外
75名

学生
25名

”




講座前のタスク


- ・中学校への接続について、あなたが意識していることは何か？ また、実際に行っていることは何か？
ペーパーにまとめる必要はないが、整理しておく。
- ・以下のリンク先の資料を読んで、ご自分の学校でも活用できることを考える。
*平成26～29年度「外国語(英語)教育強化地域拠点事業」最終報告 ⇒ 
「小・中・高が連携した活動事例」文部科学省
- ・第3回講座でも視聴した、以下のビデオ(約8分)を再度視聴してください。そして、ご自分の授業で活用できる点を整理しておきましょう。
*「小学校の外国語教育はこう変わる!⑦ ～ Small Talkの進め方～」 ⇒ 


講座の流れ(略案)


手順(時間)	参加者の活動	講師の動き	教材	留意点
1 挨拶及び講師紹介 (5分)	紹介された内容を理解する。	高野副学長の挨拶と 講師紹介	なし	
2 小学校英語指導の心得 (20分)	講義を聞く。	【金子】	PPT	
3 中学校への接続の期待 (15分)	講義を聞く。	【石鍋】	PPT	
4 各講座担当者等からの メッセージ・質問に対する回答 (藤田先生)(10分)	メッセージ等を聞く。	【藤田先生】 ビデオ出演	ビデオ	自分の担当回で伝えた かったことを再確認の意 味を込めて補強する。
5 各講座担当者等からの メッセージ・質問に対する回答 (佐藤先生)(10分)	メッセージ等を聞く。	【佐藤先生】 Zoomで当日出演	Zoom	自分の担当回で伝えた かったことを再確認の意 味を込めて補強する。
6 各講座担当者等からの メッセージ・質問に対する回答 (鈴木事務局長)(10分)	メッセージ等を聞く。	【鈴木事務局長】 Zoomで当日出演	Zoom	全国のJ-SHINE指導者 の声を紹介する。
7 各講座担当者等からの メッセージ・質問に対する回答 (百瀬・パトリツィア・タイソン) (5分)	メッセージ等を聞く。	【百瀬】 【パトリツィア】 【タイソン】	なし	自分の担当回で伝えた かったことを再確認の意 味を込めて補強する。
8 各講座担当者等からの メッセージ・質問に対する回答 (前田)(3分)	メッセージ等を聞く。	【前田】	なし	自分の担当回で伝えた かったことを再確認の意 味を込めて補強する。
9 質疑応答 (7分)	質問を出す。	【該当者】 質問に答える	なし	
10 講座修了挨拶 (5分)		【高野副学長】	なし	

講座内容

【講座の動画】⇒ 

【講座内容の書き起こし原稿】⇒ 

【知っておこう!小学校英語指導の心得】⇒ 

【中学校への接続の期待】⇒ 

講座後タスク

- ・ 中学校への接続を意識した指導を実践し、その内容や児童の様子を他の先生方と共有しましょう。

講座実施後のリフレクションシートにおける質問と回答

質問

J-SHINEの資格のCEFR B2は英検準1級程度とのことでしたが、TOEICでの代替はききますか。その場合何点が基準でしょうか。現職小学校教員でも資格を取ることはできるのでしょうか、その場合はどのような手続きが必要ですか。

回答

もちろん、TOEIC等、他の資格試験でも受け付けています。TOEICの場合は一般的に普及しているL&Rに加え、S&Wのスコアも合算して基準としています(S&Wのスコアをそれぞれ、2.5倍してL&Rと合算し、1560点以上がCEFR B2となります)。

また、現職の教員の方にも資格を取得いただくことはもちろん可能です。ただし、現時点では、資格を取得いただくためには、「登録団体」と呼ばれる団体で所定のカリキュラムを受講することが必要になります。

質問

やり取りに関して、学年が上がるごとに何を気を付ければよいでしょうか。現在は4年生を担当しているのですが、来年は5年生を担当します。その時に、どのようなことに気を付ければよいかわかりたいです。

回答

学習指導要領解説の「第2節 英語 1.目標 (3) 話すこと[やり取り]」を参考にしてみましょう。

中学年では指示や依頼に応じる活動でありましたが、高学年では相手の依頼に対して、自分で考え判断して、伝えるといったことを大切にしたりやり取りが求められます。中学年の自分の身の回りのことから発展して、高学年では日常生活に関する身近で簡単な事柄について自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが求められます。中学年では、英語を使ってやり取りができたという達成感をもたせるために、教師や友達のサポートを受けながらやり取りを進めていきますが、高学年では、質問したいことを自分で考えて質問したり、質問に対して自分で考えて答えたりし、自分の力で伝え合うことを目指しています。

併せて、学習指導要領解説の「第2節 英語 2.内容 (3) 言語活動及び言語の働きに関する事項 ウ 話すこと[やり取り]」も参考にしてください。

質問

教材、教具が不足しています。現在は、ALTが準備してくれていますが、これからどのように各学年で教具を整備していけばよいでしょうか。

回答

教材・教具は授業のねらいや活動に沿って学級担任の先生が中心に作成することが望ましいと思います。なぜなら、児童の興味・関心や実態をしっかりとつかんでいるのは担任の先生だからです。そこにALTのアイデアを加味することができればより自然な英語を使った教材や教具になるはずです。また、各担任の先生が作成した教材や教具は、どこか一カ所に蓄積していき、誰もがいつでも使えることができるようにする、そして、誰もがその教材や教具を改良しさらに蓄積していくようにするとよいと思います。学校共通の財産になりますね。

質問

音声をなかなか聞き取れない児童への対応はどうしたらよいでしょうか。

回答

自分で発音できない音は基本的には聞き取れません。ですから、児童には正確ではなくてもよいので、聞こえたように言ってみるよう励ましたらよいと思います。最初から正確な音を追求しないで、児童が言える範囲で言えるようにすることでよいと思います。そのように英語の音に慣れていけば、少しずつ聞き取りが上達していくと思います。

質問

疑問に思ったことで、中学校の授業で"eat"を"ate"に教師が自然と言い直し(リキャスト)していたのですが、児童にとっては何で変わったのか、わからないままやり取りをしていました。簡単にでも文法の説明をするのは必要だと思うのですが、どうなのでしょう？

回答

過去の文脈がはっきりしている場面では、"ate"を使うことを子供自身に気付かせることが必要だと思います。そのためには、教師や友達とのSmall Talkなどの活動の中で"ate"のインプットにたくさん出会い、自分でもアウトプットしていくことがよいと思います。

このような活動を体験していく中で、教師が自然と言い直し(リキャスト)をしたときに、やがて自分の間違いに気付けるようになると思います。

質問

英語力を伸ばすためには今からどんなことをしたらよいですか。

講座で拝見した英語の先生は、生徒の間違った英語文法を正しく直してリキャストすることによって正しい英文法に気付かせていました。しかし、中学英文法も全部忘れてしまった私には、正しく直すこともできません。どのように学び直せばよいのか、素敵なアイデアがありましたら、ぜひ教えていただきたいです。

回答

小学校の先生たちが授業の中で必要になってくる英語力は、日常的な英会話力だと思います。ですから、場面設定のある音声付き英会話集などを利用して、耳から聞いてたくさん発音して覚えてみたらよいと思います。

実は、日常会話で使う表現はそれほど多くありません。一度覚えてしまえば、いろいろな場面でも活用できるものです。日頃から、NHKラジオの「基礎英語」などを毎日少しずつ聞きながら、日常的な会話に慣れることもよいかもしれません。また、授業のSmall Talkで使えるような場面を想像しながら、練習するのもよいですね。文法はまずそれほど気にせず、会話中心でよいと思います。英語が話せるようになったら、その喜びをぜひ子供たちと共有していただきたいと思います。頑張ってください。

III

講座受講による意識の変容

— 各回のリフレクションの内容及びリフレクションシートから見える成果と課題 —

それぞれの講座終了後に受講者が提出したリフレクションシートには次の6項目について回答を求めた。

1. 名前
2. 所属
3. 勤務校
4. 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと
5. 今後の授業において活用したいこと
6. 質問

なお、リフレクションシートで寄せられた質問とそれに対する回答については、前述のII講座概要に掲載している。

第1回 学習指導要領

1 リフレクションシートの内容

※受講者から、同じような内容のコメントがあったものについて集約した。

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

ア. 学習指導要領の理解

中学校での外国語科では聞くことの活動の中に、「聞いたことの中から概要や要点を把握し、その内容を英語で説明する活動」が含まれていることを知り、中学校、高校までの接続を意識して指導することが大切だということを学んだ。(足立区)

今回学習指導要領を理解することで、子供たちがどのように社会と関わりよりよい人生を送るか、基礎的な知識や技能を習得して、課題を解決するために思考力、判断力、表現力を働かせていくことや、主体的に学習に取り組む態度を養っていくことが重要であることを学ぶことができた。(足立区)

学習指導要領では小学校から中学校、高校へとつながる学習の系統性について知ることができた。そして、それぞれの学校種の目標に応じた指導方法を改めて知ることができた。また、暗記することより、伝えたり、学んだことを生かすことが外国語学習においても大切だということが理解できた。(浦安市)

小学校だけでなく中学校や高等学校にどのようにつながっていくかという視点で改めて考えることができた。今、目の前にいる児童たちの学びをつなげていくために、自分自身が接続を意識しながら教えていく必要性があることを感じた。(横手市)

学習指導要領を初めて深く読み、小学校段階で身に付けるべき目標を具体的に知ることができた。また小学校では英語に慣れ親しむことが大切であるということを改めて感じた。新しく「読むこと」と「書くこと」が追加されたが、音声で十分親しんだ上で音声に関連付けた指導が大切であることがわかった。(横手市)

イ. 宣言的知識と手続的知識

英語の習得のさせ方は従来の教え込みのような授業ではなく、児童たちが「英語ではこう言えばいいのか」と気付くことができる授業を行うことが必要であると学んだ。文法を説明して覚えさせるのではなく、文法を知らなくても言える、いわゆる手続的知識を得ることが大切だと教えていただいた。(浦安市)

受容語彙と産出語彙の扱いについて、たくさんある言葉の中から、言いたいことを伝えるために学んでいくことで、ボキャブラリーが広がることを学んだ。また何回も使いながら覚えていくことが大切であることを学んだ。(横手市)

ウ. 教科等横断的な学習

教科等横断型の学習が進められている中、外国語の学習においては他教科で使われる語彙(家庭科の栄養素、算数の単位や道具など)を英語で気軽に表現できるなど、活用は多岐にわたると感じた。(足立区)

エ. 学級担任の役割

現在教育を受けている子供たちの未来は、大人の価値観では予測不可能であるということ、だからこそ柔軟に考えていける生きる力を身に付けなくてはいけないということを再確認した。(足立区)

学級担任は英語が苦手であっても積極的に英語を使うロールモデルとなることで、英語を苦手とする児童の意欲向上につながるとわかった。(浦安市)

英語を使おうとする姿勢を、教師自身が見せること。普段、英語で話をする場面を目にすることが少ない児童たちにとって、ロールモデルになるということを学んだ。(横手市)

(2) 今後の授業において活用したいこと

いかに1時間の中で外国語に触れる時間を作るかという観点から考えると、教師が常に英語を使う必要があるので、まずは教師から間違いを恐れずに使っていきたい。(足立区)

英語が好きで臆せず話せる児童を増やせるようにしたい。ゲームなどを通して楽しく英語を発し、学んだ英語表現を考えながら友達に伝えられるようになれば、英語で話せたことを嬉しく思い、英語をどんどん好きになっていくであろう。小学校の段階で英語が楽しければ中学校でも意欲的に学習に取り組めると思う。英語を少しでも楽しいと思えるような授業をしていきたい。(浦安市)

事前課題で視聴した動画から、日本人教師が積極的に英語を使おうとする姿を見せることで、児童たちが見違えるほど英語を使おうとする態度の変容が理解できた。自分自身では日本語を多用してしまったり、打合せ不足によるALTとの機械的なやり取りのみになってしまったりして、英語を積極的に使おうとする姿勢を見せることができていなかったのも、今後は楽しみながら英語を使っている姿を見せることにより、児童たちがより英語に親しみをもつことができるように支援したい。(横手市)

児童が正しい文法を用いていなかった際に、教師がその場でしっかりと文法表現に正すのではなく、同調的・共感的に受け止めた上で、教師自身が自然に正しい文法表現で話せばよい、という指導方法を用いたい。児童の「英語で話したい、コミュニケーションをとりたい」という意欲を損なわせないように気配りして今後指導していきたい。(横手市)

2

リフレクションシートから見える成果と課題

(1) 成果

※受講者にとって次のような成果が得られた。

- ・学習指導要領改訂のポイントについて理解が深まった。
- ・中学校の指導内容について学び、中学校、高等学校との接続について理解した。
- ・小学校においては音声に関連付けた指導が重要であることを理解した。
- ・語彙・文法を宣言的知識として指導するのではなく、児童が使いながら習得できる指導が必要であることを学んだ。
- ・教科等横断型の指導が可能であることを理解した。
- ・学級担任自身は必ずしも流暢な英語話者であることが必要ではなく、英語を楽しんで使う姿を児童に見せることが重要であることを理解した。

- ・授業で教師が英語を使うことの目的が、児童への英語のインプットを増やすことにつながるので、教師はできるだけ英語を使うべきだという意欲が向上した。

(2) 課題

※受講者にとって次のような課題がある。

- ・学習指導要領を読んではいくが、その内容を深く理解し実践に生かすためには今回のような研修が必要である。
- ・自分自身の英語学習の経験から脱却できずに、宣言的知識の伝達の授業を行いがちである。

第2回 効果的なティーム・ティーチングの在り方

1

リフレクションシートの内容

※受講者から、同じような内容のコメントがあったものについて集約した。

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

ア. ALTとのラポール構築

ALTとのラポールを構築することで、教師が英語で楽しそうに会話している姿を児童に見せることが大切であり、授業外でも時間を見つけてALTと会話し構築した関係を維持することが大切だと理解した。(足立区)

ALTに対してだけでなく、対人関係には笑顔や挨拶、楽しい雰囲気が有効であることを再認識した。ラポールという言葉は初めて知った。(足立区)

全国には私達と同じように一生懸命英語の学習に取り組もうとしている先生方がいることに気付き、心強く感じた。しかしながらALTの出勤日が週3日で全時間に授業が入っており、担任には休み時間、放課後も含めて空き時間がない。このような日々の中でALTとのラポールの構築の余裕はないので、講座内容は実態に合っていないと思った。(浦安市)

講師のデモンストレーションを見てALTとの接し方を具体的に学ぶことができた。例えばALTが多くの表現を用いて児童を褒めている様子を見て、どんなことでも発話したことを褒めていくことが意欲につながると感じた。(浦安市)

児童が外国語を聞くことや外国語を話すことばかり重視していたが、児童の前でALTとの素のコミュニケーションを図ることによりロールモデルとなることが大切であることを学んだ。(横手市)

ALTの本音を聞くことができたので、今後どう接すればよいのかを考えるきっかけとなった。(横手市)

イ. 学級担任の役割

たとえ英語が流暢でなくても、学級担任がALTとコミュニケーションを懸命に図ろうとする姿を児童に見せることに意義があるということを学んだ。(足立区)

児童の実態を理解している担任だからできること、異なる文化をもつALTができることがそれぞれあることを再確認し、お互いに協力するTTの大切さに気付くことができた。(浦安市)

ウ. 授業前の打合せ

ALTとは、授業内容について綿密に打合せをしなければならないと思っていたが、要点のみを伝えることでも十分であることに改めて気が付いた。全科の教員にとっては授業間の時間も児童の対応に追われることが多く、時間をかけずに打合せができるのなら助かると感じた。(足立区)

打合せ用テンプレートにキーワードを記載すれば、授業をスムーズに進めることができることがわかった。(足立区)

(2) 今後の授業において活用したいこと

打合せ時には、授業の展開だけでなく、「この部分はリードしてほしい」「子供の中に入ってほしい」など、具体的な指示を出すようにしていきたい。(足立区)
ALTだけでなく、他の国の方とコミュニケーションを図る時には文化の違いを尊重して、お互い気持ちよく会話を楽しめるように話題に気を配り、出身国によるステレオタイプな決めつけをしないように心がけていきたい。(足立区)
担任が日本語をたくさん使って説明するのではなく、子供が英語を真剣に聞き、英語の指示や言葉で動けるような支援をしていきたい。(足立区)
児童たちが外国語で何かを発信することばかり重視してきたが、これからは学級担任がALTとの素のコミュニケーションを示すことで、コミュニケーションのロールモデルになりたい。(浦安市)
今回学んだNice、Good job、Great job、Super等の様々な褒め言葉を使って、児童同士も互いに褒めあう場面を作っていきたい。(浦安市)
打合せで使える例文等を学んだので、次の打合せから少しずつ使って身に付けていきたい。(横手市)
Lesson Planの伝え方で、「ここはALTがリードする」という役割分担をはっきりさせることを忘れずに伝えていきたい。(横手市)
楽しく学ばせることは外国語の授業で重要なので、ヒップホップビートをすぐに活用したい。(横手市)

2 分析から見える成果と課題

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

※受講者にとって次のような成果が得られた。

- ・ALTとの親和関係を構築することにより、授業前の打合せも授業中もコミュニケーションを図ることが容易になることを理解した。
- ・学級担任がALTとコミュニケーションを図る姿を児童に見せることが大切であることを学んだ。
- ・外国語の授業においても、学級担任が授業の主導権を握るべきであることを理解した。
- ・指導案テンプレートを準備して、要点を書き込む等の方策を講じれば口頭でのやり取りに不安を感じることなく打合せができることを学んだ。
- ・英語で授業を進める際に使える児童を褒める表現を学んだ。

(2) 課題

※受講者にとって次のような課題がある。

- ・多くの受講者がALTとの英語によるコミュニケーションに不安を感じている。
- ・学級担任にとってティーム・ティーチングのためのALTとの打合せ時間を確保することが難しい。
- ・ALTとの打合せでは、依頼したい内容をうまく伝達できない場合がある。

第3回 Small Talk の実際とデジタル教科書への接続

1 リフレクションシートの分析

※受講者から、同じような内容のコメントがあったものについて集約した。

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

ア. Small Talk ・対話方略

Small Talkを行うことで児童に英語を使うことに慣れさせるとともに、表現の定着を目指すことが大切であることを学んだ。児童が積極的にSmall Talkを行うためには、教師が対話方略を駆使して児童が「話したい」と思える対話を用意することが大切であることがわかった。(足立区)
3・4年生でもインプットとして子供たちにSmall Talkを行うことが大切である。Small Talkの最初の一步は相づち、アイコンタクト、スマイルである。繰り返しインプットをすることで、子供たち同士のSmall Talkで既習表現を使えるようになっていくことがわかった。(足立区)
5年生は先生とのやり取りが中心で、6年生は児童同士でペア学習が中心に行うことを知った。また、やり取りを繰り返すことが大切ということも定着させるために必要だとわかった。(足立区)
文部科学省のビデオでSmall Talkの実践例を視聴した際に、どこに対話方略が使われているのかの解説が入っていたのでSmall Talkの進め方が具体的に理解することができた。(浦安市)
Small Talkは児童の好きな時間で、楽しく英語のやり取りをしているが、今回の講習で、指導者側がまだまだやらなければならない指導・支援があると感じた。(浦安市)
Small Talkにおいて既習事項の確認を行うことができることがわかった。(横手市)
Small Talkはただ話すのではなく本時のめあて、題材などに結び付ける話題をALTと見付けていくことが大切だということ学んだ。(横手市)
Small Talkの実際をビデオで視聴し、これまでなかなかつかめなかったイメージを具体化することができた。(横手市)

イ. 視覚教材の活用

英語の掲示物は無駄ではなく掲示した方がよいとの講義を聞き安心した。(足立区)
写真や絵カードを使い視覚的に捉えさせることが大切であることを再認識した。(浦安市)

ウ. その他

私は英語力に自信がないので、講座で示されたようなSmall Talkを実行できる自信がない。ぜひ英語専科教員を採用してほしい。(浦安市)
--

(2) 今後の授業において活用したいこと

会話がうまくつながっていかないときも、繰り返しや相づちを使いながら会話を続けていくことを実践したい。成功体験が積み重なることで子供たちも外国語に楽しんで意欲的に取り組んでいくと思うので、中学校に向けて少しでも外国語を好きになってもらえるように専科教員と連携しながら工夫していきたいと思う。(足立区)
意欲満々な3年生に対して、正しい表現を使ってインプットをたくさん行っていきたい。外国語の授業だけでなく、生活の中や他の授業の中でも既習の表現を多く使って子供たちが外国語の表現に慣れ親しんでいけるようにしたい。相づちをうつ言葉を吹き出しにして掲示をするなど、会話を続けるための表現のインプット方法を工夫していきたい。(足立区)
Small Talkで会話を続けるコツを、児童にもわかるように掲示物などを作成して提示する。(足立区)
Small Talkで使う表現を児童に提示するときには、一方的になってしまわないよう児童を巻き込んだ場面づくりが大切と学んだので、ALTが言ったことを受け、児童に問い直したり、確認をしたりしていこうと思う。また、繰り返したり、一言感想を言ったりという取り組みやすい対話方略を使いたい。(浦安市)
大人でも、子供でも、話題がたがわず話することがないという場面がたくさんある。英語が苦手なのではなく、話題がなく雑談ができないという児童が多いように感じる。そういう意味で、Small Talkの難しさがあるので、教員が事前に趣旨に合った話題などを用意しておくことが必要になってくると思った。言語を学ぶということは、文化を学ぶことなので、Small Talkにはたくさんの背景が含まれているということに気付くことができた。(浦安市)
普段ALTとの話が長続きせず気まずかったが、繰り返しや一言感想のテクニックを活用したい。(横手市)
担任が一方向的に話すのではなく、クイズや質問などの対話方略を使いながら児童が外国語に親しむようにする。(横手市)
デジタル教科書の使い方を再確認し、「児童たちにこんな能力をつけたい」「こんな場面での対話を」を大事にした授業を行う。(横手市)

(1) 成果

※受講者にとって次のような成果が得られた。

- Small Talk が既習事項の確認やインプットのための働きをもつことを学んだ。
- 対話方略を学んだ。
- 掲示物やカードなどを有効利用して情報をインプットすることの必要性を学んだ。

(2) 課題

※受講者にとって次のような課題がある。

- Small Talk の具体的イメージをもつことの難しさを感じている。
- 教師自身の英語力への不安が Small Talk への不安につながっている。
- 学年により Small Talk の方法を変えていくと効果的であることについての理解が教員間に広く浸透していない。

第4回 学習指導と評価

※受講者から、同じような内容のコメントがあったものについて集約した。

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

ア. 指導と評価の一体化

ペーパーテストや一回の場面で評価を決めるのではなく、評価規準・判断は各学校で、また場面や方法も工夫しながらバランスよく評価しなければならないことがわかった。(足立区)

指導と評価の一体化を図るための授業の流れの工夫を知ることができた。評価をするために1時間で全てを見取るのではなく、毎時間コンスタントに見取っていくという方法を学んだ。(足立区)

児童の学習評価の結果から、自身の授業計画を見直したり、改善していく必要性を理解した。(足立区)

P(Plan) D(Do) C(Check) A(Action) サイクルを学んだ。(足立区)

どのような活動状況をA評価とすることが具体的に示されたのでよく理解できた。児童に対しても、評価規準を伝えることが大切だと学んだ。(浦安市)

評価のポイントとして「スクリプト+α」を学んだ。そのためには日々の授業の構成に加えてゴールを明確にしたアクティビティを計画することが重要であることがわかった。(浦安市)

単元を構成する時に、どこで何をどのように評価するのか計画することが大切だということを学んだ。(横手市)

評価規準を実態に合わせて学校・学年で決めるとよいことがわかった。時間ごとに評価すれがよいこと、そのために組織的、計画的に行うことが大切だということを学んだ。(横手市)

イ. 必然性

目的意識をもたせ、そのためにも「必然性」があることという言葉がとても参考になった。(足立区)

必然性のあるアクティビティの具体的な例示がとてもわかりやすかった。低学年なら色、中学年なら色とデザインなど、同じようなシチュエーションでも学年に応じてステップアップすることが可能であると知り、外国語活動に苦手意識がある児童でも安心してできるようになるのではないかと考えた。(足立区)

必然性のある授業構成を考えなければ子供に英語力は身に付かないことがわかった。そのために単元計画では子供たちの実態に合った明確なメインゴールを設定し、対話を十分に取り入れた構成にする必要があると学んだ。(横手市)

必然性のある授業を構成するために、単元構成はメインゴールを児童の実態に合った明確なものにし、対話を十分に取り入れた構成にする必要があることがわかった。(横手市)

ウ. 教科横断型

CLILについて新しく学んだ。算数ではたし算を英語で出題したり、給食の時間のじゃんけん等、普段の学習や学校生活で取り組む機会が見つけられることに気付いた。(足立区)

他教科の学習中に児童が「これは英語なら何て言うのだろう」と呟くことがある。他教科と連携して授業を進めることにより児童はより一層意欲的に学習に取り組めるであろうと感じた。(足立区)

外国語を各教科において横断的に活用する方法を学んだ。これまでは、外国語は外国語として学ばせるという視点で考えていたが、今後、他教科においても外国語を横断的に活用できると思った。(浦安市)

色の単元では、色の足し算を利用してその答えとして新しい色の名前が出てくるという発話の必然性がある活動を知った。身近な素材のなかから、無理なく利用できるのがたくさんあることがわかった。(浦安市)

教科横断型授業に対しては難しいイメージをもっていたが、社会や図工と関連させた学習活動例が示されたので、挑戦してみようと思う。(横手市)

必然性のある授業を構成するために、単元構成はメインゴールを児童の実態に合った明確なものにし、対話を十分に取り入れた構成にする必要があることがわかった。(横手市)

(2) 今後の授業において活用したいこと

単元の最終活動は自分の気持ちや考えを伝えられるものに設定したい。最終活動を設定する際には合わせて評価を意識したい。(足立区)

授業を行う前にその授業の中で何を見取るのかを意識して、評価基準をしっかりと確認した上で取り組んでいきたい。(足立区)

児童に、活動中の明確なゴールを与える重要性を再確認できました。何気なく行う活動ではなく、最終的に何を学ぶのか、何ができるようになっていのかなど、学ぶ意味をもたせてこそ、活動が意欲的になり、自発的になるのだと思った。そのゴールに向けて繰り返し活動する意味なども理解させながら指導をしていきたい。(浦安市)

単元計画を立てる際に、評価の見通しをもって見取り方を学年の先生方と相談しながら進めていきたい。こまめな少人数での見取り方を教えていただいたので、トライしてみたい。(浦安市)

ペアでの発表、グループでの交流など小さなところから自信を付けさせ、楽しく会話ができる授業を目指したい。あまり気張らず児童と一緒に活動していきたい。(横手市)

評価に関して毎回細かく一人一人を見取ることはできないが、少人数での発表やグループでの発表を毎回取り入れその積み重ねの評価を残していくようにしたい。(横手市)

2

分析から見える成果と課題

(1) 成果

※受講者にとって次のような成果が得られた。

- ・単元計画を立てる際には評価を合わせて計画しなければならないことを理解した。
- ・活動の評価方法を具体的に理解することができた。
- ・評価規準を児童と共有することが必要であることを理解した。
- ・児童が英語を使いたくなるような必然性のある場面設定が児童の英語学習への意欲を向上させることを理解した。

- ・教科横断型の授業は授業の一部に取り入れるだけでも構わないことを学び、今後取り組んでみようという意欲をもった。
- ・児童の学習成果物を評価するだけでなく、児童へのアドバイス等を書き加えることが有用であることを理解した。

(2) 課題

- ※受講者にとって次のような課題がある。
- ・評価と評価の一体化について理解することが難しい。
 - ・教科横断型授業(CLIL)は難しいという先入観から容易には取り組めない。

第5回 小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待

1 リフレクションシートの分析

※受講者から、同じような内容のコメントがあったものについて集約した。

(1) 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと

ア. 学習の動機付け

児童の動機付けのための振り返りシートの活用を学んだ。他人との比較ではなく児童自身が自分の中でどれだけ成長できたかがわかるようにすることができることがわかった。(足立区)
英語学習への関心は小学校高学年が高く、中学校に進学すると下がってしまうので、意欲を持続させることが大切であることがわかった。そのためには単元や本時の始まりに動機付けを行い、学習意欲を高めることが必要である。(足立区)
3段階の動機付けを学んだ。授業前段階では、児童は間違えながら上手になっていくということ。次に授業中段階である。できた、わかった場面をたくさん作るということがやる気につながるということ、授業後段階では、振り返りシートの活用で、どれだけ児童が成長できたか自分にフォーカスすることが大切であることを学んだ。(浦安市)
英語が楽しいと思えるためには教師の姿勢が大切であることを学んだ。「誰でもできる」、「間違ってもいい」という温かい雰囲気づくりや児童たちを褒めることにより楽しい授業づくりをしたい(横手市)

イ. インプットの重要性

耳や目からインプットされる英語がとても重要であるということ、インプットされる言語の意味付けをしっかりと行い、理解したら繰り返しアウトプットする練習の必然性を学んだ。(足立区)
インプットの重要性について学んだ。音声のない言語は存在しないので音声からの習得が大事であると学んだ。インプットさせるときには場面設定が必要で、ジェスチャーを交えながら児童に伝えるとよい。インプットを十分に行うことで英語の習得につながることを学んだ。(浦安市)
音声インプットが重要であること、英語が楽しいと実感させること、正解を追求しすぎず意味が通じることが大切だということ学んだ。(横手市)

ウ. 宣言的知識から手続的知識

宣言的知識とは言葉で説明ができる知識。手続的知識とは、実際に使いこなす知識という言葉と、英語教育では手続的知識の習得を目指しているということ学んだ。(足立区)
言語習得はインプットから始まること。手続的知識の定着を意識し、間違いながら上達するという信念をもって指導に当たる必要があることを学んだ。(横手市)

エ. 中学校への接続

外国語の学習は中学校進学後も続くため、小学校での学びで完結させるのではなく、繋がりを意識した指導が必要となっていくと感じた。そのためにも小学校と中学校が連携していくことが大切なのだと改めてわかった。(足立区)
外国語を活用する能力を小学校卒業後も伸ばすためには、小学校と中学校が連携して、学び方を共通理解していくことが重要と改めて感じた。小学校の4年間だけを考えるのではなく、その後どのように学びを深めていくのか小学校の教員も理解した上で指導をする必要があると考えた。(浦安市)
中学校との連携には、お互いの学習や活動の理解だけでなく、「人」「もの」「方法」を連携していく取組があることを知った。(浦安市)
小学校での学びが中学校でどのように生かされているか知ることができた。小学校での活動型の授業の基礎が中学校に行ってから大切になると感じた。(横手市)

オ. 英語を使うモデル

担任は、「英語を話そうとするモデル」になれるように、失敗を恐れず、苦手意識をもたず、英語を積極的に話さなければならぬと理解した。(足立区)
学級担任は外国語の学習の中で児童の「英語のお手本」になるのではなく「英語を使う人のお手本」になることが必要だと学んだ。(足立区)
児童の発言に対してリキャストできるように、自分自身の英語力向上が必要であると感じた。(浦安市)
英語が好きになる子供を育てなければならぬと思った。そのために自分自身が英語を好きになってこれまで以上に教材研究をしていくことが大切だと思った。(横手市)

(2) 今後の授業において活用したいこと

英語を使う人の見本を児童に示すことのできるよう、できるだけ英語を話し、自信をもって児童の前に立ちたいと思った。(足立区)
中学校に入学後、英語が楽しいと思う生徒の割合が下がるというデータから、成長過程にあった動機付けが大切だと感じた。小中連携を大切にしていきたい。(足立区)
間違っても大丈夫と児童たちが感じられるように授業をしたい。間違いを受容できるクラス作りをしていきたい。自尊心、自己肯定感を高めるように、英語の褒め方のバリエーションを増やそうと思う。(浦安市)
文字指導に関して、どの程度書けていけばよいのか、また書かせなければいけないのかを理解して指導していきたい。(横手市)
私自身が英語を話すことを苦手とっていてよくALTに尋ねている。そういう姿勢は英語は間違えながら上手になってできるようになるという姿を見せながら自分も学ぶ意欲をもち続けていきたい。(横手市)

2

分析から見える成果と課題

(1) 成果

※受講者にとって次のような成果が得られた。

- ・授業中に児童を褒める等の方策で学習への動機付けを行うことが有用と理解した。
- ・英語を使いたくなる必然性のある場面を設定することの必要性を理解した。
- ・音声インプットの重要性を理解した。
- ・小学校での学びが中学校でどのように生かされているのかを具体的に理解できた。
- ・学級担任は「英語を使う人」のモデルとしての姿を児童に示すことが大切であることを理解した。

(2) 課題

※第5回講座は第1回から第4回の総括であるため、新しい課題は見出されない。

IV 講座内容に対する評価

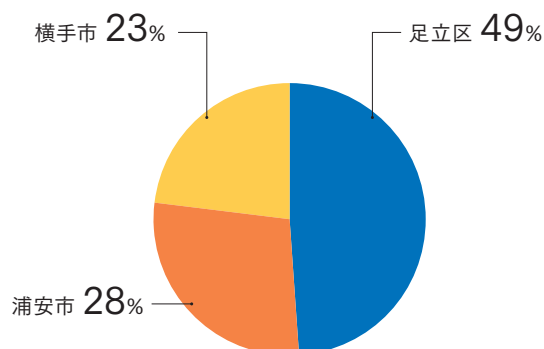
— 各回の評価アンケート結果分析及びクロス集計を用いた分析 —

各講座の終了後に受講者に対して講座内容に関する評価アンケートを実施した。受講者には各講座終了後3日以内に回答をしてもらった。ここからは、第1回から第5回講座まで各講座の評価アンケートの結果と分析を記す。評価アンケートは、最初に属性に関する質問4つ、次に内容に関する質問9つで構成された。なお、「質問7: 講座後のタスクは役に立ちましたか。」に関しては、アンケート回答期限までにタスクを実施できない場合があったので、全5回とも質問7に関する結果分析は行わなかった。

第1回講座 評価アンケート 結果分析

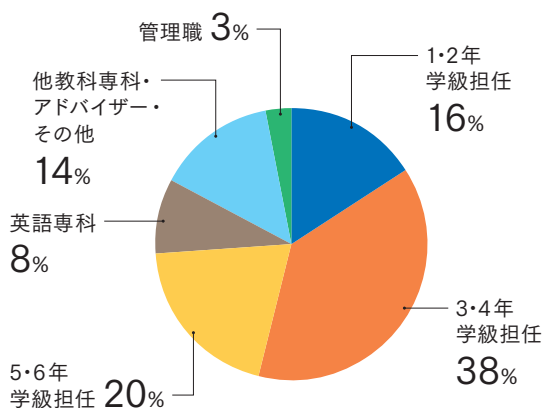
[属性①] 所属地区

足立区がほぼ3分の2を占めた。浦安市と横手市は残りの3分の1を占めた。



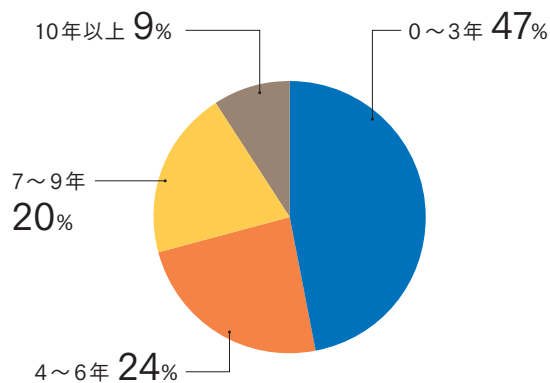
[属性②] 立場

1・2年担任 (16%) と 3・4年担任 (38%)、そして 5・6年担任 (20%) を合わせて 74% と、全体の 7割以上を学級担任が占めた。



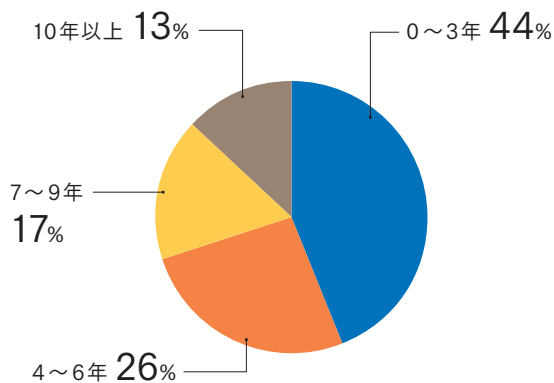
[属性③] 外国語(活動) 指導経験年数

0～3年が約半分の47%を占めていた。4～6年も24%であり、0～3年と合わせると71%となり、受講者の7割以上は経験が浅いことがわかる。



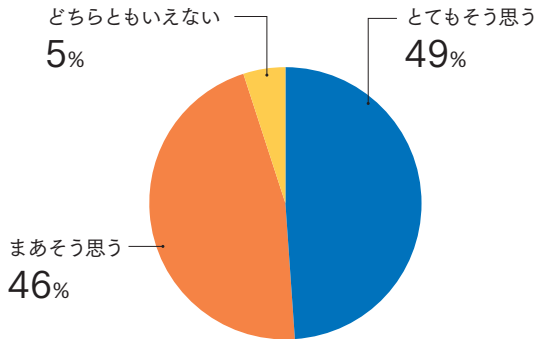
[属性④] 外国語(活動) TT 経験年数 (日本人とのTTも含む)

44%の教員が外国語TTの経験が0～3年であり、4～6年が26%と経験が浅い教員が7割を占めていることがわかる。



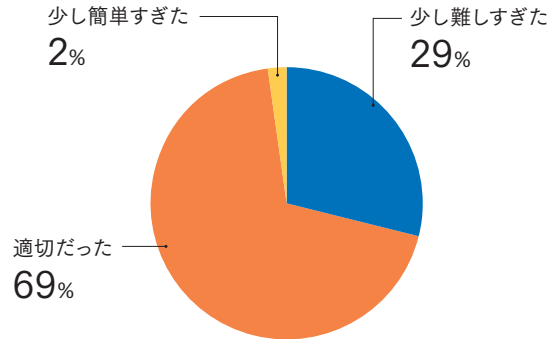
[質問①] 講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「とてもそう思う」(49%)と「まあそう思う」(46%)を合わせて肯定的意見が95%を占めた。



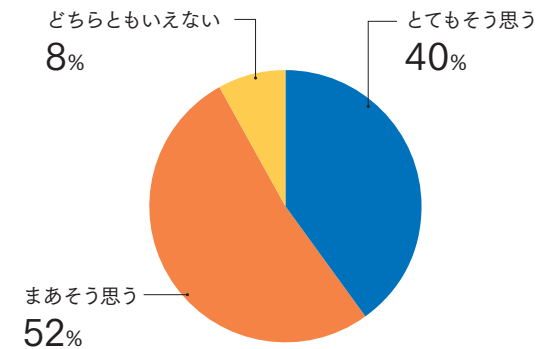
[質問②] 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

69%とほとんど7割が「適切」と回答し、29%が「少し難しすぎた」と回答した。この二つの選択肢が98%を占めた。



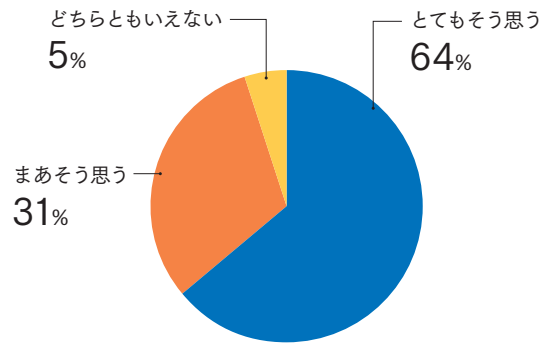
[質問③] 講座で提示された資料の今後活用できますか。

92%が肯定的な回答をした。



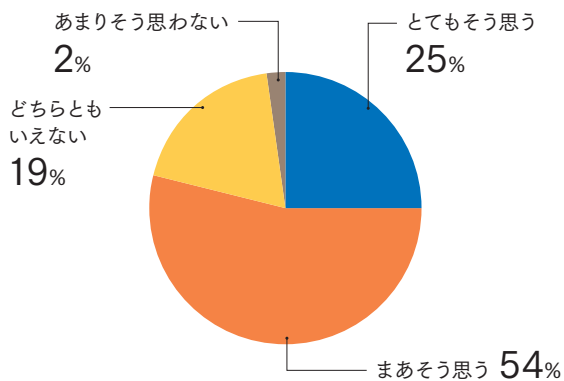
[質問④] 講師の説明はわかりやすかったですか。

肯定的回答が95%を占めた。特に、「とてもそう思う」という回答は64%を占めた。「とてもそう思う」の64%は、これは全ての設問の中で一番大きな割合となった。



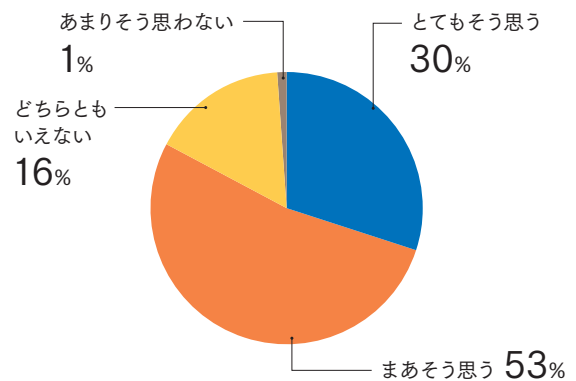
[質問⑤] 講座前のタスクは役に立ちましたか。

「とてもそう思う」が25%で、「まあそう思う」が54%となり、肯定的回答は合わせて79%となった。



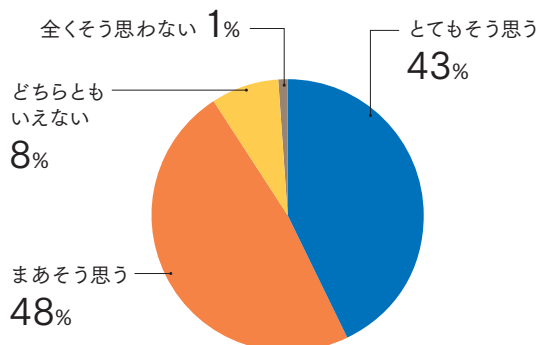
[質問⑥] 講座中のタスクは役に立ちましたか。

上述した講座前タスク以上に肯定的回答(83%)が多かった。



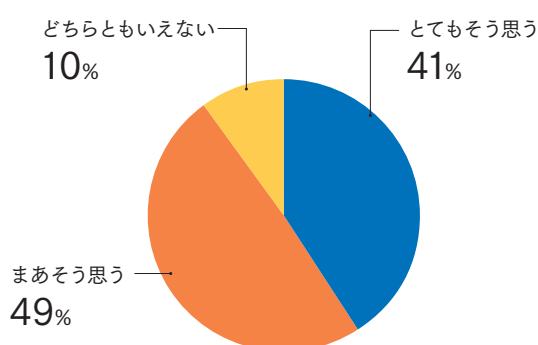
[質問⑧] 総合的にこの講座に満足できましたか。

第1回講座の総合的満足度だが、91%が肯定的回答をした。



[質問⑨] このような機会がまたあれば、受講したいですか。

90%の受講者が肯定的に回答をした。



第1回講座のクロス集計を用いた分析

より詳細な分析のために「受講者の外国語（活動）指導経験年数」と以下の3つの質問のクロス集計表を作成し、各項目間のカイ2乗検定を行った。

1. 質問① 「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した（表1）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=8.425$, $p<.05$ ）。

表1 外国語（活動）指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

		①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。			
		とてもそう思う	少しそう思う	どちらともいえない	合計
外国語（活動）指導経験年数	0～3年	20	19	3	42
	4～6年	12	10	0	22
	7～9年	9	9	0	18
	10年以上	3	3	2	8
合計		44	41	5	90

2. 質問② 「講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った（表2）。ここでも、上述した質問①でも行ったようにカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=1.835$, $p<.05$ ）。

表2 外国語（活動）指導経験年数と「②講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス表

		②講座内容をご自分にとって適切でしたか。			
		少し難しすぎた	適切だった	少し簡単すぎた	合計
外国語（活動）指導経験年数	0～3年	13	28	1	42
	4～6年	5	16	1	22
	7～9年	5	13	0	18
	10年以上	3	5	0	8
合計		26	62	2	90

3. 質問⑧ 「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した(表3)。上述した質問①と質問②で行ったカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった($\chi^2=8.915, p<.05$)。

表3 外国語(活動)指導経験年数と「⑧総合的にこの講座に満足できましたか。」とのクロス表

		⑧総合的にこの講座に満足できましたか。				
		とてもそう思う	少しそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない	合計
外国語(活動) 指導経験年数	0～3年	18	19	5	0	42
	4～6年	12	9	1	0	22
	7～9年	6	11	0	1	18
	10年以上	3	4	1	0	8
合計		39	43	7	1	90

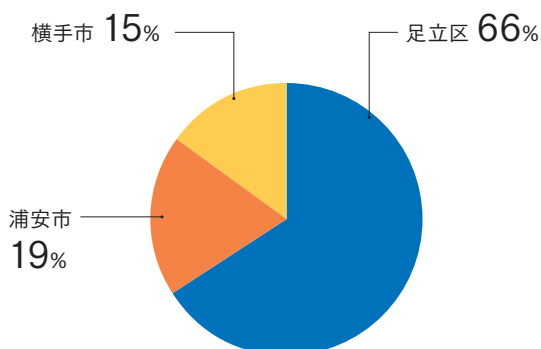
「受講者の外国語(活動)指導経験年数」の「10年以上」という項目に該当するサンプル数が8名と少なかったため、この数を除いて「指導経験年数」を「0～3年」と「4～6年」、「7～9年」の3群だけに絞り、さらに上記の3つの質問と検定を行った。しかし、それでも有意な関係は見られなかった。

上述の統計解析の結果によれば、第1回講座の評価は受講者の「指導経験」とは有意な関係はなかった。つまり、受講者の「指導経験」は講座の評価に影響を与えなかったと考えられる。結論として、全体的に肯定的回答が多かったことから、受講者の「指導経験の長さ」に関係なく、多くの受講者の満足度の高い講座だったと言える。

第2回講座 評価アンケート 結果分析

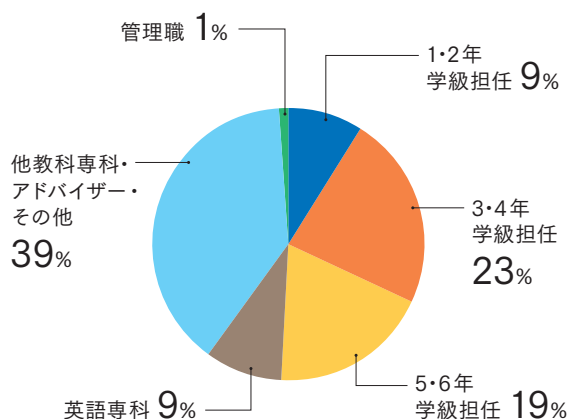
[属性①] 所属地区

足立区がほぼ3分の2を占めた。浦安市と横手市は残りの3分の1を占めた。



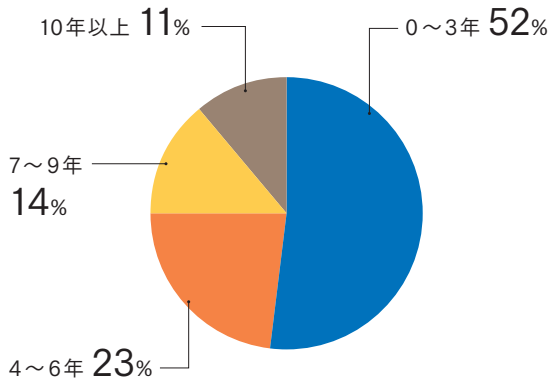
[属性②] 立場

1・2年担任(9%)と3・4年担任(23%)、そして5・6年担任(19%)を合わせて51%と、全体の半分が学級担任であったが、「他教科専科・アドバイザー・その他」が39%とかなり多かった。



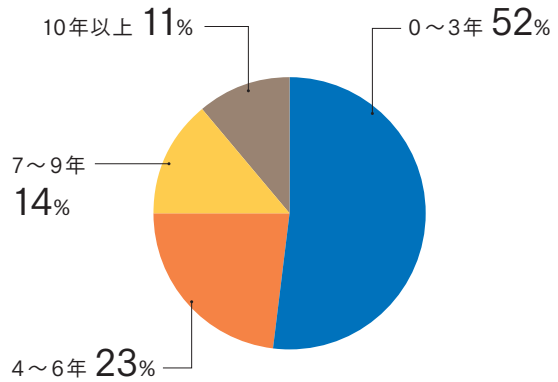
[属性③] 外国語(活動) 指導経験年数

0～3年が半分以上の52%を占めていた。4～6年も23%であり、0～3年の51%も合わせると75%となり、受講者の4分の3は経験が浅いことがわかる。



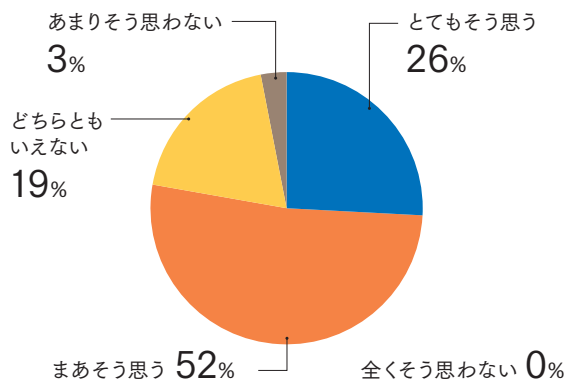
[属性④] 外国語(活動)TT 経験年数 (日本人とのTTも含む)

外国語TTの経験年は、上述の外国語指導経験年数と同じ数値となった。



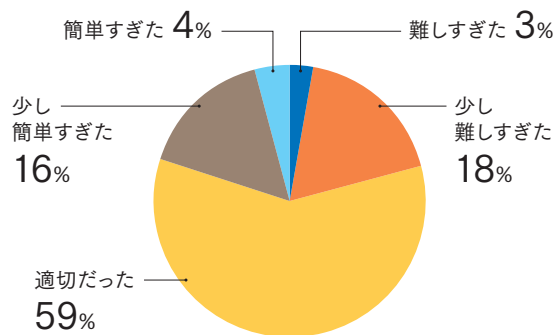
[質問①] 講座内容は学校現場の ニーズに合っていましたか。

「とてもそう思う」(26%)と「まあそう思う」(52%)を合わせて肯定的意見が78%を占めた。



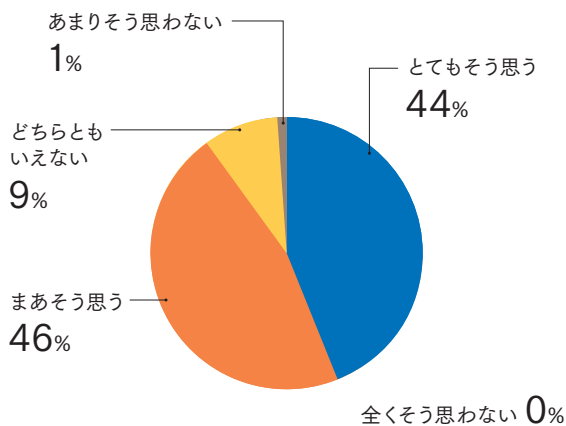
[質問②] 講座内容をご自分にとって 適切でしたか。

59%と約6割が「適切」と回答した。残りの4割のうち、「難しくすぎた」と「少し難しくすぎた」を合わせて21%が「難しい」と感じており、「簡単すぎた」と少し簡単すぎた」を合わせて20%が「簡単」と回答しており、「難しい」と「簡単」が同程度いる結果となった。



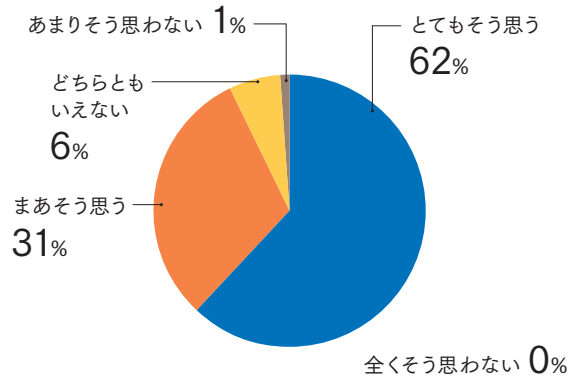
[質問③] 講座で提示された資料の 今後活用できますか。

90%が肯定的な回答をした。



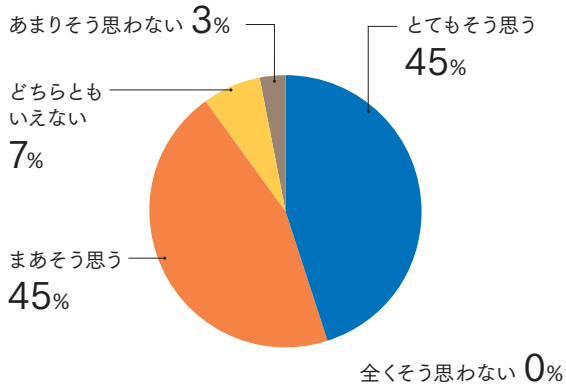
[質問④] 講師の説明は わかりやすかったですか。

肯定的回答が93%を占めた。特に、「とてもそう思う」という回答は62%を占めた。「とてもそう思う」の62%は、これはこの回の全ての設問の中で一番大きな割合となった。



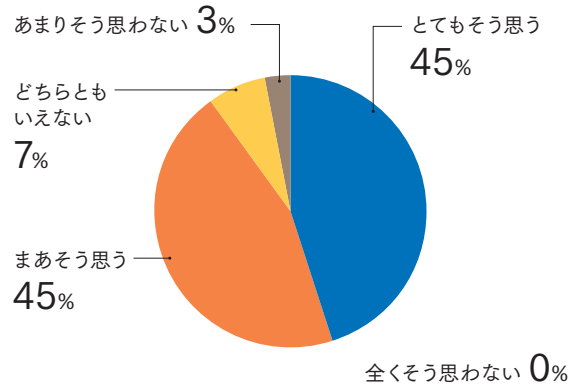
[質問⑤] 講座前のタスクは役に立ちましたか。

「とてもそう思う」が45%で、「まあそう思う」が45%となり、肯定的回答は合わせて90%となった。



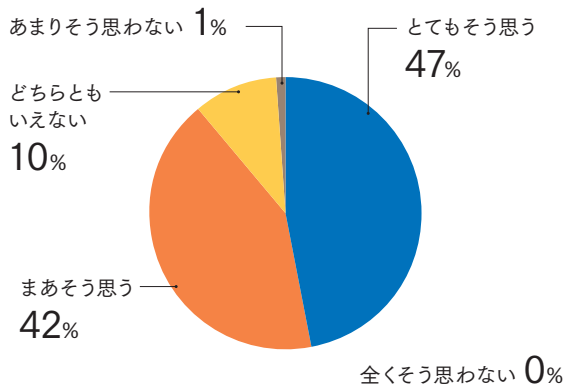
[質問⑥] 講座中のタスクは役に立ちましたか。

上述した講座前タスクと同じ肯定的回答となった。



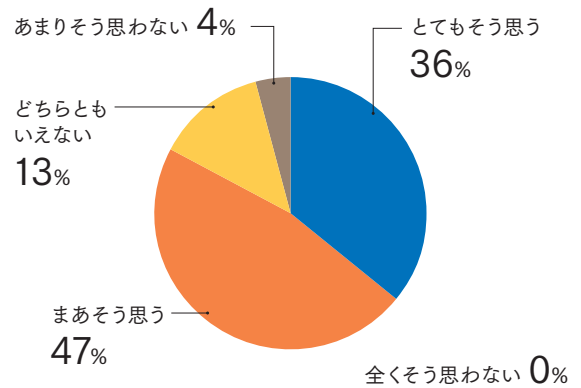
[質問⑧] 総合的にこの講座に満足できましたか。

第2回講座の総合的満足度だが、89%が肯定的回答をした。



[質問⑨] このような機会がまたあれば、受講したいですか。

83%と8割以上の受講者が肯定的に回答をした。



第2回講座のクロス集計を用いた分析

より詳細な分析のために「受講者の外国語（活動）指導経験年数」と以下の3つの質問のクロス集計表を作成し、各項目間のカイ2乗検定を行った。

1. 質問① 「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した（表1）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=14.289$, $p<.05$ ）。

表1 外国語（活動）指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

		①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。				
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	9	30	12	1	52
	4～6年	6	9	4	2	21
	7～9年	8	5	1	0	14
	10年以上	1	5	1	0	7
合計		24	49	18	3	94

2. 質問② 「講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った（表2）。ここでも、上述した質問①でも行ったようにカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=14.215$, $p<.05$ ）。

表2 外国語（活動）指導経験年数と「②講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス表

		②講座内容をご自分にとって適切でしたか。					
		難しすぎた	少し難しすぎた	適切だった	少し簡単すぎた	簡単すぎた	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	3	9	27	9	4	52
	4～6年	0	5	13	3	0	21
	7～9年	0	2	12	0	0	14
	10年以上	0	1	3	3	0	7
合計		3	17	55	15	4	94

3. 質問③ 「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した（表3）。上述した質問①と質問②で行ったカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=8.582$, $p<.05$ ）。

表3 外国語（活動）指導経験年数と「③総合的にこの講座に満足できましたか。」とのクロス表

		③総合的にこの講座に満足できましたか。				
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	24	25	6	0	52
	4～6年	13	6	1	1	21
	7～9年	8	5	1	0	14
	10年以上	2	4	1	0	7
合計		44	40	9	1	94

第2回講座の内容を鑑みて、属性項目の「外国語（活動）のTT経験年数」と上述の3つの質問との関係も調べてみた。しかし、有意な関係が確認できなかった。

「受講者の外国語（活動）指導経験年数」の「10年以上」という項目に該当するサンプル数が7名と少なかったため、この数を除いて上記の3つの質問と再度検定を行った。そうすると、質問①と有意な関係があることが確認できた（ $p=.05$ 、通常は、 p 値は5%未満である場合、有意な関係が見られると判断するが、ここではほぼ有意な関係があると判断した）。さらに残差分析をして、どこにどのような特徴があるかを分析した。その結果、以下の表となった（表4）。

表4 外国語（活動）指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

		①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。					
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	合計	
経験年数	0～3年	度数	9	30	12	1	52
		調整済み残差	-2.4	1.6	1.0	-1.0	
	4～6年	度数	6	9	4	2	21
		調整済み残差	3	-0.8	-0.1	1.8	
	7～9年	度数	8	5	1	0	14
		調整済み残差	2.8	-1.2	-1.3	-8	
合計		度数	23	44	17	3	87

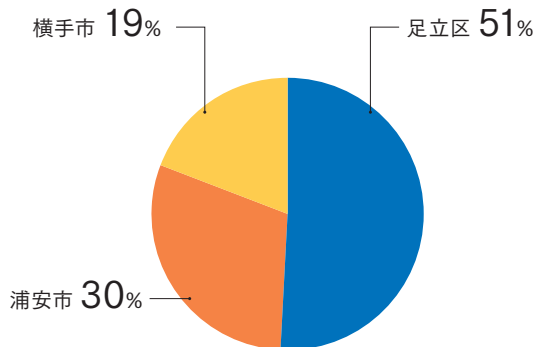
この表によれば、有意な関係（調整済み残差： ± 1.96 以上）にある項目間は2つある。1つは、「0～3年」と「とてもそう思う」で、負の関係（調整済み残差： -2.4 ）がある。つまり、経験年数「0～3年」の受講者は、「とてもそう思う」を選択しない傾向にある。もう1つは、「7～9年」の受講者と「とてもそう思う」であり、正の関係（調整済み残差： 2.8 ）がある。つまり、「7～9年」の受講者は「とてもそう思う」を選ぶ傾向にある。

上述の結果を解釈すれば、「7～9年」の経験のある受講者は第2回講座の内容を学校現場のニーズに合っていると判断し、逆に「0～3年」と経験の浅い受講者は学校現場のニーズに合っていないと判断する傾向にあるようである。つまり、受講者の「指導経験」が評価の判断に影響を与える要因になっていたと考えられる。指導経験の長い受講者はその経験の中で第2回講座の内容である「ALTとのチーム・ティーチング」の重要性を認識しているのかもしれない。しかし、経験の浅い受講者はその必要性をまだ感じたことがないと言えるかもしれない。その結果として、「指導経験の長さ」が第2回講座内容が「学校現場のニーズに合っている」かどうかの認識の違いになっていたと推察することができる。いずれにして、総合的に見れば、第2回講座は高い評価を得ている。

第3回講座 評価アンケート 結果分析

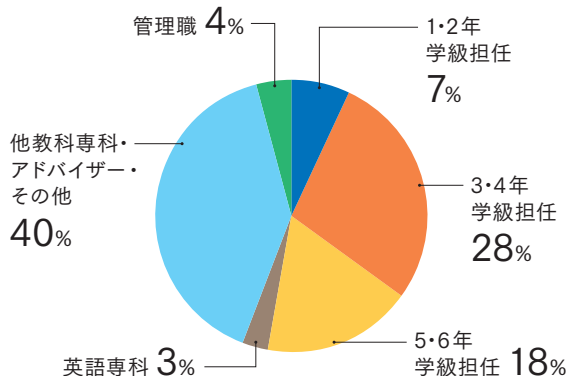
[属性①] 所属地区

足立区がほぼ半分を占めた。浦安市が30%、横手市は19%を占めた。



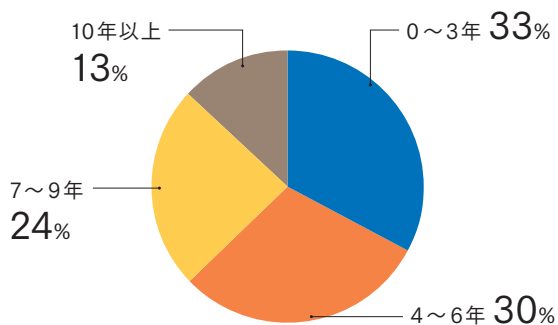
[属性②] 立場

1・2年担任(7%)と3・4年担任(28%)、そして5・6年担任(18%)を合わせて53%と、全体の半分程度が学級担任であった。その次に「他教科専科・アドバイザー・その他」が40%とかなり多かった。



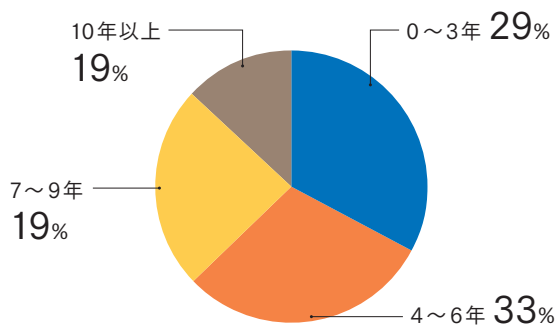
[属性③] 外国語(活動)指導経験年数

「0～3年」が33%を占めてもっとも多かった。次いで、「4～6年」が30%であった。第1回と第2回と比べて、この回が経験が6年以下の割合が一番少なかった。つまり、7年以上と比較的長い経験をもつ受講者が最も多い回であった。



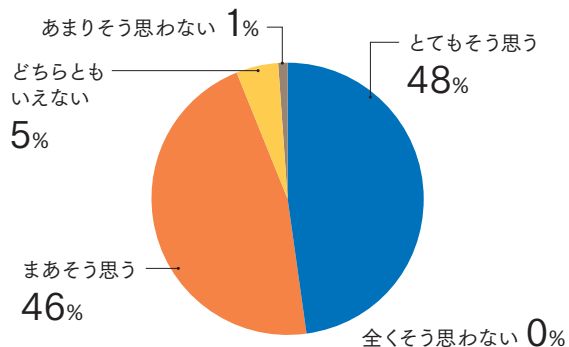
[属性④] 外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む)

外国語TTの経験年は、「4～6年」が最も多く33%、次いで「0～3年」が29%となり、上記の属性③と違って両者が逆転したが、全体的には同じような構成であった。



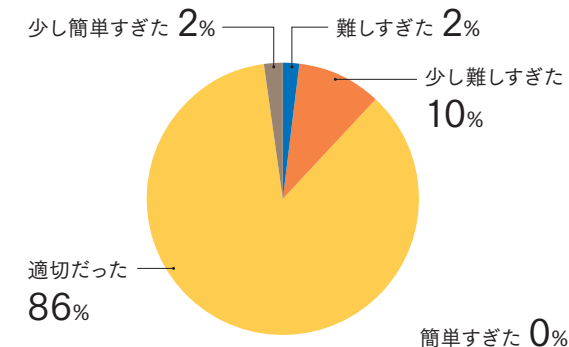
[質問①] 講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「とてもそう思う」(48%)と「まあそう思う」(46%)を合わせて肯定的意見が94%を占めた。これは第3回までの中で最高値となった。



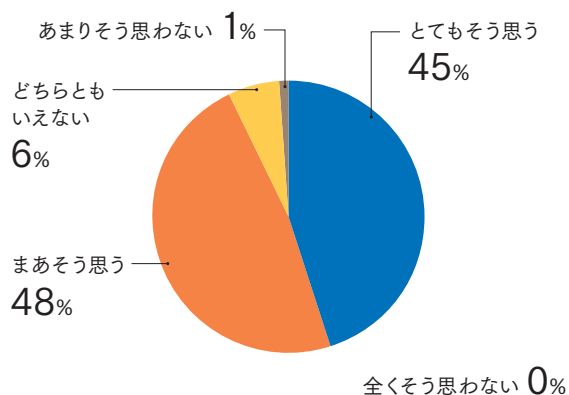
[質問②] 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

「適切」の回答が86%であり、これは第3回までの中で最高値となった。10%が「少し難しすぎた」と回答した。「難しすぎた」と「少し簡単すぎた」がそれぞれ2%を占めた。



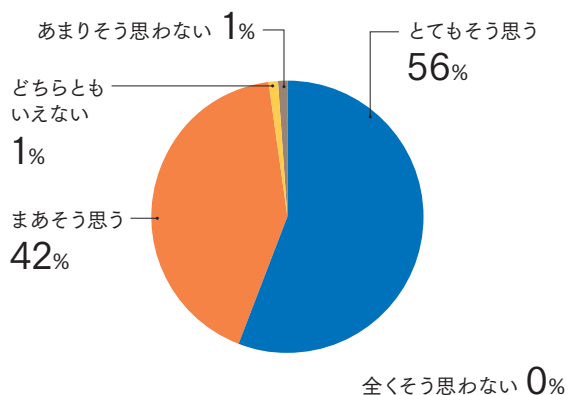
**[質問③] 講座で提示された資料の
今後活用できますか。**

93%が肯定的な回答をした。



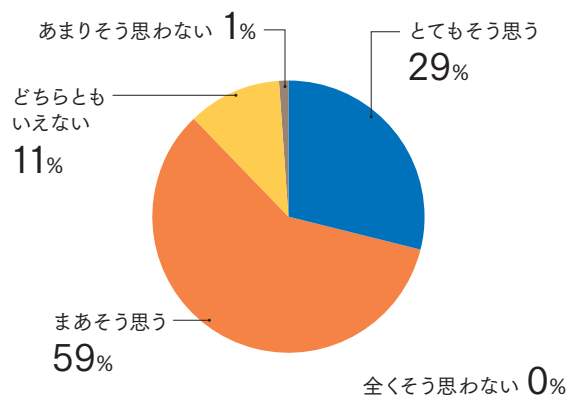
**[質問④] 講師の説明は
わかりやすかったですか。**

肯定的回答が98%を占めた。それ以外の回答はほとんどなかった。



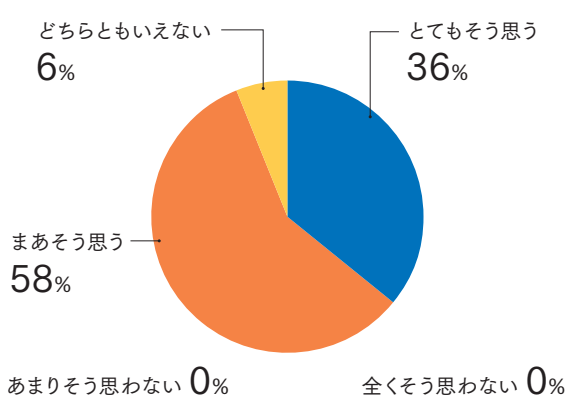
**[質問⑤] 講座前のタスクは
役に立ちましたか。**

「とてもそう思う」が29%で、「まあそう思う」が59%となり、肯定的回答は合わせて88%となった。



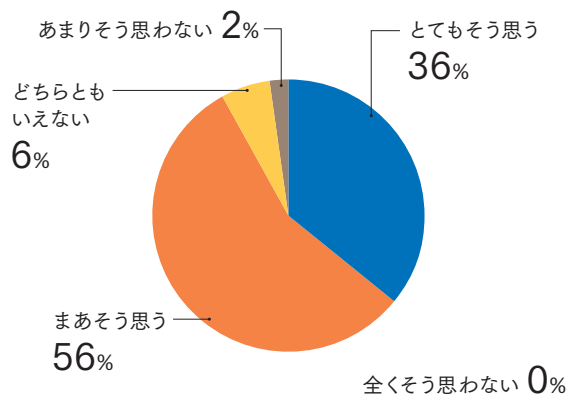
**[質問⑥] 講座中のタスクは
役に立ちましたか。**

「とてもそう思う」が36%で、「まあそう思う」が58%となり、94%が肯定的回答となった。



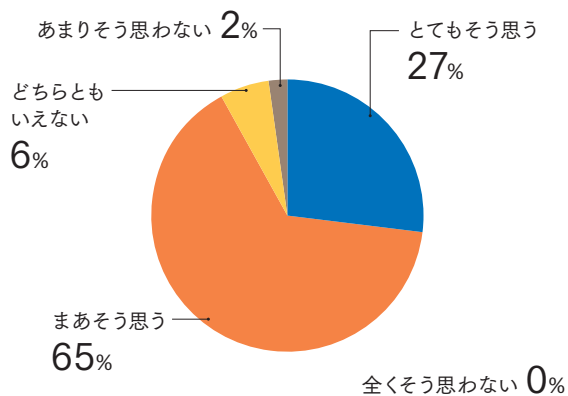
**[質問⑧] 総合的にこの講座に
満足できましたか。**

第3回講座の総合的満足度だが、92%が肯定的回答をした。



**[質問⑨] このような機会がまたあれば、
受講したいですか。**

92%と9割以上の受講者が肯定的に回答をした。



第3回講座のクロス集計を用いた分析

より詳細な分析のために「受講者の外国語（活動）指導経験年数」と以下の3つの質問のクロス集計表を作成し、各項目間のカイ2乗検定を行った。

1. 質問① 「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した（表1）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=8.944$, $p<.05$ ）。

表1 外国語（活動）指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

		①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。				
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	8	16	2	1	27
	4～6年	13	11	1	0	25
	7～9年	13	7	0	0	20
	10年以上	6	4	1	0	11
合計		40	38	4	1	83

2. 質問② 「講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った（表2）。ここでも、上述した質問①でも行ったようにカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=13.270$, $p<.05$ ）。

表2 外国語（活動）指導経験年数と「②講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス表

		②講座内容をご自分にとって適切でしたか。				
		難すぎた	少し難すぎた	適切だった	少し簡単すぎた	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	1	6	19	1	27
	4～6年	1	2	22	0	25
	7～9年	0	0	20	0	20
	10年以上	0	0	10	1	11
合計		2	8	71	2	83

3. 質問③ 「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した（表3）。上述した質問①と質問②で行ったカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=8.358$, $p<.05$ ）。

表3 外国語（活動）指導経験年数と「③総合的にこの講座に満足できましたか。」とのクロス表

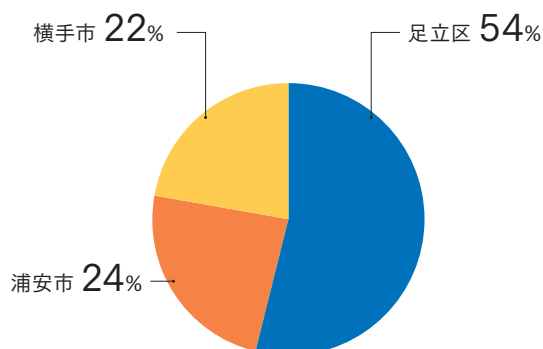
		③総合的にこの講座に満足できましたか。				
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	合計
外国語（活動） 指導経験年数	0～3年	7	15	3	2	27
	4～6年	10	14	1	0	25
	7～9年	8	12	0	0	20
	10年以上	5	5	1	0	11
合計		30	46	5	2	83

「受講者の外国語（活動）指導経験年数」の「10年以上」という項目に該当するサンプル数が11名と少なかったため、この数を除いて「指導経験年数」を「0～3年」と「4～6年」、「7～9年」の3群だけに絞り、再度上記の3つの質問と検定を行った。しかし、それでも有意な関係は見られなかった。第1回講座同様に、「指導経験」と第3回講座の評価にはあまり相関はなく、「指導経験」が評価に影響を与えない講座であった。各質問に対する回答の結果から、受講者の「指導経験の長さ」に関係なく満足の高い講座であったと言える。

第4回講座 評価アンケート 結果分析

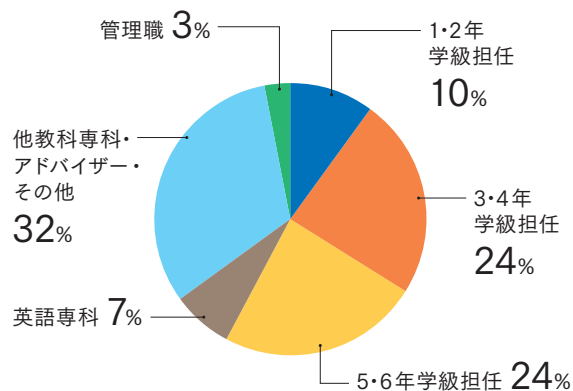
【属性①】所属地区

足立区が半分強を占めた。浦安市と横手市は残り約半分ずつ占めた。



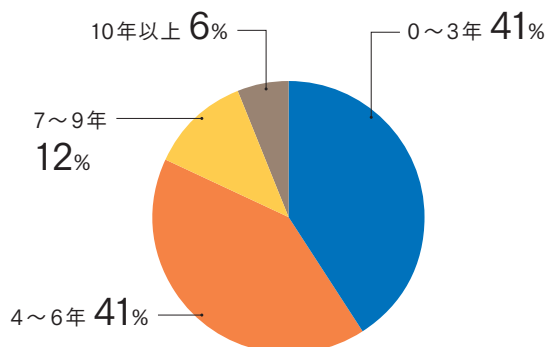
【属性②】立場

1・2年担任(10%)と3・4年担任(24%)、そして5・6年担任(24%)を合わせて58%と、全体の半分強が学級担任であった。「他教科専科・アドバイザー・その他」が32%で最大値となった。



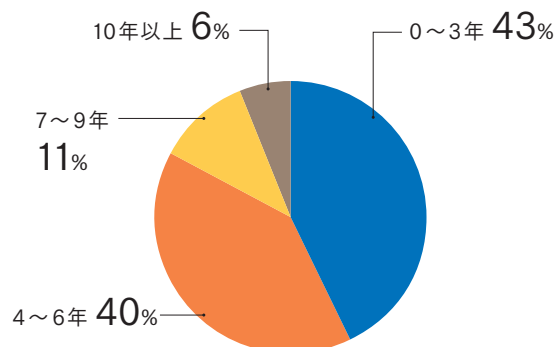
【属性③】外国語（活動）指導経験年数

0～3年が41%を占めていた。4～6年も41%であり、合わせると82%となり、受講者の8割以上は比較的経験が浅いことがわかる。



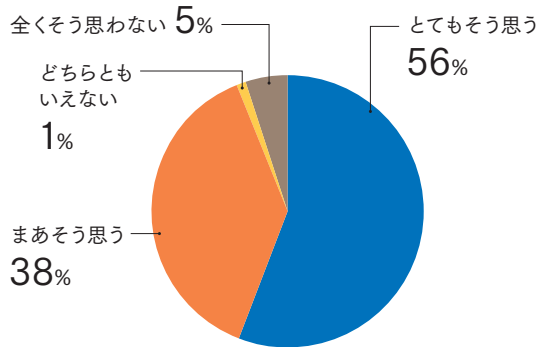
【属性④】外国語（活動）TT経験年数（日本人とのTTも含む）

外国語TTの経験年は、上記の外国語指導経験年数とほぼ同じ割合となった。



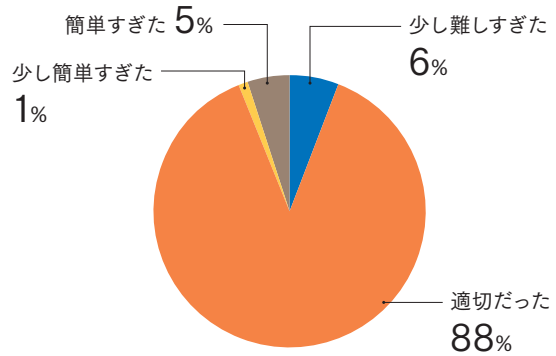
[質問①] 講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「とてもそう思う」(56%)と「まあそう思う」(38%)を合わせて肯定的意見が94%を占めた。



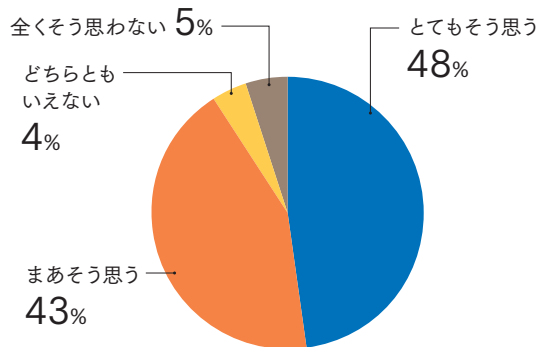
[質問②] 講座内容はお自分にとって適切でしたか。

88%と約9割が「適切」と回答した。「少し難しすぎた」が6%であり、「簡単すぎた」と少し簡単すぎた」が合わせて6%となった。



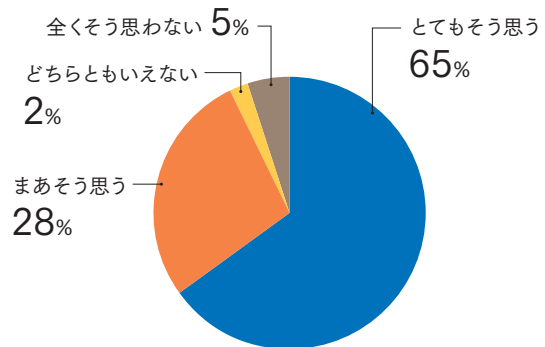
[質問③] 講座で提示された資料の今後活用できますか。

91%が肯定的な回答をした。



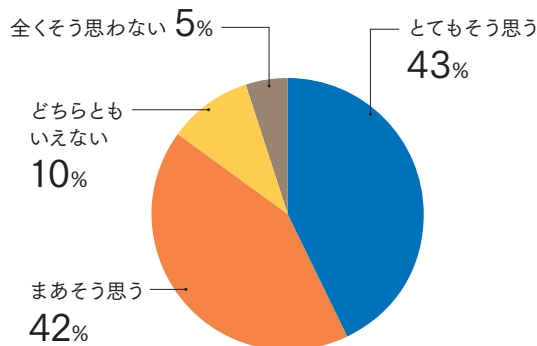
[質問④] 講師の説明はわかりやすかったですか。

肯定的回答が93%を占めた。特に、「とてもそう思う」という回答は65%を占めた。「とてもそう思う」の65%は、これはこの回の全ての設問の中で一番大きな割合となった。



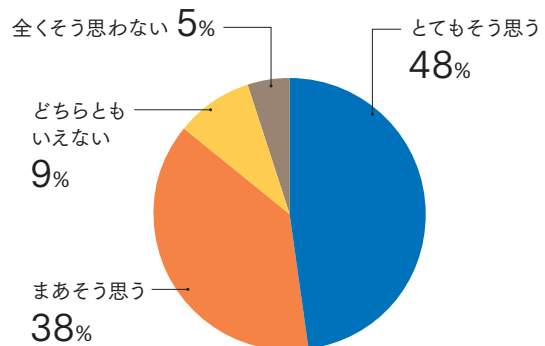
[質問⑤] 講座前のタスクは役に立ちましたか。

「とてもそう思う」が43%で、「まあそう思う」が42%となり、肯定的回答は合わせて85%となった。



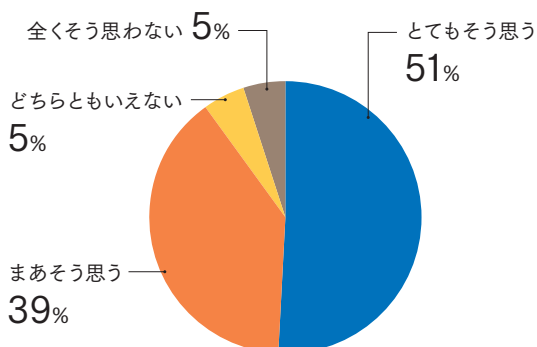
[質問⑥] 講座中のタスクは役に立ちましたか。

「とてもそう思う」が48%、「まあそう思う」が38%で肯定的回答は合わせて86%となった。



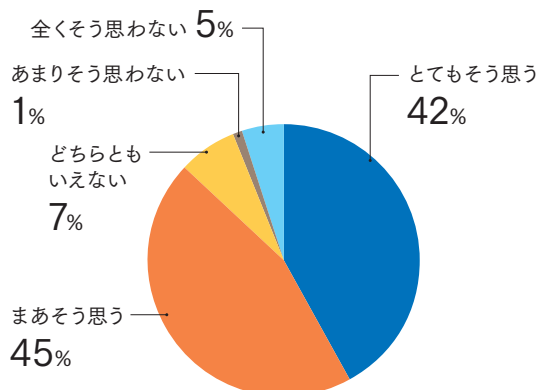
[質問⑧] 総合的にこの講座に満足できましたか。

第4回講座の総合的満足度だが、90%が肯定的回答をした。とても高い満足度だったと言える。



[質問⑨] このような機会がまたあれば、受講したいですか。

85%と8割以上の受講者が肯定的に回答をした。



第4回講座のクロス集計を用いた分析

より詳細な分析のために「受講者の外国語(活動)指導経験年数」と以下の3つの質問のクロス集計表を作成し、各項目間のカイ2乗検定を行った。

1. 質問① 「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「受講者の外国語(活動)指導経験年数」とのクロス集計表を作成した(表1)。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった($\chi^2=6.407, p<.05$)。

表1 外国語(活動)指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない	合計
外国語(活動)指導経験年数	0~3年	21	15	1	2	39
	4~6年	21	17	0	1	39
	7~9年	9	2	0	1	12
	10年以上	3	2	0	1	6
合計		54	36	1	5	96

2. 質問② 「講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った(表2)。ここでも、上述した質問①でも行ったようにカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった($\chi^2=13.005, p<.05$)。

表2 外国語(活動)指導経験年数と「②講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス表

②講座内容をご自分にとって適切でしたか。

		少し難すぎた	適切だった	少し簡単すぎた	簡単すぎた	合計
外国語(活動)指導経験年数	0~3年	2	34	1	2	39
	4~6年	1	3	0	1	39
	7~9年	1	10	0	1	12
	10年以上	2	3	0	1	6
合計		6	84	1	5	96

3. 質問⑧ 「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した(表3)。上述した質問①と質問②で行ったカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった($\chi^2=12.914$, $p<.05$)。

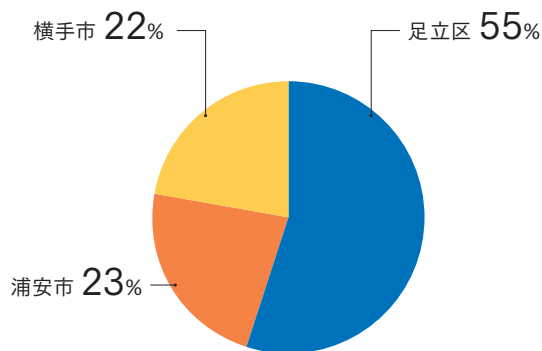
表3 外国語(活動)指導経験年数と「⑧総合的にこの講座に満足できましたか。」とのクロス表

		⑧総合的にこの講座に満足できましたか。				
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない	合計
外国語(活動) 指導経験年数	0～3年	20	13	4	2	39
	4～6年	16	21	1	1	39
	7～9年	9	2	0	1	12
	10年以上	4	1	0	1	6
合計		49	37	5	5	96

上述した統計解析の結果によれば、第1回講座と第3回講座同様に、「指導経験」と本講座の評価にはあまり相関はなく、「指導経験」が評価に影響を与えない講座であったと言える。結論として、各質問に対する回答の結果から受講者の「指導経験の長さ」に関係なく満足の高い講座であったと言える。

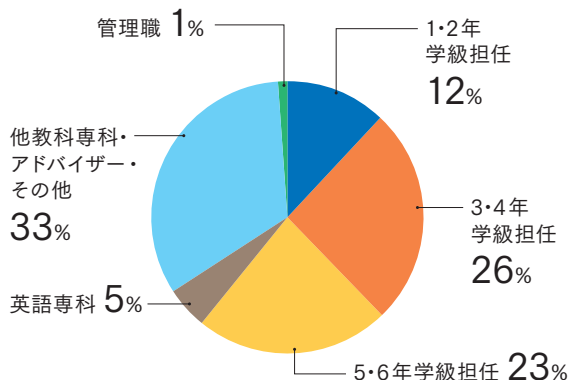
[属性①] 所属地区

足立区が半分強を占めた。浦安市と横浜市は残り約半分ずつ占めた。



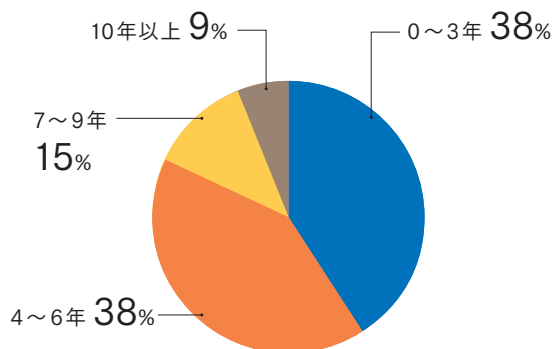
[属性②] 立場

1・2年担任(12%)と3・4年担任(26%)、そして5・6年担任(23%)を合わせて61%と、全体の6割以上が学級担任であった。「他教科専科・アドバイザー・その他」が33%で最大値となった。



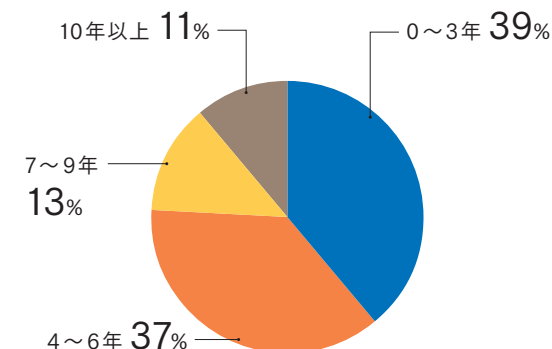
[属性③] 外国語(活動)指導経験年数

0～3年が38%を占めていた。4～6年も38%であり、合わせると76%となり、受講者の4分の3は比較的経験が浅いことがわかる。



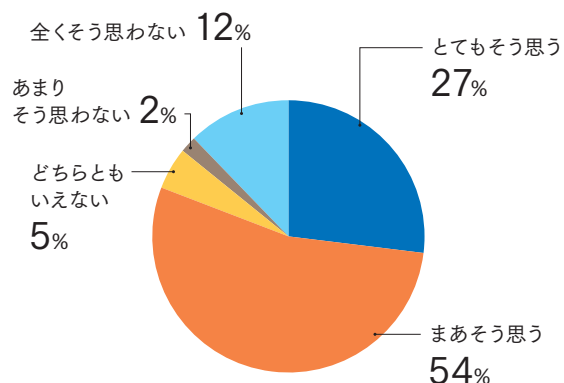
[属性④] 外国語(活動)TT経験年数 (日本人とのTTも含む)

外国語TTの経験年は、上記の外国語指導経験年数とほぼ同じ割合となった。



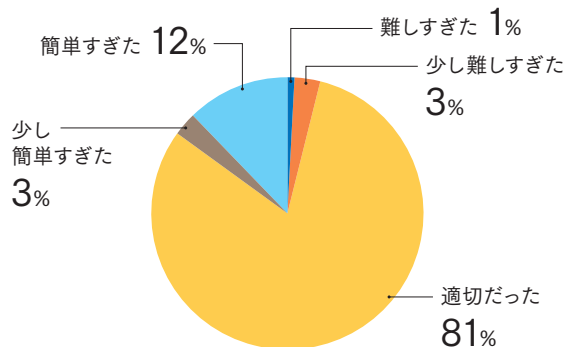
[質問①] 講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「とてもそう思う」(27%)と「まあそう思う」(54%)を合わせて肯定的回答が81%を占めた。否定的回答は14%あった。



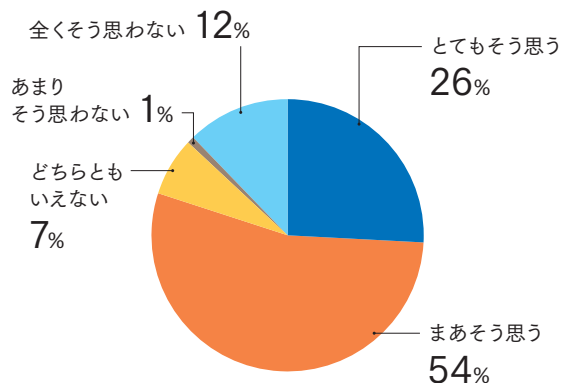
[質問②] 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

81%と8割以上が「適切」と回答した。「難しすぎた」と「少し難しすぎた」を合わせると4%であった。一方、「簡単すぎた」と少し簡単すぎた」が合わせて15%となった。



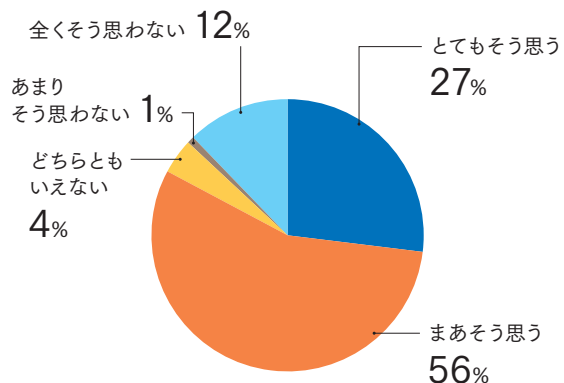
**[質問③] 講座で提示された資料の
今後活用できますか。**

80%が肯定的な回答をした。一方、否定的回答は13%であった。



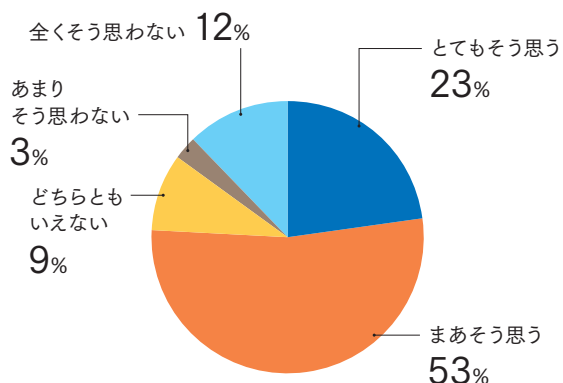
**[質問④] 講師の説明は
わかりやすかったですか。**

肯定的回答が83%を占めた。一方、否定的回答は13%であった。



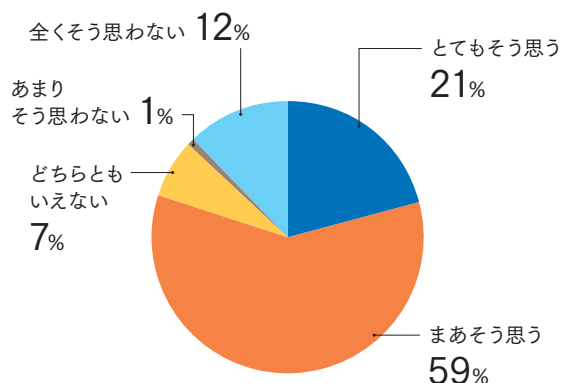
**[質問⑤] 講座前のタスクは
役に立ちましたか。**

「とてもそう思う」が23%で、「まあそう思う」が53%となり、肯定的回答は合わせて76%となった。



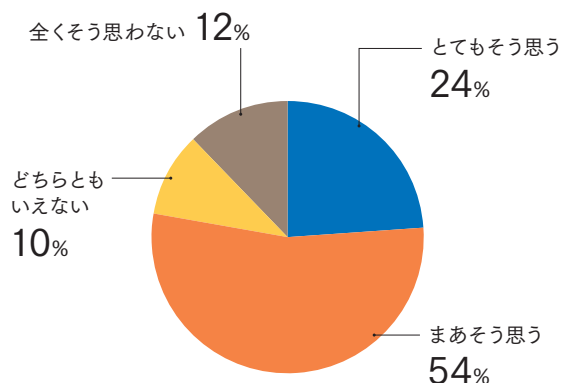
**[質問⑥] 講座中のタスクは
役に立ちましたか。**

「とてもそう思う」が21%、「まあそう思う」が59%で肯定的回答は合わせて80%となった。



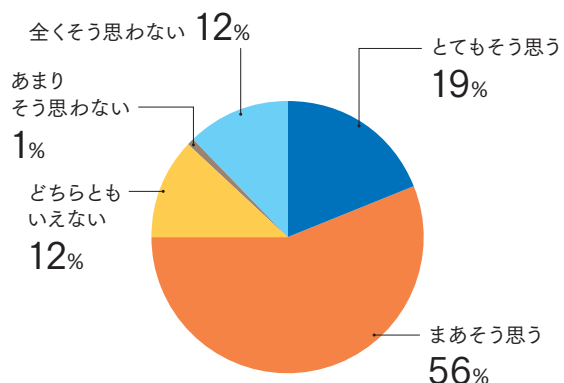
**[質問⑧] 総合的にこの講座に
満足できましたか。**

第5回講座の総合的満足度だが、肯定的回答は78%であった。一方、否定的回答は12%あった。



**[質問⑨] このような機会がまたあれば、
受講したいですか。**

75%と4分の3の受講者が肯定的に回答をした。



第5回講座のクロス集計を用いた分析

より詳細な分析のために「受講者の外国語（活動）指導経験年数」と以下の3つの質問のクロス集計表を作成し、各項目間のカイ2乗検定を行った。

1. 質問① 「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した（表1）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析し、その結果有意な関係が見られた。（ $\chi^2=22.494$, $p<.05$ ）。そのため、統計的有意差が見られたときに、どこにどのような違いがあるかを把握するために、残差分析を行った。

表1 外国語(活動)指導経験年数と「①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」とのクロス表

		①講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。					合計	
		とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない		
外国語 (活動) 指導 経験 年数	0～3年	度数	9	17	4	1	5	36
		調整済み残差	-3.0	-1.1	2.0	-0.3	0.5	
	4～6年	度数	7	27	4	1	1	36
		調整済み残差	-1.2	3.2	-1.8	-0.3	-2.1	
	7～9年	度数	7	5	0	0	2	14
		調整済み残差	2.1	-1.5	-1.0	-0.6	-0.3	
	10年以上	度数	2	2	1	0	3	8
		調整済み残差	-0.1	-1.7	0.9	-0.4	2.4	
	合計	度数	25	51	5	2	11	94

その結果、有意な関係が見られたのは、3か所あった。1つ目は、指導経験年数「7～9年」群と「とてもそう思う」である。調査済み残差が+2.1であった（5%水準であれば、調整済み残差は±1.96以上が特徴的な個所）。2つ目は、指導経験年数「4～6年」群と「まあそう思う」である（調整済み残差:+3.2）。最後の箇所が、指導経験年数「10年以上」群と「全くそう思わない」である（調整済み残差:+2.4）。この3つの箇所からわかることは、経験年数が「7～9年」と「4～6年」の受講者は講座内容が学校現場のニーズに合っていると判断する傾向にあることである。一方、10年以上の受講者は逆の意見をもつ傾向にある。

この結果の解釈として次のことが言えるかもしれない。「0～3年」という外国語指導の比較的初心者よりも、4年以上の経験をもった受講者は、第5回講座の内容を学校現場のニーズに合っていると判断する傾向にあると言えるかもしれない。しかし、10年以上の経験者は逆に学校現場のニーズに合っていないと判断しがちだということである。4年以上10年未満の中程度経験者と10年以上の長期経験者にどのような違いがあるのか説明するのは難しい。ただ、10年以上の経験者の数が8名という少数であったため、それを一般化して考えることは難しいと言える。

2.質問② 「講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った(表2)。ここでも、上述した質問①でも行ったようにカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった($\chi^2=16.799, p<.05$)。

表2 外国語(活動)指導経験年数と「②講座内容をご自分にとって適切でしたか。」とのクロス表

		②講座内容をご自分にとって適切でしたか。					合計
		難しすぎた	少し難しすぎた	適切だった	少し簡単すぎた	簡単すぎた	
外国語(活動) 指導経験年数	0～3年	1	3	25	2	5	36
	4～6年	0	0	34	1	1	36
	7～9年	0	0	12	0	2	14
	10年以上	0	0	5	0	3	8
合計		1	3	76	3	11	94

3.質問⑧ 「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した。上述した質問①と質問②で行ったカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。その結果有意な関係が見られた。($\chi^2=20.308, p<.05$)。そのため、どこにどのような違いがあるかを把握するために、残差分析を行った(表3)。

表3 外国語(活動)指導経験年数と「⑧総合的にこの講座に満足できましたか。」とのクロス表

			⑧総合的にこの講座に満足できましたか。				合計	
			とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない		
外国語 (活動) 指導 経験 年数	0～3年	度数	9	16	6	5	36	
		調整済み残差	0.1	-1.5	1.8	0.5		
	4～6年	度数	6	28	1	1	36	
		調整済み残差	-1.4	3.6	-1.8	-2.1		
	7～9年	度数	6	5	1	2	14	
		調整済み残差	1.7	-1.5	-0.3	0.3		
	10年以上	度数	2	2	1	3	8	
		調整済み残差	0	-1.7	0.3	2.4		
	合計		度数	23	51	9	11	94

その結果、特徴的な3か所が明確になった。1つ目は、指導経験年数「4～6年」群と「まあそう思う」である(調査済み残差+3.6)。2つ目は、指導経験年数「4～6年」群と「全くそう思わない」である(調整済み残差-2.1)。最後の箇所が、指導経験年数「10年以上」群と「全くそう思わない」である(調整済み残差+2.4)。1つ目と2つ目から言えることは、指導経験「4～6年」の受講者はこの講座に対してある程度満足をし、「満足しない」と回答するケースはほとんどないということである。3つ目からは、10年以上の経験者は「満足しない」と回答する傾向にあるということである。

上述の統計解析の結果、第5回講座の評価は受講者の「指導経験の長さ」に影響を受けたようである。この結果は第2回講座でも見られた。全5回の講座の統計解析の結果、第1回と第3回、第4回講座は「指導経験の長さ」に影響を受けなかったが、第2回と第5回講座は影響を受けたことがわかった。今回の分析を通して、受講者の「指導経験の長さ」に影響を受ける講座内容と受けない内容があることがわかった。今後、講座を企画していく際には、受講者の「指導経験の長さ」を考慮して講座内容を決めていくことが大切だと言える。

V 講座運営に対する評価

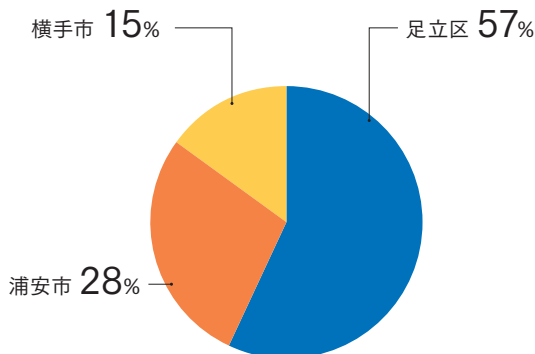
— 全講座総合評価アンケート結果分析 —

講座全体の運営に関する側面に対して、受講者から意見や感想をもらうために第5回講座実施後に第5回講座評価アンケートとは別に全講座総合評価アンケートを実施した。受講者には第5回講座終了後3日以内に回答をしてもらった。このアンケートは、最初に属性に関する質問4つ、次に講座時間の長さや実施時期、実施時間帯、そして講座の実施形態、最後に講座内容の要望に関する質問17つで構成された。アンケートに回答してくれた受講者数は合計124名であった。以下に、その詳細を記す。

全講座総合評価アンケート 結果分析

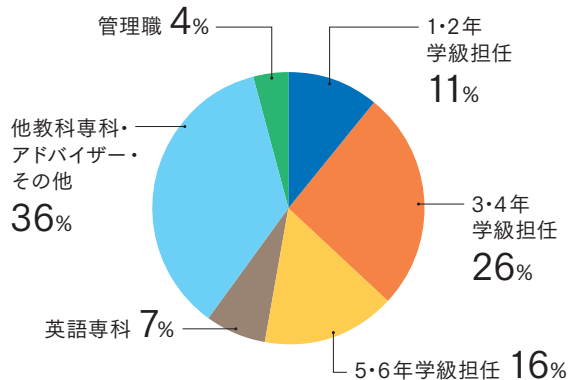
【属性①】所属地区

足立区が半分以上の57%を占めた。浦安市が28%で、横手市は15%を占めた。



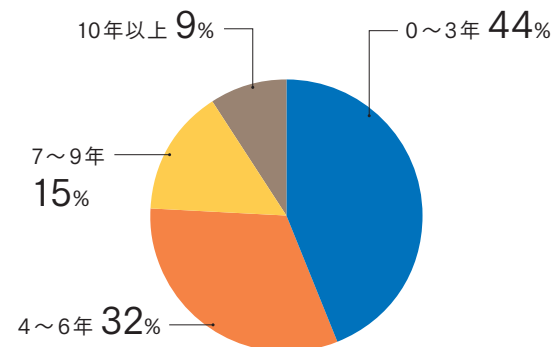
【属性②】立場

1・2年担任(11%)と3・4年担任(26%)、そして5・6年担任(16%)を合わせて53%となり、全体の半分以上を学級担任が占めた。「他教科専科・アドバイザー・他」が36%と最大値であった。これは足立区の多くのアドバイザーが回答した結果だと推察する。



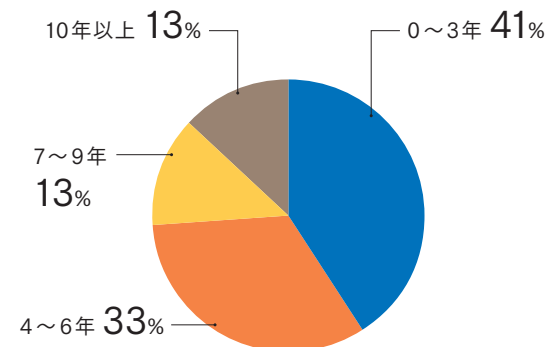
【属性③】外国語(活動)指導経験年数

0～3年が半分近くの44%を占めていた。4～6年も32%であり、0～3年と合わせると75%となり、比較的に経験の浅い受講者が多いことがわかる。



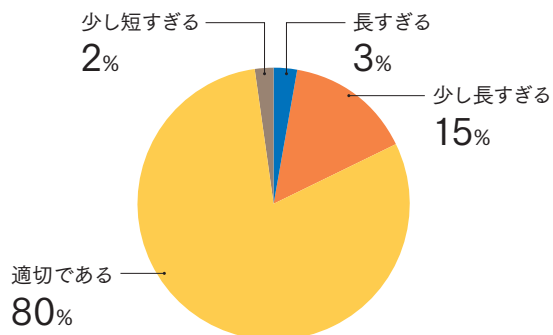
【属性④】外国語(活動)TT経験年数

上記の「外国語(活動)指導経験」と同様に41%の教員が外国語TTの経験が0～3年であり、4～6年が33%と経験が浅い教員が7割以上を占めていることがわかる。



[質問①] 講座の長さは適切でしたか。

80%が「適切」と回答した。「長すぎる」と「少し長すぎる」を合わせると18%となった。一方、「少し短すぎる」が2%あった。



質問①の分析

「適切」の回答が8割で大部分を占めているが、「長い」と感じる回答も2割弱あった。「長い」と感じる回答者からのコメントによれば、授業や子供たちとの活動が終了していない時間から講座が始まってしまっていたことや他にやらなければならない学校業務があることが主な原因のようである。

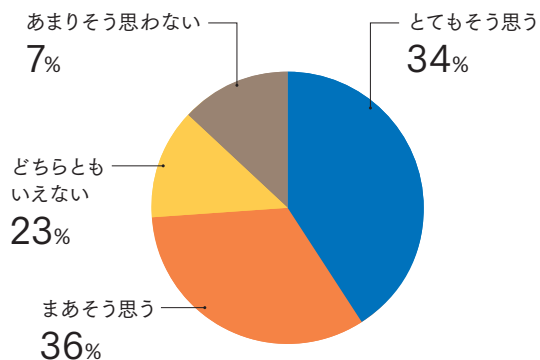
[質問②] 質問①で肯定的回答以外の回答者からのコメント

- ・学校業務があるため60分がよい。
- ・オンラインで話を聞けるのは長くて10分だと感じています。10分でワンクッション入れて、受講者に実践させてみるとよいです。それを3セットとで30分までですね。実際にteamsでリモート学習してみると、飽きることが子供を見ても自分でやってみてもわかった。
- ・60分ほどにまとめていただけるとありがたいと感じました。
- ・大変ありがたい内容でした。しかし他の仕事もあるので、子供を下校させてからの90分は少し長い気がしました。
- ・子供たちを自習にしての研修5回は、若干短くしていただけるとありがたいです。スタートをあと30分遅らせてなど。60分の研修で、お願いできればと思いました。
- ・理解を深めるためにも90分程度のまとまった時間で多くのことを学ぶことが適切だと考えていますが、6時間目終了後は講座に間に合いませんでした。すべての講座が受講でき

- てこそ英語教育に関する理解が深まると考えますので、全員がすべての講座を受講できるよう時間を設定することが一番大切なのではないかと感じました。そのため、全員が参加できる時間から講座を開始することを第一に考え、45分や60分等短くしても致し方ないと考えます。講義は素晴らしいものであったにも関わらず、下校指導などにより毎回30分、もしくは1時間程度遅れて参加した先生方は、もっと英語教育に関する理解を深められたのに…、と残念でなりません。
- ・回数が多く、子供たちを下校させてから参加するため、もう少し短いとありがたい。
- ・基本的に傾聴する講座なので、90分でなくてもよいと思いました。残りの20分くらいは質疑応答なので、それもそこまで多くいらないと思います。
- ・1回の講座であれば適切だが、全5回に参加しなければならないことは負担が大きかった。

[質問③] 講座の実施時期は適切でしたか。

肯定的回答が「70%」を占めた。「あまりそう思わない」が7%あった。



質問③の分析

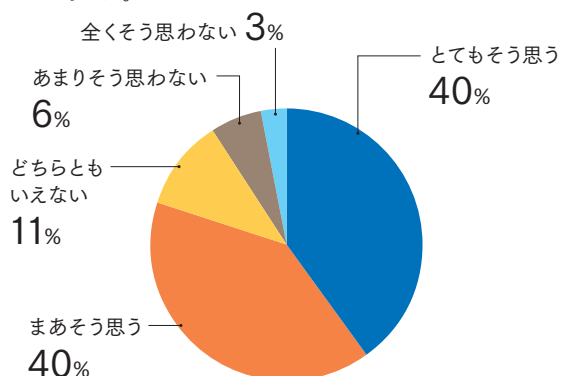
「適切」の回答が7割を占めているが、否定的回答も7%あった。否定的回答のコメントによれば、年度のもっと早い時期での開催が望ましいようである。やはり受講者は学んだことを残りの年度内の授業で実践したいと考えているようである。

[質問④] 質問③で肯定的回答以外の回答者からのコメント

- ・冬は雪が積もる可能性があるため冬季の講座の参加は難しい。
- ・1学期の中旬か夏休みなどにまとめて受講する形式だと今後の授業に生かしやすいのかなと感じます。
- ・すでに校内研究を進めてきていたので、ある程度のことはわかっていた。この時期に行うのであれば、実際に指導をしてきて困っていることなどを事前に吸い上げて、現場により必要感の感じられるものにしていただきたい。
- ・今年度はコロナ禍の中の実施だったからと思いますが、年末に集中していたので自習体制をとるのが難しかったことと、できれば早い時期に教えていただくと指導に生かせる期間も長くとれると考えました。
- ・年度の早い時期に実施していただければ、指導や評価に生かせると思いました。
- ・全校が全ての回に参加できる日程であれば大変嬉しく思います。今回は後から入れていただいたので致し方ないと感じています。また、第4回の事後の動画や質問に対する答えが発表される前に第5回の講座があったため、第4回と第5回の間隔が短かったように感じます。1回、1回完結してから次の回があると嬉しいです。
- ・もう少し早い時期での実施の方が授業で役に立つと思います。
- ・本来ならば早めに展開できたほうがよかったのだと思いますが、コロナ禍のなかではやむを得ないのだらうと思います。

[質問⑤] 講座の時間帯は適切でしたか。

「とてもそう思う」が40%で、「まあそう思う」が40%となり、肯定的回答は合わせて80%となった。一方、否定的回答は9%であった。



質問⑤の分析

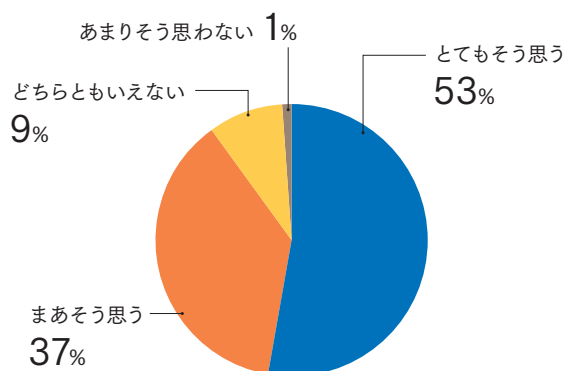
「適切」の回答が8割を占めているが、否定的回答も9%あった。否定的回答のコメントによれば、講座の時間がまだ小学校では授業時間内であったり、子供の下校指導中であったりした。そのため、講座の最初から参加できず残念であったというコメントが多くあった。そのような受講者の要望に合わせると、30分遅らせて午後3時30分開始だともっとよかったのかもしれない。

[質問⑥] 質問⑤で肯定的回答以外の回答者からのコメント

- ・実施時間帯は、そこしか空いていないところですから仕方がない。
- ・午後3時からだと6校時が終了直後であわただしいため、もう少し遅い方がよい。
- ・午後3時10分に6校時が終わるため、10分のために補教をたてないといけなかった。このコロナ禍の中で学習も進んでいないので厳しかった。
- ・下校指導の時間と重なり、講義の開始時刻に間に合わなかった。
- ・大変学びのある講座を受講させていただき、大変興味深い内容だったため充実した時間でしたが、働き方改革等これからの時代に合わせて休憩時間は避けた方がよいのかもしれませんが、休憩時間が取れないことが今までの教員の当たり前でしたが、これからの時代に合わせた改革を行っていかねば教育業界は崩壊するのではないかと危惧している。
- ・Zoomによる研修であれば授業時間と重なりにくい時間だと嬉しい。
- ・児童がまだ在籍している時間から開始されるので、なかなか難しい。午後3時30分から開始だと最初から受講できる。
- ・授業の関係上、途中からの参加が多かった。
- ・6時間授業だと開始に間に合わない。
- ・普通に児童がいる時間帯で、この講座のために児童が早く帰ることもないので、最後の方しか視聴できず残念だった。
- ・子供の帰宅後がよい。

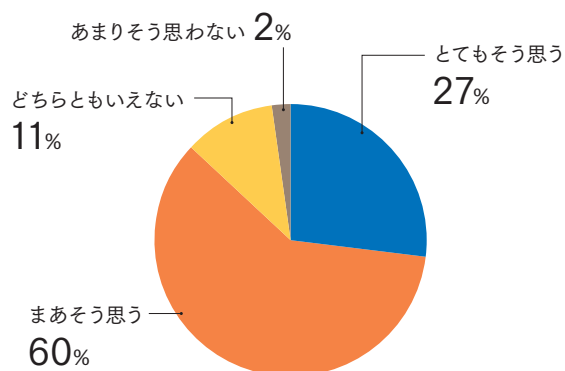
[質問⑦] 拠点校での講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答が90%あった。一方、否定的回答は1%であった。概ね適切であったようである。



[質問⑨] 拠点校以外での受講は適切でしたか。

肯定的回答が87%あった。一方、否定的回答は2%であった。概ね適切であったようである。



[質問⑧] 質問⑦で肯定的回答以外の回答者からのコメント

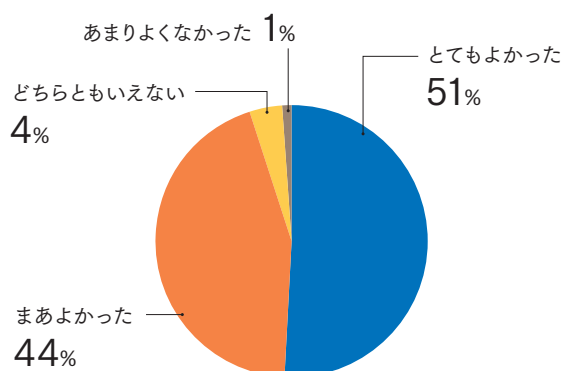
- ・拠点校に設置されたスクリーン画面の大きさの割に参加人数が多かったように感じます。

[質問⑩] 質問⑨で肯定的回答以外の回答者からのコメント

- ・特になし。

[質問⑪] Zoomの映像はいかがでしたか。

肯定的回答が95%だった。一方、否定的回答は1%であった。



質問⑪の分析

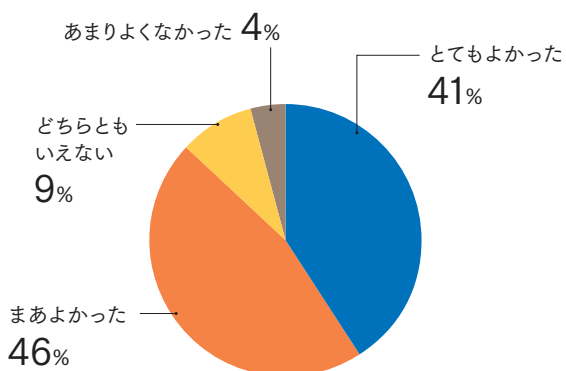
概ね適切であったようである。下記のコメントにあるように、すべての講座の前に当日資料が受講者に提供できているとよりよかったようである。

[質問⑫] 質問⑪で肯定的回答以外の回答者からのコメント

- ・PPTの内容をメモしたいタイミングで、PPTのアップの画面ではなく教授とPPTを映す画面になってしまい、文字が小さくなってしまったことで見えなくなりました。PPT資料などは後からいただけるものの、やはりあの場で理解を深めたかった。

[質問⑬] Zoomの音声はいかがでしたか。

肯定的回答が87%あった。一方、否定的回答は4%であった。



質問⑬の分析

概ね適切だったようだが、下記のコメントにあるように音声が聞きづらい時があったようである。拠点校に切り替わった際に音声が途切れてしまったとあるので、ここは次回同じような配信をする場合、留意しておかねばならない点である。また、挿入ビデオを使う場合も音量に留意しなければならない。

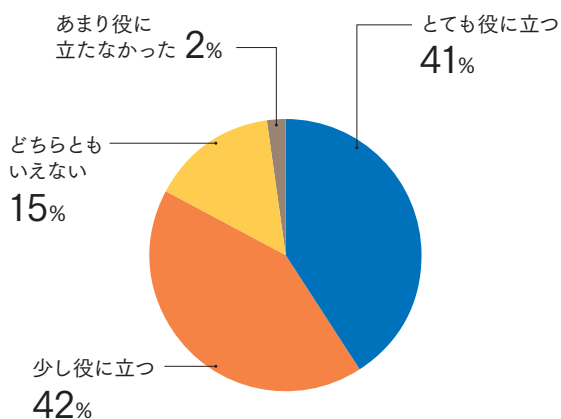
[質問⑭] 質問⑬で肯定的回答以外の回答者からのコメント

・聞こえなくなってしまったことがあったが、こちらの設定の問題だと思います。画像を切り替えて拠点校が画面に映った際に音声が途切れてしまうことがあった。

・最後の回が聴き取りづらかった気がします。上智大学の先生の音声が全く聞き取れず大変残念でした…。その他の場面ではとてもよく聞き取れていました。
・音量が小さかったので、全体的に聞き取りづらかった。

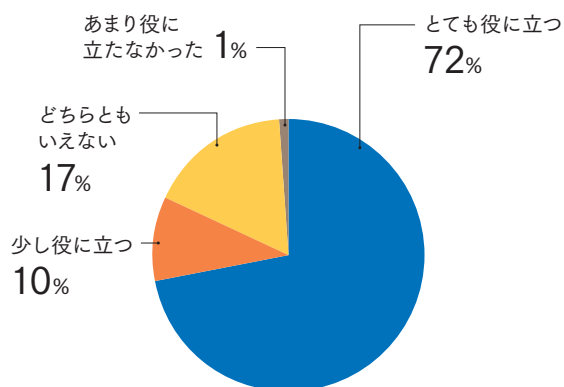
[質問⑮] 本事業で作成したWebページは いかがでしたか。

肯定的回答が83%あった。一方、否定的回答が2%あった。概ねWebページは満足いくものであったようである。「どちらともいえない」という回答が15%あった。これは、当該Webページをあまり活用しなかった受講者の回答の可能性が考えられる。



[質問⑯] 本学の貸与機器 (PC、Wi-Fi、テレビ会議システム) はいかがでしたか。

肯定的回答が82%あった。一方、否定的回答は1%であった。概ね本学貸与機器も役に立ったようである。「どちらともいえない」が17%あったが、これは、拠点校以外の受講者の回答である可能性がある。



[質問⑰] 次回講座を受けるとしたら、どんな内容を希望しますか。

以下に、同じ内容のコメントはまとめたり、一部を抜粋したりして掲載した。

回答者からのコメント

- ・学年に合った、効果的なアクティビティやアイデア
- ・効果的で実践的な指導法
- ・各校で行われているよい実践例
- ・教科書内容に即した指導のポイントなど英語での指導方法を学び、実際に指導を実演したり見たりする講座
- ・クラスルーム・イングリッシュの実際
- ・さらなる Small Talk の実践例
- ・さらにくわしい評価の実践例
- ・低学年向けの内容
- ・受講者自体が経験できる活動
- ・現場ですぐに活用できる内容
- ・英語が苦手な教師でも、すぐ授業で生かせる実践等
- ・教科書の最後に付いているような物語や長文の扱い方をどうすればよいか。
- ・具体的な指導の実践
- ・それぞれの単元で使用できる活動事例
- ・単元計画
- ・今回のような受講者の日々の悩みを聞いていただけるような内容です。
- ・正しい発音や口の形、イントネーションで教えることの必要性について。
- ・デジタル教材を用いた指導の具体について
- ・実際の授業の場面をビデオで見たいです。
- ・ALTの先生との打合せの実際について
- ・後からだったので致し方ないのですが、モバイルルーターもお貸しいただければ最大限機器を活かせるのという思いはあります。
- ・講師の先生方とのやり取りの時間がもう少し長かったり、演習の時間があると嬉しい。
- ・具体的な活動内容について教えていただきたいです。
- ・各単元で取り扱う最終活動例を知りたい。
- ・子供たちが主体的になる工夫等
- ・評価の方法について、どこまでをA、どこまでをBとするのかななどの具体的事例紹介
- ・英語のゲーム、評価の仕方、クラスルーム・イングリッシュ、ALTの活用など実践に役立つ事例をたくさん教えていただきたいです。
- ・実際の英語の授業が見たいです。
- ・中学校の授業風景を見たい。
- ・より実践動画や掲示資料例の教室の画像などを見てみたい。
- ・オンライン上で会話をやり取りするとよい。
- ・講座内容が含まれる授業の様子などがあると参考になると思いました。
- ・授業時間以外で英語に触れる時間づくりについて
- ・外国語活動で使える歌、アクティビティを紹介してほしい。
- ・評価のこととか、外国語の授業の流れなど教えてくれるとありがたいです。
- ・実際の授業映像を活用した研修。
- ・使えるクラスルーム・イングリッシュ

質問⑰の分析

コメントを整理して気付いたことだが、効果的なアクティビティや Small Talk、ゲーム、クラスルーム・イングリッシュなど具体的な事例の紹介を希望するコメントがとても多かった。明日にでもすぐに使えるアクティビティやアイデアを渴望していることが明確になった。今後、新たな研修内容を考えていく場合、小学校の教員がすぐにも活用できる実践例の紹介を盛り込むことが重要であろう。

VI 全体総括

これまで、各講座評価アンケートと全講座総合評価アンケートの結果と分析を提示した。これらを踏まえて、以下に、今年度、明海大学が受託して実施したMEIKAI-JOE小学校外国語科等講座の全体総括をまとめる。

1 参加者属性

- ① 足立区からの参加者が毎回半分以上を占めた。浦安市と横手市が残りの半分を占めたが、足立区の参加者の意見がアンケートに大きく影響したと言える。
- ② 学級担任が約半分を占めた。「英語専科」「他教科専科・アドバイザー・その他」も約4割を占めた。
- ③ 外国語指導の経験年数は「0～3年」と「4～6年」が毎回最も多く、経験年数が浅い参加者が6～7割を占めた。
- ④ TT指導経験も上記とほとんど同じであった。

2 各講座評価アンケート（以下、括弧内は肯定的評価の数値である）

- ① 講座の内容が学校現場のニーズに合っていたかどうかにおいて、第1回(93%)、第2回(78%)、第3回(94%)、第4回(94%)、第5回(81%)とどれも学校現場のニーズに合っていたが、特に第1回と第3回、第4回は学校現場のニーズを特に反映していたと考えられる。なお、第2回の数値が若干低いのは、当該講座の内容が「効果的なチーム・ティーチング」であり、足立区の小学校においては、現下、外国人とのTTを実際行っていないことが影響していることも考えられる。
- ② 講座内容のレベルだが、第1回(69%)、第2回(59%)、第3回(86%)、第4回(88%)、第5回(81%)が適切と回答した。特に第3回と第4回、第5回の講義レベルが特に適切だったと考えられる。第2回の数値の数値が若干低いのは、この講座が本学ネイティブ教員2名と本学日本人教員とがほぼオールイングリッシュで講座を進めたことの影響があったのかも知れない。また、第1回の講座が少し低いのは、小学校の先生方にとっては、他校種の学習指導要領の内容を知ることが初めてであったことが影響していると考えられる。
- ③ 講座内の資料であるが、第1回(92%)、第2回(90%)、第3回(93%)、第4回(91%)、第5回(80%)が活用できると回答し、今後の授業において活用してもらえることが期待できる。
- ④ 講師の説明のわかりやすさは、第1回(95%)、第2回(93%)、第3回(98%)、第4回(93%)、第5回(83%)とどの回も評価が高い。特に第1回と第2回、第3回、第4回は特に高い。
- ⑤ 講座前タスクだが、第1回(75%)、第2回(90%)、第3回(88%)、第4回(85%)、第5回(76%)であり、第2回と第3回はかなり高値であり、役に立ったと考えられる。
- ⑥ 講座中タスクは、第1回(81%)、第2回(90%)、第3回(94%)、第4回(86%)、第5回(80%)となり、どの回も講座前タスクよりも高値であり、タスクベースの講座が評価されたと考えられる。
- ⑦ 総合的満足度は、第1回(91%)、第2回(89%)、第3回(92%)、第4回(90%)、第5回(78%)が肯定的回答であった。第5回が若干肯定的評価は低い。このことは、この講座が最終回ということで、前半が「小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待」という内容の講座で、後半が、第1回から第4回講座のまとめという位置付けで実施したものであり、内容の新鮮さを欠いていたことが影響している可能性がある。ま

た、時間の関係で受講者とのインタラクションや質疑応答の時間がとれなかったことが影響していると考えられる。

- ⑧ 次回も同じような講座を受けたいかという質問に対する回答では、第1回(89%)、第2回(83%)、第3回(92%)、第4回(85%)、第5回(75%)であり、どの回ももっと学びたいという意見が大部分を占めた。

3 全体総括

全5回の講座内容については、文部科学省に提出した企画提案書(事業計画書)に記載したとおり、明海大学がこれまで連携自治体における支援などを通して把握してきた課題や本事業を開始するに当たり実施した事前のニーズ調査を基に、その内容を構成したものである。こうしたことから、講座で取り扱った内容については、受講者から満足してもらえたものとする。ただし、受講者の外国語指導年数にばらつきがあり、その要素が講座に対する評価に影響を与えることがアンケート分析では示唆されたこともあり、今後新たな講座を計画する場合は、受講者の指導経験をより一層考慮する必要があるだろう。また、全講座総合評価アンケートでは、今後受講したい講座内容についても回答を求めたところであり、この回答内容については、今後の文部科学省における各種事業にも参考となるものと期待する。

講座内容のレベルについてであるが、講座開発・実施チームの各講座担当者は、事前に各区市の参加予定者の指導経験年数等の属性について資料提供を受け、6年未満の方が約7割いることを把握していた。その上で、小学校の学習指導要領が今年度全面実施されたばかりであることを踏まえ、全講座を通して極力基礎的な事項を取り扱うようにしてきた。さらには、経験豊富な方に対しては、講座前、講座中、講座後のタスクで発展的な研修ができるように工夫することに努めた。こうした配慮についても受講者から評価されたものとする。

各講座の資料についてであるが、本事業で開設した「MEIKAI-JOE Web ページ」上にすべてアップロードするようにした。各回とも、事前タスク(PPTや映像資料など)については講座開始1週間前には提示し、受講者が事前に学ぶことができるようにした。講座中に使用したPPTや映像資料及び事後タスクについては講座実施後少なくとも10日以内にWeb ページ上にアップロードして、受講者が振り返りを行うことができるようにした。こうしたことから、事前タスクの資料、講座中の資料やタスクについて高い評価が得られたと考える。

各講座の中で行われたタスクについてであるが、講座90分の中では、30分以上の受講者と講師との間のワークショップ型のインタラクションを設けることとしていたので、こうした活動をより多く取り入れた講座が高い評価を得たと考える。

いずれにしても、本事業開始前に作成した企画提案書(事業計画書)では、各講座を実施する上で、

- ① 各講座は、受講者の主体的な参加を促すために、リアルタイムのオンライン講座とするとともに、受講者の時間的負担の軽減を図るためアーカイブを活用する。
- ② 各回のオンライン講座は90分とするが、そのうち30分程度は講師と受講者との間でのやり取りを随時行う(ワークショップ型)。
- ③ オンライン講座をより充実した内容とするため、受講者がいつでも振り返ることができるように、オンライン講座をアーカイブで視聴できるようにする。また、予め提供された資料(動画を含む)をアーカイブで視聴できるようにする。

などをその特色として示し、それらを実際においても実施したことから、各講座評価アンケートで高く評価されたものとする。

また、こうした評価アンケート結果とともに、各回の講座終了後に回答していただいたリフレクションシートへの受講者の回答内容を併せて考察すると、本事業の目的として示した、「多くの学級担任が抱えている小学校

外国語科・外国語活動の指導に対する不安感を払しょくし、授業に積極的に取り組む意欲を向上させるとともに、円滑に指導できる指導力及び英語力を養成する]ことに効果があったものと信じる。

次に、事業運営面である。事業運営面に関しては、講座時間の長さや実施時期、実施時間帯に対して受講者の大部分は満足していたが、改善を望む回答もある一定数あった。今回の事業は3区市教育委員会にまたがる4つの拠点校(会場校)を中心に約200名の小学校の先生方を対象として実施した。こうしたことから、全参加者が満足できる形での実施は極めて困難であり、最終的には各教育委員会から調整していただき決定させていただいたことに理解を求めたい。また、今回の事業運営面の特色の一つが、全講座においてZoomによるオンライン配信とした点である。拠点校では、受講者が一つの会場に集合して一斉に受講する形態をとった。その際にプロジェクターを通して映し出されたZoomの映像や音声は満足いくものであり、拠点校以外の場所で受講した場合でも満足度が高かった。この結果から、今回採用した拠点校での一斉受講形態を中心としながら、それ以外の場所からも受講者各自でZoomを使って受講できる形はよい取組であったと言える。

VII 教育委員会・受講者等の総括

次に、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会の総括、3区市の受講者の感想、そして各講座担当講師等からのまとめを以下に示す。

1. 東京都足立区教育委員会の総括

足立区教育委員会学力定着推進課（以下、区教委と表記）では、英語教育の推進を施策の柱の一つとして、「英語大好き小学生の育成」を掲げ、9年間を見通した足立区の英語教育モデルを推進している。今年度は年間3回の小学校外国語活動研修の実施を柱とし、教科書を踏まえた単元指導計画及び学習指導案の作成、年間8回の小中連携の取組とともに、英語が堪能な日本人を小学校外国語活動アドバイザー（以下、アドバイザーと表記）として、区内に69校ある全ての小学校に派遣し、学級担任による授業づくりを支援している。このような状況の中で取り組んだ本講座の成果と課題を述べる。

【成果】

(1) 受講者の拡大

本講座には拠点校として2校、拠点校以外からZoomで参加する学校として15校の合計17校が参加し、延べ507名が5回にわたる研修に参加した。区教委による研修では会場規模の制限があるため、各校1名の参加による69名が定員となる。本講座ではオンラインを活用しているため人数制限がなく、1校から複数の教員が参加することができた。受講を希望した全ての教員を参加対象とできたことは、本区にとって大きな成果であるとともに、新しい生活様式を踏まえ、今後の研修の在り方を検討する際の参考となった。

(2) 研修内容の多面的・多角的な理解

区教委主催の研修と本講座を並行して取り組むことにより、受講者は双方の研修内容を相互補完的に理解することができた。新学習指導要領に基づく指導と評価の一体化やチーム・ティーチングをはじめとする授業づくりの在り方等、区教委でも同様の研修を実施している。受講者は本講座を通して多彩な講師と出会い、区教委主催の研修とは異なる角度から、様々な方法で講義・演習を受けた。このことにより、受講者は一時的に断片的な理解に留まっていた研修内容を再整理するとともに、研修で学んだ事項を実際に授業で活用することで理解を深め、実践力につなげることができた。



(3) 英語教育へのモチベーション向上

拠点校では所属する全教員が一カ所に集まり同時に本講座に取り組むことで、校内研究と同様の目的意識が生まれ、意欲的に取り組んでいた。また、講座内に発表や質問をする機会があることで、自身の課題を解決するだけでなく受講者の代表であるという自覚が高まり、さらに熱心に講座に取り組むという好循環

となった。一方、拠点校以外からZoomで参加する学校では、通常の出張と同様に校内で補教体制を組むことで、責任をもって受講しているとの報告を受けている。また1校で複数の教員が講座に参加したり、近隣の拠点校にて講座を受講し発表や質問に参加したり、事前課題について相談したりするなど、本講座を通して教員同士のネットワークが広がり、足立区全体で英語教育に取り組む機運が高まった。



【課題】

課題としては研修成果の普及が挙げられる。校内にて伝達研修を実施した学校は6校と参加校全体の35%に留まる。今後全ての学校が伝達研修を予定しているので、アドバイザーによる全小学校訪問の機会に合わせて支援するとともに、本講座を未受講だった学校も含めて研修内容を学級担任に伝え、授業にて実践させて幅広く成果を普及していく。

また、オンラインを活用した本講座の成果を踏まえ、研修の目的に応じて様々な方法を検討し、受講者にとって最適な研修を構築していく。

2. 東京都足立区受講者の感想

今回本講座を受講し、感銘を受けたことが2点ある。1点目は、多くの先生方に様々な指導を受けたことである。講師の先生方からSmall Talkの対話方略や評価方法など多岐にわたる内容を学んだ。特に印象に残ったのは、児童の学習意欲を高める方法である。ALTとの信頼関係を築き、子供たちの前で楽しく会話すること、クイズを考えさせたり、必然性のある活動にしたりすること、様々な褒め言葉の英語表現を使うことなど多くの指導法を知ることができた。実際に授業で実践してみると、子供たちの表情も明るく生き生きとし、意欲的に活動に取り組ませることができた。

2点目は、同じ区内の先生方のみならず、他県の先生方と共に学べたことである。浦安や横手の先生方が講師の方に質問する内容を聞くと、外国語科の指導における悩みは共通しているものが多いと感じた。また、多忙の中でも教材研究を行い、工夫しながら外国語の授業に臨もうとする姿勢は、学びたいと考えた。

今後も本講座のような研修に積極的に参加し、新たな学びを深めていきたいと考える。貴重な機会をいただくことができ、明海大学の皆様をはじめ、関係の皆様感謝を申し上げます。

足立区立血沼小学校 主任教諭 檀尾 恒一郎

本校からは1～6年生担任、専科教員、特別支援学級担当教員等、校内で21名の教員が参加させていただいた。教科となった外国語教育の背景や教授法について、まだ理解や認識の深さが様々である中、校内を挙げて多くの教員が複数回にわたって学ぶ機会を得ることができたのは、本校にとって非常に大きな財産となった。専門的なご指導に「なるほど」と自然に納得し、多角的に学ぶことができたため、講義後にも学年や担当を超えて感想を述べ合ったり意見を交換したりして互いにコミュニケーションを図ることができた。指導法の改善が組織的に行われ、意識の向上に結び付いたことは、拠点校で研修させていただいた賜物である。併せてリモートで遠方の先生方とも同時に学びを共有できたことで学びの一体感が生まれ、とてもよい研修となった。

一方、午後3時から4時30分まで全5回の講義に全員が参加するためには、早目の日程調整が不可欠となる。

来年度の計画があれば、早い段階でお知らせいただくとありがたい。また実施時期は、秋～冬より早い時期に実施していただいた方が、講義内容を授業に反映できる機会が増えるので、より充実した研修になると思う。

足立区立亀田小学校 主幹教諭 畠山 芽含

拠点校以外からの参加のため、実演や質問などはできなかったが、多くのことを学ぶことができた。担任が流暢に外国語を話すことを求めているのではなく、外国語を使おうとしている姿を児童に示すことの大切さについて教えていただいたので、授業をする上でのプレッシャーが緩和された。私自身、文法や発音などを気にすることがあった。指導する際、児童にも正確さを求め過ぎたら英語嫌いを増やすだけになってしまうと感じていた。本講座で学んだ文法事項に入る前に耳で慣れさせ、音や意味、表現について会話を通して考えさせるという実践を、自身の授業にも取り入れたいと考えた。

また、今後の子供たちの未来について、“VUCA world”という言葉を使い、将来を見通すことが困難で、「正解」のない時代がくるとの話が印象的だった。現状をベースに、子供たちの未来を考えるべきという講師の話に、教師という立場からできることについて考えるきっかけをいただいた。これからは英語はやれば「できるようになる」「間違えながら上手になるものだ」ということをクラスの子供たちに伝えていく。そして「できた」「わかった」という体験をたくさん積む場面を創出し、できるようになったことを振り返らせ、褒めることを大切に、児童を伸ばしていく。

足立区立洲江小学校 教諭 神野 孝一、石井 伸樹

3. 千葉県浦安市教育委員会の総括

(1) 本市の外国語・外国語活動の取組

本市は、浦安市教育振興基本計画（浦安市教育ビジョン）が掲げる基本理念「学び 育み 認め合い『未来を創造する』人づくり」のもと、設定された4つの目指す子供像の実現に向け、小中学校の教育を推進している。目指す子供像のひとつ「豊かなかかわり（参画・交流・郷土愛・多文化共生）」では、適切に表現する力を身に付け、人や社会に積極的に関わるとともに、我が国やふるさと浦安に誇りをもち、多様な文化を大切にす態度・能力を高める教育の充実を進め、国際理解教育や英語教育を推進している。



小学校1・2年生においては、特別の教育課程を編成し、外国語活動を実施している。「浦安市外国語活動学習活動プログラム」を活用しながら、児童の発達段階に応じた外国語による様々な活動を充実させ、外国語に慣れ親しむだけでなく、3年生からの外国語活動への滑らかな接続を目指している。

また、市立全小中学校に、外国語指導助手（ALT）を派遣し、担任、授業者、ALTの指導力向上に努めるだけでなく、児童生徒の多文化理解及び英語によるコミュニケーション能力の育成を図っている。

(2) 本講座の成果

小学校の先生方が日頃から抱えている不安感に寄り添う研修内容であった。学級担任を中心とした授業者が、評価を意識しながらT1として授業を行うための具体が示されていた。また、オンラインで足立区、

横手市の先生方と一緒に研修を行うことで、地域、学校が異なっても、先生方の抱える悩みや思いは同じであることが確認でき、オンラインのよさが生かされ、非常に有意義な研修となった。

講座では、特に第2回「効果的なチーム・ティーチングの在り方」、第3回「Small Talkの実際とデジタル教科書への接続」が効果的であったと考える。ALTとのラポール構築やSmall Talkにかかる研修では、同僚と英語でやり取りを行ったり、画面越しで講師の先生方と英語で対話に挑戦したりする活動を通して、ALTとの効果的なかわりについて学ぶことができた。第4回「学習指導の評価」では、評価の進め方や具



体な場面を用いて、3つの観点について理解を深めることができた。研修全体をとおして、学習指導要領の内容や評価方法について一連の流れを知るだけでなく、先生方が実際に体験したり困り感を質問したりすることで、今後の自信につながったのではないかと考える。

(3) 今後の課題

課題の1つ目は、研修会参加者についてである。本研修会には本市からも多くの参加があった。しかし、参加者の多くが外国語教育研究校や外国語科主任を中心とした一部の教員であった。今後、多くの先生方に広めていけると大変有意義であると考え。特に、英語専科が入っている学校では、外国語の授業や評価を経験したことのない教員もいる。そういった先生方にこそ、自信をもって授業ができるような研修の機会を設けられたらよいと考える。

2つ目は、小中連携である。小学校での学びを中学校へスムーズに接続していくためにも、中学校の先生方との研修の場を設けられるとよいと考える。中学校の先生方が小学校での学びを知ることで、授業の方法が大きく変わるはずである。

最後に、学習評価である。今回の研修でも評価について理解を深めることができたが、4技能3観点5領域、15の評価項目について演習を行うことができれば、さらに実践に生かせると考える。



4. 千葉県浦安市受講者の感想

本講座を受講して、学習指導要領に準じた外国語活動・外国語科の活動例の意義や工夫点を学ぶことができた。大学の先生から実際に講義を受けることが日々の生活の中にないため、新鮮であったことに加えて、より専門的な見方・考え方を身に付けることができた研修であった。

研修の中でも一番に印象に残っていることがある。それは、「小学校の外国語は完璧な習得でなく、なんとなく先生やALTが言っている意味がわかる程度でよい」というところである。外国語活動や外国語科を教えること自体に抵抗や困難さを感じている教職員も多にいる。「外国語活動・外国語科は小学校6年生の時点でこのような姿にさせたいですね」と教職員に共通理解を図ることができた。「いきて生活につかえる英語」を目指して校内体制の構築と進展をますます図っていきたいと考えている。

浦安市立富岡小学校教諭、3年担任、外国語教科主任

本講座では、普段の授業で「このやり方でよいのだろうか?」「よいアイデアはないのかな?」と感じていたことについて、具体的に例を挙げて説明していただいて非常に参考になった。特に中学校との連携では、小学校で学習したことが中学校にどのようにつながっているのか知ることができた。またSmall Talkの進め方では、私自身英語で話すことに苦手意識を感じていたが、英語を話すことにチャレンジしている姿を示すことが大切とすることで、考え方を変えていくきっかけとなった。

また、ALTとの連携についての講座が役に立った。これまでは、打合せのときに全体の流れをなんとなく話していたのだが、講座後は「どのようなデモンストレーションをするのか」「どんなフレーズを言ってほしいのか」というALTの具体的な役割を中心に話すように心がけるようになった。

浦安市立明海小学校教諭、特別支援学級担任

今まで外国語では、教科横断的に扱うことがあまりなかったが、今年度の6年生では、家庭科の内容を扱った。講座の中でのアドバイスが役に立ち、子供たちは必要性をもって英語に取り組むことができた。また、算数など、他の教科でも英語で伝えるヒントをいただいた。簡単な計算など英語で伝えられるものを考えながら、これからの授業で生かしていきたい。

また、Small Talkの内容についても改めて知ることがあった。いつも『ALTと一緒に話をし、その内容を児童が聞き、内容を理解する』という方法を取っていたが、高学年になったときには、児童同士でSmall Talkができるようになるとなおよい、ということを知った。まだ実際に児童同士でSmall Talkをさせた経験はないが、学年最後の単元では、ぜひ児童同士のSmall Talkを取り入れてみたい。

浦安市立明海小学校教諭、6年担任

「対話方略」をSmall Talkの中に入れていく必要があることを学んだ。対話方略は、①対話の開始 ②繰り返し ③確かめ ④一言感想 ⑤さらに質問 ⑥対話の終了、の6つになる。早速授業で取り入れてみたところ、②の繰り返しは、相手の話を聞いていないと繰り返せないで、やり取りに程よい緊張感が生まれた。正しく聞き取ろう、聞き取れなかったら聞き返そうとする姿勢が見られるようになった。また、Small Talkでは、児童のやり取りを優先していたが、ビデオを見て、専科やALTがもう少し中に入っていてもいいのかな、と感じた。このあたりも改善していきたい。

浦安市立日の出南小学校主幹教諭、外国語専科

講座を通して、「英語は誰でもやればできる」という気持ちをもたせること、「英語は間違えながら上手になる」という雰囲気を作ることが授業をする上で何よりも大事なことを改めて感じた。そして、「できた」「わかった」場面を作るために、褒めるレパトリーを増やしたり、具体的に言葉で伝えたりすることを大切にしていきたいと思った。子供たちが挑戦しやすい雰囲気作りを第一に考え、授業と一緒に作るALTとよい関係を構築するために、積極的にコミュニケーションを図り、今後も挨拶や感謝の気持ちを忘れずに関わっていきたい。

浦安市立日の出小学校教諭、5年担任、外国語担当

5. 秋田県横手市教育委員会の総括

本市においては、横手市立雄物川小学校を拠点校とし、本講座を活用した外国語教育研修会を実施した。参加者は、小学校教員22名(うち学級担任21名)、専科教員2名、教育専門監1名、計25名である。拠点校の教員5名に加え、横手市内の全小学校(17校)から参加者を選出することで、研修内容を全市へ広めていくこ



とを目指した。参加した小学校教員の外国語活動・外国語の指導経験年数別内訳を見ると、指導経験5年以内の教員が全体の6割を占めており、「学級担任の指導に対する不安の軽減と指導力の向上」という本講座の目的達成に、大きな成果が期待できる参加体制であったといえる。

(1) 実施方法

本講座はオンラインにより実施されたため、コロナ禍で人的交流が難しい中でも、外国語教育を専門とする講師の方々から、良質で実践的な講座を受講することが可能となった。複数回にわたる講座の実施については、「全5回の長期的研修であったために、講座で学んだことを授業に生かし、新たに生じた課題をもって次の講座を受講することができた」との感想が参加者から寄せられたように、理論と実践を往還しながらの研修効果は大きかったといえる。また、MEIKAI-JOE専用ホームページで、各講座の資料や動画を必要



な時にいつでも見直すことができたことも大変有効であった。今後、研修を希望する教員がより受講しやすい体制にするためには、夏季・冬季休業中を中心とした実施や研修形態の多様化が望まれる。各講座の目的や内容に応じて、オンラインとオンデマンドの講座を組み合わせることも有効であると考えられる。

(2) 講座内容

第1回講座では「小学校英語が目指すもの～学習指導要領の理解～」のテーマのもと、学習指導要領改訂の背景から目標・内容の理解、小学校外国語教育が目指すもの等について、指導の根幹に関わる内容を研修した。この講座での学びが、第2回以降の各講座の内容と有機的に結び付き、研修内容の本質的な理解を可能にした。「これまで何となく行っていたことが、一つ一つ自分の中で価値付けされ、今後は自信をもって指導することができそうである」との感想が示すように、全5回の講座が一貫した指導観のもと、効果的な配列で実施された成果であると認識している。

本市が実施したアンケート調査においては、本講座の中で学びが大きかった内容として、①小学校英語の授業づくりのポイント、②Small Talkの実際、③必然性のあるアクティビティの設定、④英語学習の動機付け、⑤ALTとのラポール構築、⑥評価場面や方法の工夫等が挙げられた。特に参加者からの事前質問を考慮し、実際の授業場面に即して行われる講座は効果的で、参加者の授業改善に向けた意欲の高まりにもつながった。実際多くの参加者が、受講後にこれらの内容について実践し、言語活動での児童の意欲的な取組やALTとの協働による授業づくりの成果等、自身の指導に関する好ましい変化を感じている。また、同調査における外国語活動・外国語の指導に係る課題においては、「学習評価の在り方」と「小中連携」の割合が、昨年度までと比して格段に高まった。これは第4回及び第5回講座での学びが、指導と評価の一体化の実現、7年間を見通した外国語教育の推進という、次なる課題への意識の高まりにつながったものと捉えている。

本研修は、教員の指導における不安の軽減、そして実践的な指導力の向上において大変有意義なものとなった。また、オンラインによる講座の実施は、今後の各校におけるICTの効果的な活用に資するものであった。本市においては本研修の成果を今後の施策につなげ、外国語教育のさらなる充実を目指していく。明海大学による本講座の企画と遂行、講師の方々の方々の丁寧で温かな指導、そして関係各位の協力に心より感謝し総括とする。



6. 秋田県横手市受講者の感想

今回の研修はどの回も実際の授業ですぐにやってみよう、使ってみようと思えるものであった。特に印象に残った研修は、ALTとの望ましいチーム・ティーチングの在り方とSmall Talkの実際である。Small Talkの実際をビデオで見せていただき、なかなかつかめなかったイメージをもつことができた。ただ話すのではなく、本時のめあてや題材、活動に結び付ける話題を見付けていくことが大事だと感じた。高学年になった子供たちが「自分たちで話したい」という意欲をもって活動に臨めるように、3年生からスパイラル的に何度もインプットする機会を計画的に作っていくことが必要である。そのためにも、ALTとの普段からのコミュニケーションをもっと意識して、会話することが楽しい、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりすることで新たな発見があるということ、自分の姿を通して子供たちに伝えることが大切だと改めて認識することができた。

横手市立雄物川小学校 丹尾 豊美

新学習指導要領が全面実施となった今年度、私は日々授業を行う上で「改訂の趣旨を踏まえた学習指導を行うことができているのか」という不安を抱えていた。そんな中、MEIKAI-JOE研修会を受講する機会をいただき、ALTとの効果的なチーム・ティーチングの在り方やSmall Talkの実践方法、学習指導と評価の関連性など、これからの外国語教育に求められる指導内容を学ぶことができた。どの講座も授業にすぐに活用できる実践的な内容が多く、講師の先生方の専門的かつ具体的な説明も大変参考となった。実際、研修で学んだことを授業に取り入れてみると、以前よりも子供たちが生き生きと活動し、自ら進んで英語を聞き、話そうとする様子が見られるようになった。大変有意義かつ貴重な経験を得られたことに感謝するとともに、これからも子供たちのロールモデルとなって積極的に英語を活用する姿勢を大切にし、指導に当たっていききたい。

横手市立旭小学校 甚内 大輔

本研修に参加したことで、外国語教育についての新たな知見を得たり、これまでの自分の指導を振り返ったりするよい機会となった。研修における「理論」に加え、事前・事後そして講義中のタスク、映像の視聴などを通して、より「実践」に近い内容を学ぶことができた。第2回講座では、「ALTとのラポール構築の重要性」について学んだ。これは、授業中の自然な会話(Small Talk)など授業づくりをしていく上で欠かせないものであると同時に、日々の関わり方も大切であると感じた。研修後は、授業開始前や放課後などにALTと会話する機会を増やし、これまで以上にコミュニケーションをとることを意識するようになった。今後もこれを続けていき、こうした姿を児童にも積極的に見せていきたい。また評価に関しては、成績のためだけに留まらず、意欲向上につながる評価にしなければならないと考えた。多様な方法を用いると共に、児童一人一人の取組をしっかり見取り、適切に評価し(褒め)ていくことを心がけたい。

横手市立横手南小学校 清水 知

小学校で外国語を指導することに対して、どうしても不安や緊張が先に立ってしまう現場の先生方にとって、ALTとの信頼関係づくりのノウハウから、実際の評価の手順や考え方で、今まさに知りたい内容が満載の講座であった。いつも近くにいる、子供たちのことを一番よく理解している学級担任の先生方。その先生方が願いをもってプランを立て、子供たちの興味や意欲が高まる方法と一緒に学びを楽しむ。そのように考えれば大丈夫であると、講座を通して励まされたように思う。学級担任とALT、専科教員が役割を分担し合い、何より子供と指導者、指導者同士、そして子供同士が英語によるコミュニケーションを楽しんで行う授業を今後も一層目指していきたい。

横手市立横手南小学校(専科教員) 伊藤 久美

7. 講座担当講師

第1回講座 学習指導要領(藤田 保)

私が担当した第1回講座では、その後に続く具体的な教え方や評価法を学ぶに先立って、すべての基本となる学習指導要領で定められている外国語活動や外国語の目標、理念等をきちんと確認することを念頭に置きながら講義を行った。その中でも以下のような点は特に重要だといえる。

第一点は、意味のあるコンテキスト(目的・場面・状況)の中でことばに触れることにより自然と慣れ親しみ、使いながらことばを覚えていくことの大切さである。かつての中高での英語授業のように知識・技能に偏った指導をしてしまうと「使えない英語」を学んでしまうことにもなりかねないが、いつ・どこで・誰と・何のためにことばを使うのかを意識しながら学び、また、ジェスチャー等の非言語コミュニケーションの手段も用いて試行錯誤を重ねながら実際の言語活動に取り組みながら学ぶことによって「生きた英語」を身に付けることにつながっていく。また、自然な文脈で自分の気持ちや考えを自由に表現する活動を多く取り入れることで思考力・判断力・表現力を涵養するのに役立つであろう。

第二点は、校種間の接続を意識しながら小学校における外国語/外国語活動では何をすべきなのかを自覚的に授業をすることの重要性である。小学校での学習が中学校や高等学校での学習の基盤になることは言うまでもないが、それは当然ながら中学校の学習内容の準備を小学校で行うことではない。小学校としての目標をもって、この時期にしかできないことを身に付けることが何よりも肝要である。明示的な文法知識などを身に付けるのは中学校以降の話で、小学校では体験的に英語を学び、コミュニケーションを行う楽しさを知り、積極的に学びに向かう態度を身に付けることの方が大切である。この段階を経ることなしに文法や語彙などの知識だけを身に付けようとする、せっかく覚えた知識をいざ使おうという段になると気後れして使えないということになる。また、使うことを躊躇しては自らの考えを相手に伝えることも叶わなくなってしまう。

この点については、学習者である児童だけではなく、教える側の教員にとっても非常に大切な点である。担任の教諭が「自分は英語が得意ではないから」と教室で英語を使うことに対して尻込みをしていたのでは、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けることは期待できないであろう。それゆえに、先生方には「英語の見本」ではなくてもよいので、代わりに「英語を使う人の見本」となっていたきたいと切に願っている。先生方が堂々とした態度で毎回の授業中に英語を使って見せることで、それが児童たちにとってのロールモデルとなり、それを見て育った子供たちが大人になったときには、必要に応じて英語を当たり前のように使うようになるであろう。

今回の一連の講座を通して、受講していただいた先生方が自分の授業に対して少しでも自信をもって取り組めるようになり、よりよい授業を行うためのヒントを得ていただければ、それは講師を務めた者の一人として存外の喜びである。

最後に、この講座の企画・構成・実施をしていただいた明海大学の教職員の皆様、特に技術的な支援をしていただいたモアカラーの皆様、J-SHINE事務局、さらに、足立区・浦安市・横手市の教育委員会の皆様、そしてこの講座を受講してくださった先生方一人一人に感謝の意を表したい。

第2回講座 効果的なチーム・ティーチングの在り方(百瀬 美帆 パトリツィア・ハヤシ タイソン・ロード)

1. 講座内容決定の経緯と意義

講座全体の設計において、第2回講座ではチーム・ティーチングにおける学級担任とALTの役割を明確に示すことと、学級担任が感じているALTとの打合せ時の意思疎通の方法、効果的なコミュニケーション活動等を講師のデモンストレーションと受講者とのインタラクションにより示すワークショップ型とすることが決定した。

2. 講座の構成

第2回講座の特徴は事前課題及び事後課題の充実である。事前課題では学級担任がALTとの親和関係（ラポール）を構築する具体的なやり取りを動画で示し、講座において受講者が講師とオンラインでインタラクティブを行った。事後課題では絵本の読み聞かせ活動の実践例を動画で示し、受講者が今後の指導の資料として活用できるようにした。

3. 講師による振り返り

ティーム・ティーチングは、日本の英語教育において児童・生徒が必然的に英語を使う場面を作り出せる非常に有効な指導方法である。効果的なティーム・ティーチングに必要な要素の1つは、指導者間のラポール、つまり親和関係の構築である。ラポール構築に関する先行研究はまだ少ないため、私たち3名のチームが対処すべき必要性を感じた。内容、発表方法についての議論を重ね、私たちは小学校の学級担任が何度も利用できる資料のポートフォリオを作成することを決定した。これらの資料は、事前資料、ワークショップ資料、及び事後資料に分けられた。さらに、私たちの全体的な目的は、小学校の教師にこれらのスキルを実践する機会を提供するとともに、教室でT1の役割を引き受ける自信を育むことであった。

第2回講座はインタラクティブなワークショップで、足立区、浦安市、横手市の先生方がALTとのラポール構築を実践した。参加者は非常に熱心で、事前資料の動画で提示したラポール構築のための方策を使ってみることができた。講座ではラポールを築くだけでなく、授業計画をALTに効果的に説明することにも焦点を当てた。これは、小学校の授業をスムーズにし、英語の授業へのチームとしての取組を実現するために不可欠なことである。実際にオンラインで活動している様子を観察してみると、英語で授業計画を説明するのは難しい場合があることが明らかであったが、この講座で示したかったのは、コミュニケーションは完全に英語である必要はないということである。事前課題と事後課題に示した重要なフレーズは、T1である学級担任がALTとの意思疎通を図るために役立つので今後も活用していただきたい。

多くの先生方がワークショップを楽しんでいるように見えた。さらに、MEIKAI-JOE Webサイトに収めた資料にはいつでもアクセスでき、今後のティーム・ティーチング計画のための情報資源となるように設計されている。これらの資料には、ラポールを築くための具体的な方法、ALTに授業計画を説明する方法に関するビデオ、モデルコミュニケーション活動計画、コミュニケーション活動計画テンプレート、ティーム・ティーチングモデルビデオレッスン、チームで効果的に教える方法を示すビデオが含まれている。絵本の読み聞かせ指導例、及びリズムチャンツの練習活動例のビデオの作成に携わってくれた明海大学英米語学科教職履修学生の皆さんに感謝する。また私たちのワークショップと本事業に参加し、支援してくれたすべての小学校の先生方と教育委員会に感謝する。

第3回講座 Small Talkの実際とデジタル教科書への接続（石鍋 浩・前田 隆子）

第3回講座では、Small Talkの目的や留意点を学び、単元目標と関連した効果的なSmall Talkができるようになること、及びSmall Talkからデジタル教科書への接続について考えることを目標とした。

講座修了後のアンケートによると、「講座内容は学校現場のニーズに合っていたか?」という質問に対して、94%が肯定的意見を述べていたことから、裏を返せば、Small Talkやデジタル教科書に対して不安感や苦手意識をもっている参加者が多かったということがうかがえる。

本講座の特徴は3点あった。1点目は対話方略を使って、できるだけ長くSmall Talkが続くように練習することだ。対話方略として、①対話の開始、②繰り返し、③確かめ、④ひと言感想、⑤さらに質問、⑥対話の終了の6点を具体的に紹介した。講座参加者にこの対話方略を身に付けてもらうために、2つの方法を試みた。1

つは、本学で教職課程を履修する学生に教師役と児童役を割り振り、対話方略について学ぶ前と後でSmall Talkがどのように変化するかをビデオで撮影したのを見てもらうことだ。教師役の本学学生に指導した内容を具体的に示し、授業内容が大きく変化したことを目の当たりにし、対話方略の重要性を認識してもらえたようだ。2つ目の方法は、実際に参加者にSmall Talkを体験してもらうことだ。チャレンジタイムで『We Can! 1&2』を使用して、各研修会場でペアになってSmall Talkをしてもらい、その後Zoomの画面を通して講師と参加者でやり取りを行った。どの会場からも積極的な参加がみられ、講師であった筆者もとても楽しくSmall Talkを行った。またアンケートによると、講座中のこのようなタスクが「役立った」という回答が94%とかなり高い割合を示し、これが満足度にも繋がったと言えるだろう。

講座の特徴の2点目は、担任がひとりで授業を行うことを想定し、講師がSmall Talkを活用した模擬授業を実施したことだ。『We Can! 2』のUnit 8 What do you want to be?をテーマに、既習事項(過去を表す表現)を使用し定着を図ったり、対話方略の「質問」、「繰り返し」、「さらに質問」、「ひと言感想」を使用して、3分ほどのSmall Talkを行った。ここでも対話方略を具体的に確認することで、参加者が自分の授業で実際使ってみようという気持ちにつながることを意識した。

3つ目の講座の特徴は、教員用デジタル教科書の便利な機能の紹介と活用法である。教員用デジタル教科書には、音声、映像、チャンツ、歌、アクティビティなどの付属機能も多く、発音が苦手な教師はこれを活用して電子黒板等で児童に提示できる。しかし、デジタル教科書に全てを任せるのではなく、どのような授業を展開したいかを教師がしっかりと意識し、教師側のねらいに沿った使用が肝要であることを強調した。

講座内容に対しては、86%が「適切」と回答していたが、一方で12%が「難しかった」と回答している。Small Talkに対して苦手意識が強い教師にとっては、6つもの対話方略を使いこなせる自信をもてないのも当然であろう。しかし、全ての方略を使用しなくても、明日の授業では「繰り返し」を使ってみよう、その次は「ひと言感想」を言ってみよう、という具合に1つずつ挑戦して、成功体験を積み上げることが重要である。また、既習事項とどう結び付けるかも少し難しい要素であるが、講座内でも強調したとおり、同僚やALTに助けを求めて、協力を仰ぐことを躊躇しないほしい。さらに授業内では、「間違っても言ってみる」という姿勢を教師が見せることで、児童たちも間違いを恐れない態度を身に付けることにつながることを希望する。

第4回講座 小学校英語の授業づくりと評価について—小中連携の視点を通して(佐藤 久美子)

1. 「小中連携の視点を通して」の意義は

今回、このタイトルで研修を行ったのには、小学校と中学校の外国語には共通点が多いことをまずはご理解いただきたいと考えたからである。第1に、3・4年生の外国語活動、5・6年生の小学校外国語科、中学校外国語科ともに、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、(読むこと)、話すこと、(書くこと)の言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」(括弧内は、3・4年生は含まれない)という共通目標がある。「言語活動」とは、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を指し、発音練習やビンゴなどのゲーム、英語の文字をひたすら書く活動は含まれない。

第2に、言語の使用場面としては身近な場面を選ぶことと指導要領に書かれているが、家庭・学校・地域の行事などは、小学校と中学校ですべて共通している。特有な表現が使われる場面もまた、自己紹介・買い物・食事・道案内・旅行と共通している。すなわち、小学校の英語は単に楽しいだけでなく、必然的な場面を設定して、目標表現の定着を目指して学ぶと共に、中学生と同様に自分の思いや考えを表現する言語活動が求められるということを、認識することが大切だと考えたからである。

さらに、3・4年生が70時間、5・6年生が140時間英語を学ぶので、その総時間数は現在の中学校3年

間の総時間数140時間を超えることになり、小学校英語教育への期待は大きい。

2. 小学校の授業づくりのポイント

小学校の授業づくりのポイントは、第1に授業構成を一定にし、教師と児童、あるいは児童同士の「やり取り」の多い授業を組み立てることである。ウォームアップ、復習を兼ねて、前回学習した単語や表現をチャンツで練習したり歌を歌ったりする活動に始まり、新しく学習した目標表現や単語を定着させるActivityへとつなげる。第2に、明確なめあて、ゴールを設定し、見通しがもてる授業づくりを行う。特に、単元の終わりに児童による発表を意識する授業づくりが大切である。そのためには、Activity、最終発表において、対話的で必然性のある場面を導入する。例えば、教科横断的な学習を導入することもできる。昆虫の足の数や色を使ったWho am I?クイズを英語で作成したり、都道府県について気候や産業などを、ICT機器を使ってグループで調べたり発表するなど、対話的な深い学びへと導くこともできる。講座後のアンケートには、「もっとこうした具体的な言語活動について知りたい、機会がさらに欲しい」というご要望が多数あった。

3. 評価について

講座後のアンケート結果において、「講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか」は、とてもそう思う、まあそう思う、合わせて94%と高かったことから、具体的な活動を通しての評価の付け方に大いに関心があることがうかがわれる。授業づくりのポイントをPDCAサイクルで回せば、児童への評価と共に、授業への反省・改善にもつながる。「聞くこと・話すことにおいて、What do you want for your birthday?を聞き取り、I want a bicycle.と答えられれば『よくできました』のb評価だが、さらにOh, you want a bicycle. I want a watch.と答えられたら、思考・判断・表現や主体的態度においても『大変よくできました』のA評価になる、と各学校で決めることができますよ」という具体的な話に、大いに納得していただいたと思われる。今後もこうした研修の機会を増やし、現場の先生方の不安を少しでも解消したいと切に思った。

第5回講座 小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待(金子 義隆、石鍋 浩)

1. 講座内容決定の経緯と意義

まず、講座開発チームによって、第5回講座は最後の講座ということでまとめの内容を扱うことが決められた。受講者への事前アンケートの結果を基に、子供たちの動機付けについて受講者の関心が高いと判断して、子供の英語学習に対する意識づけ及びそれに対して指導者のもつべき考え方を中心とすることに決めた。さらに、第1回講座で扱った宣言的知識と手続的知識の役割に対してのさらなる理解の重要性を考慮して、第2言語習得の知見も盛り込むこととした。また、中学校への接続も小学校英語教育の重要な課題であることから取り入れることとした。このように、第5回講座の内容は、講座開発チームでの議論、受講者の事前アンケート、そして、これまでの小学校英語教育の課題を踏まえて決定した。それ故に、取り上げたテーマはどれも意義深いものと言える。

2. 講座の構成

第5回講座の大きな特徴は講座の構成である。最初に、上述した主たる講座内容の講義が2名の担当講師によって行われた。その後、第1回から第4回講座の担当講師及び協力機関J-SHINEの事務局長から順次受講者へメッセージを送る構成をとった。これは、最終回となるこの講座だけの特徴的な構成となった。当初は、受講者からの講義に対する質問を受ける時間も用意していたが、予想以上に時間が足りなくなり、結果的にその時間を取れなかった。

3. 評価アンケート分析を通して

評価アンケートによれば、「学校現場のニーズに合っていたか」という問いに対して、81%が肯定的に回答していた。また、「講座の内容は適切か」という問いに対しては、やはり81%が「適切だった」と回答している。大部分の受講者にとって、意義深い講座となったようである。一方、15%が「簡単だった」と回答した。どうやら、これは受講者の「指導経験の長さ」に影響を受けた結果のようである。受講者は、比較的指導経験の浅い教員が多かったが、中には指導経験が10年を超える教員も含まれていて多様性があった。

次に、講座の総合的な満足に関する問いに対して、78%が肯定的に回答していた。大部分の受講者は講座に満足したようだ。ただ、本講座は講義中心で受講者がタスクを行うような実践的場面がなかった。これは、上述したように講座内容から判断して講義中心と決めたわけだが、受講者の一部はより具体的で実践的な、すぐにでも授業で取り入れられるアクティビティやアイデアを望んでいたことが「全講座総合評価アンケート」の結果から読み取れる。そういう受講者には物足りないと思われたかもしれないが、指導者の英語指導における理念は根本的なことで非常に重要な資質である。この点を踏まえて実際の指導に当たっていただくことが肝要なので、今回の講座で受講者がその点について理解を深めることができたことが成果だと考える。

8. J-SHINE (鈴木事務局長)

はじめに、本事業の委託を受け、講座の企画・実施をしていただいた明海大学の皆様に心より感謝申し上げます。また、実際に研修に参加していただいた、足立区・浦安市・横手市の教育委員会の皆様、教員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

本事業は新型コロナウイルスの感染が長期化する状況下、オンラインで研修を行うという、新たな試みの実証の意味も込められており、その通信・機材・技術支援等についてはこれらを専門に担うサポートが必要不可欠であり、モアカラーの皆様には多大なるご協力をいただいた。ありがとうございました。

さて、実際に第1回講座から第5回の講座に至るまでの間、多くの教員の皆様にオンラインで研修を受講していただいた。実際の講座が始まるまでの間、明海大学の関係者の皆様、教育委員会、学校関係者の皆様はオンラインで研修を行うことに不安や戸惑いがあったかと推察される。ところが、実際に研修が始まり、グループワークや質疑応答に参加していただいている様子を画面上で拝見させていただくと、オンラインでの研修であっても講師が伝えようとしていることは十分に受講者に届いている様子を見ることができ、オンライン形式の研修であっても十分に講座を開講し、満足する内容で実施することができることが証明されたと思われる。このことは、実際に講座を受講していただいた教員の皆様の満足度もアンケート結果でも証明されており、今後のオンラインでの研修の可能性を広げる結果をもたらしたことが本事業の大きな成果の一つになったと感じる。

また、本事業の講座実施に際しては、事前タスクの確認、講座受講、事後タスクやリフレクションシートへの回答等、参加いただいた教員の皆様においては業務ご多忙にも関わらず、多くの時間と労力を掛けてご参加いただいた。そのご協力も得て、講座の詳細(動画や資料)を含めてアーカイブとしてホームページ上で誰もが閲覧できる成果物を作成したことは後世への大きな成果になると思われる。今後、このホームページを中心とした本事業の成果については、今回の講座を受講いただいた皆様に学び直しの機会として活用いただくことに限らず、他校の教員の皆様や他教育委員会の先生方にもご活用いただくことが求められる。J-SHINE事務局としては今後とも、明海大学の皆様と協力し、本事業の成果普及に努めて参りたいと考える所存である。

最後になるが、授業を進行する学級担任の先生においては、外国語だからと気負う必要は全くなく、他の教科と同じように指導していただくことが何より重要であると考えます。「外国語に自信がないから」「発音を間違えたらどうしよう」など、心配しすぎる必要はない。先生ご自身が児童と一緒に学びを楽しむその姿勢こそが、児

童の学ぶ意欲向上につながるということは他の教科と同じことである。ぜひ、自信をもって外国語の授業に取り組んでいただき、本事業がその一助となれば幸いである。

9. 運営業者（株式会社モアカラー）

1. 講座配信事前準備

配信業務を行うにあたり、各拠点校に配置する機材の設定を行い、Zoomでの受講に問題がないことをテストした。また機材に不慣れな担当者でも初期設定ができるようマニュアルを準備し、配信を実施する前に現地との疎通テストを行って、各拠点での通信に問題がないか確認した。特に当初予定から追加となった拠点校である足立区立亀田小学校については、現地に赴いて状況を確認。亀田小学校の環境に合わせて講座を受講できるよう、Zoomの設定及び手順を協議。問題点を解消した。



各講座を担当する講師の先生とは事前の協議を行い、講座の内容、使用する資料や動画などの情報を共有いただき、配信に必要な機材の調整、準備を実施した。特に複数の講師が登場してデモンストレーションを行う第2回講座については、技術的な課題を講師の先生方と協議し、手法の変更を行うなど事前対応に時間を割いた。第3回については講座内で使用する模擬授業の撮影・編集も対応した。

2. 講座配信

講座はWeb会議ツールであるZoomを利用し、Webinar形式で実施した。

5回の講座それぞれの内容に対応するため、スタッフは講座開始6時間前に現場に入り、各回の配信の準備を行った。拠点校との接続については講座開始の20分前から開始し、問題がある場合にはその対応ができる時間を確保した。一部講座において拠点校からのアクセスが遅れるトラブルが発生したが、現場の尽力により解消した。



講座実施中は受講者と講師のコミュニケーションが疎とならないよう、資料画面だけになる時間をできるだけ少なくし、講師の顔や身振り手振りが受講者に見える構成を目指した。

特に第2回、第3回、第4回については受講者が自身の授業の参考にできるよう、講師と資料が同一の画面に入ること、講師の表情が受講者に伝わることなどに配慮した構成とした。

3. Webサイト構築

本事業の発信と受講者への情報提供のため、Webサイトを開設した。

Webサイトは様々な状況からのアクセスを考慮して、レスポンスデザインを採用し、PCだけでなくスマートフォン、タブレットでの閲覧にも対応した。

各回終了後はアーカイブ動画と講座で使用した資料、及び講座後の課題を予定どおり掲載したのに加え、受講者からの質問へ講師の先生が回答する内容を掲載した。



終わりに

我が国の英語教育、とりわけ公立小学校段階における英語教育の導入については、平成4年の研究開発学校の指定にその端緒をみることができる。ここでは国際理解教育としての小学校英語の実験的導入であったが、平成10年の小学校学習指導要領改訂の告示により平成12年4月から「総合的な学習の時間」が導入され、全国の小学校でいわゆる英語活動が広く行われる契機となった。また、昭和62年からは、外国青年招致事業、いわゆる「JETプログラム」により来日したALT(Assistant Language Teacher)とのチーム・ティーチング(team-teaching)という手法が導入され、この頃から多くの小学校の現場では、外国人と日本人教員とが協働授業を行う風景が見られるようになった。平成15年には、構造改革特別区域制度の下、教育課程の特例を活用した英語教育が広く行われるようになった。平成20年3月には中央教育審議会の答申を受けて、小学校5年と6年に週1コマの「外国語活動」の位置付けをした小学校学習指導要領改訂の告示が行われ、平成23年4月から、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として、「外国語活動」が全面実施となった。とりわけ刮目すべきは、平成25年5月に教育再生実行会議第3次提言を受け、文部科学省が同年12月に公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」であった。ここでは、小学校「外国語活動」を中学年(第3・4学年)に移し、高学年(第5・6学年)には、週3コマの教科としての外国語(英語)を実施すると明記したことである。さらには、この「実施計画」を検討するために文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」が平成26年9月に「今後の英語教育の改善・充実方策についてーグローバル化に対応した英語教育改革5つの提言」と題する報告を行った。その後、平成28年12月には、中央教育審議会は、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)を導入するといった答申を行った。これを受け、平成29年3月には、小学校学習指導要領の改訂が告示され、平成30年4月からの移行措置に伴い、『Let's Try!』(中学年)と『We Can!』(高学年)といった補助教材の配本・使用が始まった。令和2年4月から小学校学習指導要領が全面実施となり、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)が始まり、現在に至っている。

令和2年からの小学校学習指導要領全面実施までの間、文部科学省の様々な環境整備についても計画的に実施されてきた。先に述べた補助教材の作成、英語教育推進リーダー養成研修、専科加配教員の配置、ALT等の配置拡大、英語教育強化地域拠点事業や外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の立ち上げ、小学校外国語活動・外国語に関する各種映像資料の公表など様々な事業がその中心である。加えて、現職の小学校の教員に対する研修を充実するとともに、教員を養成する大学の教職課程の改善にも着手した。具体的には、英語教育コアカリキュラムの中で、小学校教員を養成する大学にあっては、これまでは、履修の義務付けはされていなかった外国語を学修することが求められ、小学校免許を取得する者は必ず外国語(英語)を3単位履修するよう免許法が改正され、令和元年度の大学入学生から適用された。

こうした中であって、今回、明海大学が、「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」を受託して、小学校の先生方に講座を提供することができたのは、まことに光栄なことであると考えます。受託期間は短いながらも、都合5回にわたり講座を実施できたのも、J-SHINEや東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会そして秋田県横手市教育委員会の皆様、(株)モアカラーの支援があったことに他ならないと考えます。ここに篤く関係各位に対して深甚から感謝の意を表したい。さらには、今回参加された200名の小学校の先生方の指導力向上を祈念するとともに、日本の小学生が英語の使い手としてグローバルな世界の中で成長することを願って止まない。

今後とも、明海大学は、英語教育に関する研究を重ね我が国をリードする大学として評価されるよう誠心誠意努めていく。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、明海大学が実施した「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」の成果をとりまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

文部科学省委託

令和2年度教員養成機関等との連携による
小学校外国語の専門人材育成・確保事業

（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）

— MEIKAI-JOE 小学校外国語科等講座 —

成果報告書

令和3年3月

明海大学

〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目



明海大学